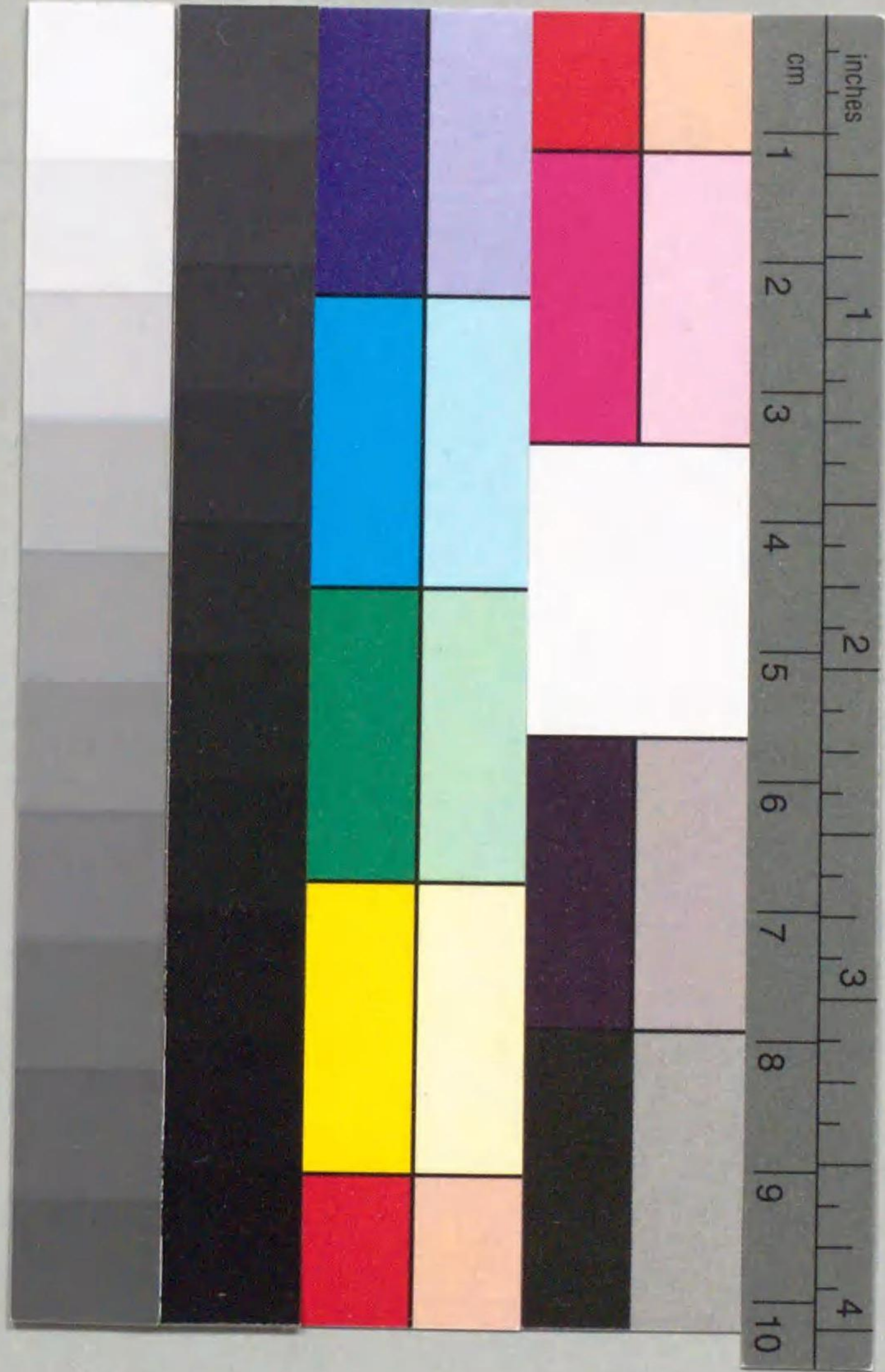


971
~~K~~
24



E



紫式部



山本榊江著

9
2

紫 部

著 江 榘 本 山



版 社 習 學



は し が き

日本の國が肇はじまつてから今日まで、その長い長い年月の間に、何億とも知れない無数の人々が、この國に生せいをうけ、そして、死んでいきました。いふまでもなくそれらの人々は、或は政治たじに携たづはるとか、武器をとつて國を守るとか、または、學問・藝術・農業・商業などといふやうに、それぞれ自己の職務をもつてをり、生きてゐる間中、どうかしてその職務を、よりよく果たしたものと、ひたすら努力を續けてきたのでした。ただ、その人々の才能とか、熱心の度合、また、運のよしあしなどの相違によつて、大きな功績をあげることができた人と、さうでなかつた人との別ができ、また、そのために歴史の書物に書き記されて、今日までその名の傳はつてきた人と、地下はつちに葬はつちられるとすぐ、忘れられてしまつた人との違ひが、生まれてゐるにすぎません。

しかしながら、たとへ、どんな相違があるとしても、この尊い三千年の歴史は、全くかうした有名無名の代々の國民が、御歴代の皇室を中心に、自己の職務を、より忠實に果さうとする、ひたむきな努力によつて、築きあげられたものにほかならないのであります。従つて、

今日の日本が、力強い武力と共に、政治・學術・經濟等、文化の各部門に於ても、調和した發達を示してゐることもまた、畢竟かうした代々の國民、即ち、我々の先祖の人々のかうした努力の賜物に、ほかならないといふことができます。

今、それらの中で、文學の方面だけについて考へてみますと、その發達に、非常に大きな貢獻をした者の一人として、實に、今から約九百年の昔、平安期中頃に生きた紫式部を、誰も忘れることはできないであります。紫式部が、『源氏物語』の作者であることは、今更いふまでもありません。

實際、式部がこの物語を作るまで、日本には、ほんたうに立派な小説といひ得るものはありませんでした。しかも、その後、この物語に勝るものは、誰も書けなかつたのです。そして、これは、すべてで五十四帖にも及ぶ、それでゐて、非常によくまとまつた小説です。

それでは、そんなに立派なものを書きあげた紫式部といふ人は、一體、どんなに偉い人だつたでせうか。どうして、そのやうな物語を書くことになつたのでせうか。そして、その中には、どんなことが書かれてあり、また、どこに、そのねうちがあるものでせうか。

かういふことについて、詳しく書いたのが、この本です。

これを読んで下さる方々が、かういつたことをわかつて下さり、學者として、同時に、母としての偉大な式部の人格から、何ものかを得て下さつたら、ほんたうに嬉しいと思ひます。著者は、身に及ぶだけの力をこめて、この本を書きあげました。そして、この本を、日本の勝利の大本をうち立てた大東亞戦争の輝かしい記念の日に、青少年の皆様へ、捧げたいと思ひます。

大東亞戦争の一周年に

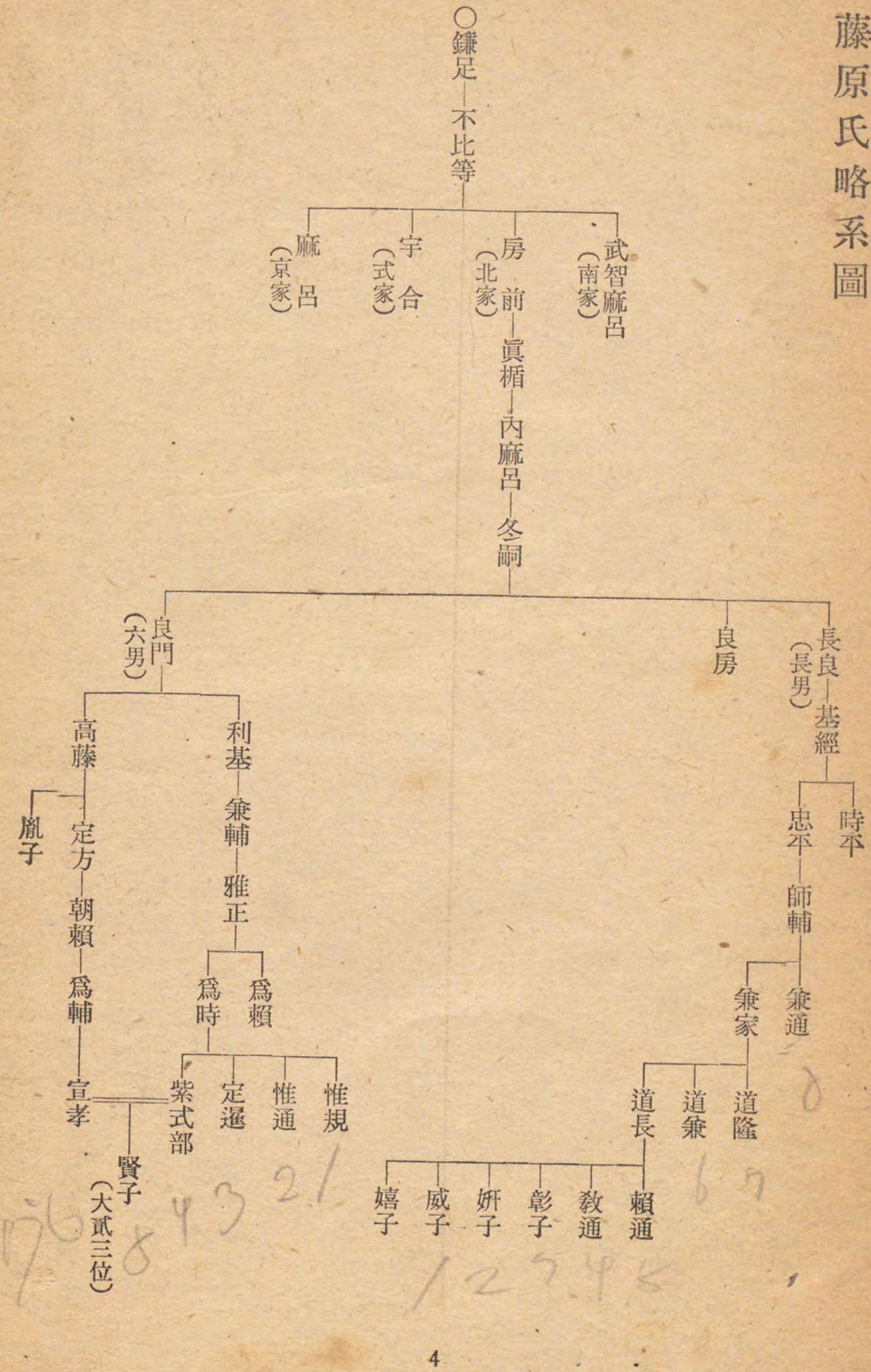
著者しるす



目次

- 一、學者の父……………一
- 二、男なりせば……………二
- 三、越の白山……………三五
- 四、宇佐の使……………四
- 五、試験に堪へて……………六
- 六、佗び住まひ……………七
- 七、宮仕へ……………八六
- 八、才女の集ひ……………一〇一
- 九、みつむる心……………一一九
- 十、創作に生きる……………一三三
- 十一、紫の君……………一四七

藤原氏略系圖





三、雁のゆくへ……………一五

三、不滅の光……………一八五

紫式部に關する年表……………一九九

附記……………二〇三

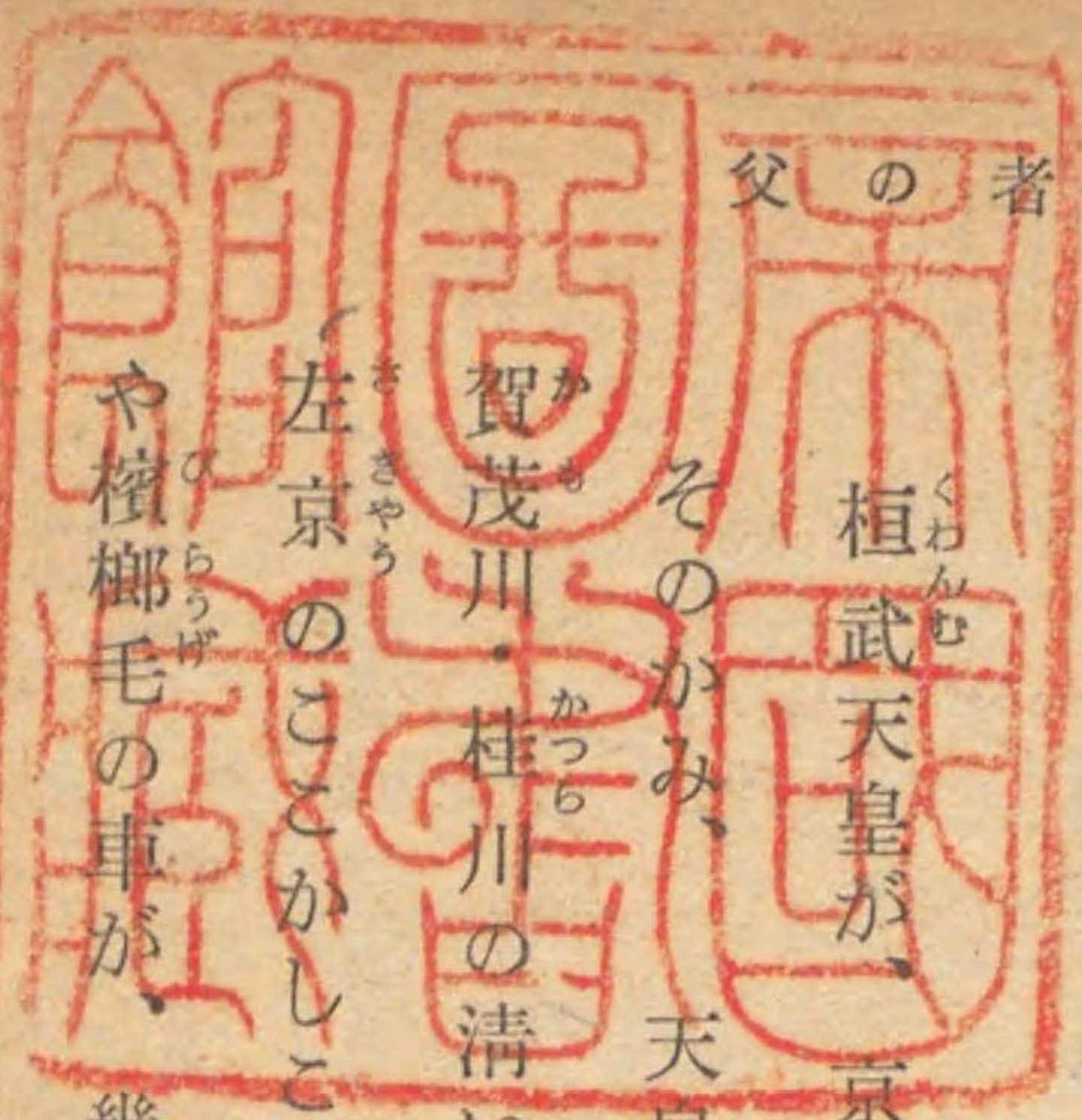
装幀 岡村夫二男
挿畫 村田 閑

紫 式 部 目 次 終

紫 式 部

山 本 梶 江

學 者 の 父



一、學 者 の 父

桓武天皇が、京都に都をお奠めになつてから、今は、もう二百年ほどたちました。そのかみ、天皇が、「美しい山川」とおほめあそばされた、あのなだらかな東山の峯々、賀茂川、桂川の清い流など、都をめぐる自然の眺めは、なほも變らぬ姿を示してゐるうへに、左京のさかしのには、寢殿造の立派な貴族の住まひが、數多く建てられ、大路には、絲毛や檳榔毛の車が、幾つも幾つも華やかに行きかうて、都は、ひとしほ美しくなつてゐます。平安といふその名の通り、極めて平和な明け暮れが、ここには、ずっと續いてゐたのです。ちやうど 帝は、第六十四代 圓融天皇であらせられました。

その御代の貞元二年(紀元一六三七年)、春も半ばに近づいた頃のことです。

東宮師貞親王が、始めて學問をお習ひあそばされる御儀式がすんで、その式場であつた關白藤原兼通の邸から退出して來た藤原爲時は、そのまま眞直に二條の大路へ出ました。

上氣した頬に、うすら寒い夕暮の風が、いかにも、心持よく感じられます。

何ともいひやうのない満ち足りたものが、腹の底からこみ上げてくるのを覺えながら、彼は、大路をゆつくりと歩いて行きました。

爲時は、今まで、讀書始の御儀式に、參列してゐたのです。そして尙復といつて、東宮に讀書をお教へするのを、お手傳ひする役目を、無事に果してきたのでした。それはもちろん、東宮に讀書をお教へする侍講のやうな、今日の一番重い役目ではありませんでしたけれど、とにかく、御前近く侍つて、しかも、兼通公以下、歴々の公卿達が列座してゐる席上で、さうした役を勤めることは、まだ世馴れない彼にとつて、たいへん氣のつまる仕事でした。

ですから、どうか失策をしないやうにと、ただそのことだけに、彼は一生懸命になつてゐたのです。

ところが、すべてが滞りなくすんで、その張りつめた氣持から解き放されてみると、今日

の御儀式の有様が、始めて、のびやかに思ひ出されてきたのでした。

「何といふ光榮なことだつたらうか。」

いよいよ、東宮がお出ましになつた後、列座の公卿の注目する中を、恭しく、式の始ることをまづ告げた、あの自分の姿を頭の中に描いてみて、彼は、思はずつぶやきました。

しかし、次の瞬間、東宮學士菅原輔正朝臣が、侍講として、音吐朗々と、『御註孝經序』と、お読み申しあげたことを思ひ出すと、なほその光榮の勝つてゐることを、さすがに、うらやましく思はずにはゐられなかつたのです。

「帝や、東宮の師と仰がれるほど名譽なことが、學問する身にとつて、またとあらうか。」

彼は、しみじみと考へ續けました。

「たとへ、官位は低くともいい。富貴な生活はしなくともいい。ただ學問が深く、徳行の優れた、立派な學者になりたいものだ。帝の師と仰がれるやうな徳の高い學者に、どうかしてなつてみたいものだ。」

彼は文章博士となつて大學で講義し、また帝に御進講申しあげてゐる、光榮ある自分の姿を、そつと想像してみました。

「さうだ。そのためには、何といつても學問することが大切なのだ。もつと、もつと、自分は、力めねばならない。」

學問に對する強い熱意が、かうした未來の夢をのせて、もくもくと、彼の胸中に湧き起つてまゐりました。

彼は頭をしゃんと上げて、力強い足取りで、もう、夕闇の迫つてゐる大路を、家に向かつて急ぐのでした。

爲時は、藤原氏の一人として、鎌足から、ちやうど十一代目にあたつてゐます。

不比等の子で、鎌足からは孫にあたる武智麻呂・房前・宇合・麻呂の四人が、南・北・式・京の四家に、それぞれ分れた時、北家と呼ばれたのは、次男の房前でした。

そして最初のうちは、この四家の中でも、南家や式家の勢力が強かつたのですが、房前の曾孫冬嗣が、たいへんしつかりした人物で、學校を建てて一族の子弟を教育したり、南圓堂を建てて一族の冥福を祈つたりして、家のために一生懸命に努力したので、立派な人物が次々に、その家から出るやうになりました。しかも、冬嗣の女順子は、仁明天皇の女御として、

文徳天皇の御母でもいらせられましたから、彼はまた、皇室の外戚でもあつたわけなのです。

それで、冬嗣の子良房は、文徳天皇の御代に、臣下として、始めて太政大臣の地位に上り、次いで、清和天皇の攝政として、位、人臣を極めるやうになりました。良房以來、その子孫は、代々攝政・關白に任せられることとなり、また、御歴代の皇后は、この家からお立ちになることとなつて、他の南・式・京三家の藤原氏を、全く凌いでしまつたのでした。そして、今私のお話ししてゐる爲時は、實に、この北家の系統に屬する藤原氏なのです。

しかしながら、その北家がまた、長い年月の間に、幾つもの家に分れてしまつて、今では、冬嗣の長男長良の子孫である師輔の系統が、最も勢力を得て、朝廷の主な官職は、殆どこの家の人々で占めるやうになりました。唯今の關白太政大臣兼通・大納言兼家ら歴々の公卿達は、いづれも皆、この系統に屬する人々です。

かうして、家柄が尊重された當時の習はしとして、大臣になれる家、納言になれる家などは、初めから略定まつてゐましたから、同じ北家の藤原氏でありましたが、この師輔の系統以外の人々なら、たとへ優れた才能があつたところで、重要な地位に上り、思ふ存分腕を振るふなどといふことは、到底思ひもありませんでした。

で、すべての人達は、ただ自分の家柄にふさはしい官職で、満足してゐるよりほかに仕方がなかつたのです。

ところで爲時の家は、北家といひましても、冬嗣の六男良門よしかどの系統にあたります。この良門といふ人は、兄の良房が従一位を賜はり、關白となつて、位、人臣を極めてゐるにかかはらず、僅かに正六位といふ極めて低い地位で、不遇のまま世を終つた人でありました。従つて、その系統である爲時の家は、大臣などといふ高い地位に、到底上れる家柄ではありませんでした。生まれつき聰明そうめいであつた爲時は、かうした實情にそぐはない世の矛盾むじゆんを、いたく残念に思ひましたが、長い間のしきたりは、彼一人の力では、どうすることもできません。

「家柄の低い家に生まれた。」といふことは、つまり、「思ふままに伸びられない。」といふことであり、しかも、それを、もつて生まれた運命として、彼は、甘んじて受けなければならなかつたのです。

大空の自由にあこがれつつ、狭い籠かごの中から抜け出ることのできない小鳥のやうなものが、若い爲時の心中に、いつもわだかま蟠わだかまつてをりました。ただ心を澄まして書を読む時、または、詩作にふける時、彼は、さうした満たされない氣持を、きれいに忘れることができたのです。

詩の世界や學問の世界には、ほんたうに何の束縛そくばくもありませんでした。そこでは、人は誰でも自分の才能に應じて、その境地をひらくことができるのです。

「學問に生きよう——。」

世の習はしはそれとして、かうしたひたむきな氣持が、年と共に深まつていつた爲時の勉強ぶりは、大學に入つてから、ますますすばらしくなりました。

學問といへば、支那風の學問を意味した當時のことですから、大學で教へられるものも、殆ど、支那風のそれでした。

爲時は、ここで、支那の歴史を學び、漢詩や漢文を勉強しました。優れた才能をもつた貴族の子弟も大勢をりましたけれど、彼に及ぶ者は誰も無かつたのです。とりわけ、彼は、漢詩が非常に上手でした。

ところで、この、漢詩が上手であるといふことは、もとより、彼の勉強の結果であります。が、ひとつには、生まれつきにもよるのでした。

さきにも述べた通り、たとへ、北家の末流であつたとしても、由緒正ゆふしよしい藤原氏の一族であるだけに、彼の家には、貴族的な風流を愛する心が、自ら傳へられてゐたに違ひはありません。

彼の祖父は兼輔かねすけといつて、中納言でしたが、賀茂川の堤つづみのところに家を建てて住んだので、世間の人々から、「堤中納言」とあだ名されてゐた風流人で、また有名な歌人でもありました。親心のまことを詠んだものとして有名な、

人の親の心は闇やみにあらねども

子を思ふ道に迷ひぬるかな

といふ歌は、この兼輔の歌なのです。

また、我が國で、一番古い、しかも、よくできた短篇小説に、『堤中納言物語』といふのがあります。これは、誰が作つたのか、まだ作者ははつきりわからないのですが、昔から、この兼輔の作ではないかともいはれてゐます。

とにかく、以上のことから考へてみても、兼輔といふ人が、優れた文學的素質をもつてゐたことは確かでせう。

兼輔の子で、爲時の父にあたる雅正まさただといふ人、また雅正の子で爲時の兄、即ち、式部の伯父にあたる爲頼たのよりといふ人などは、いづれも和歌が上手で、その作品は、父兼輔と同じやうに、代々の勅撰和歌集に、入つてゐるほどでありました。殊に爲頼は、父に劣らぬ非常に優れた歌人と

して、當時既に名聲の高かつた人でした。

かうした先祖代々の文學的な素質が、どうして爲時にも、傳はらないといふことがあり得ませう。彼が漢詩に長け、和歌をもよくしたといふことも、畢竟ひつきやう、父祖譲りのかうした素質に恵まれてゐたためだと思はれます。

このやうに、學問にも優れ、文才にも秀でてゐた彼は、大學を卒業すると、當時、朝廷にお仕へするためには、絶対に必要であつたむづかしい試験に合格して、まづ、文章もんじやうしやう生に擧げられることができたのです。

彼の師は、文章博士菅原文時ふみときでした。文時は、實に菅原道眞の孫にあたる人です。その學識の深いこと、その詩に巧みなことで、當時ではたいへん有名でした。

かつて、都に、流行病はやりやまひが起つた時、彼が不思議にそれにかからなかつたので、「きつと疫病神やくびやうがみが、彼の詩の威力に恐れて、家の中に入らなかつたのだらう。」

といふ噂うはさが廣まつたから、それほど、詩の上手な人でした。

その文時は、爲時のまじめな人格と、優れた學才とを十分に認めて、非常に彼をかはいがりました。

さきに述べた、あの、東宮師貞親王の讀書始の御儀式に、文章生の中から、爲時だけが選ばれて、晴れの役目を勤めたのも、實にその師文時が、彼を見込んで推薦したからでありました。

それから数年の後、爲時は、式部丞になつてゐました。式部丞といふのは、大抵の文章生が任命される習はしの式部省の役人です。

そして、彼が、東宮の讀書始に奉仕した、あの貞元二年から七年目の永観二年(紀元一六四四年)には、更に藏人といふ役にもなり、宮中のこまごましたいろいろのお仕事や、天皇の御側の御用などをとり扱ふやうになりました。

確かなことはわかりませんが、彼はこの時、三十四五歳であつたと思はれます。そして、六位を賜はつてゐたのでした。

身分の高い人の子息が、十二三歳で成人の式をすませると、すぐに五位に叙せられたことを思へば、爲時の場合は、決して早い昇進であるとは申されません。

北家の藤原氏には屬するものの、その末流であるといふ家柄、さうした家柄に生まれた爲時は、かうして、その家相應の官位官職によつて、その生活を築いてゆくのでありました。

二、男なりせば

爲時は、また家庭に於て、その頃、既に子供達の親でした。

子女を御后様として入内させることができるほどの高い家柄の人々は、しぜん、女の子を持つことを喜んだものでしたが、いはば、中流にすぎない爲時の家では、めつたにさうしたことは望まれません。

それにこの時代では、學問といへば、支那風の學問のことであり、それは、男子の修むべきもので、女子のかかはらないものとされてゐましたから、たとへ學者の家の子でも、女ですと、學問をもつて世に立つなどといふことは、到底できませんでした。従つて、學者の家によつて、女の子は、いはば不用の子供であつたのです。

それですのに爲時は、五人の子供が二人まで、女の子でした。しかも、残る三人の男子のうち、三男には、小さい時分から三井寺で坊さんの修業をさせ、二男惟通もまたやむを得ない事情があつて、親戚の家にあづけてゐましたので、結局彼の手許に残つたのは、長男惟規だけでした。ですから、彼が惟規を頼みにしたことは非常なもので、將來、自分の跡を嗣ぐべき者と

して、恥づかしくないだけの學問なり、教養なりを與へるために、幼少の頃から、その教育には特別に意を用ひたのでした。

惟規もまたたいへん聰明でした。學問がよくできたばかりでなく、詩を作らせても歌を詠ましても、なかなか上手でしたから、爲時は、なほさら、この男の子に大きな期待をかけてきたのです。それに對して、女の子供達、とりわけ姉嬢は、生まれつき病弱でもありましたから、彼はもう、娘達のことについては、一切妻や乳母うはに任せきりにしてゐたのでした。ところが、一番下の女の子が、五つになり六つになるにつれて、彼はこの女の子に對しても、また、非常な注意を拂はずにゐられなくなつてしまひました。といふのは、この子がつて生まれた天才の芽を、そろそろ伸ばし始めてきたのに氣づいたからです。もとより學問に熱心な爲時は、この子のすぐれた素質に氣づけば氣づくほど、それを伸ばさないではゐられませんでした。彼は惟規と一緒に、この小さな妹嬢に對しても、女のしないことになつてゐる學問——、あの支那風の學問を教へてみようかと決心したのです。

彼は、その頃、惟規に、『史記』を教へてゐました。

その時、兄の惟規は、十二三歳、そして、妹は七つぐらゐでした。兄妹を、揃へて教へるや

うになつてから、爲時は、妹の頭が、兄のそれにも増して優れてゐることを、認めないわけにはゆきませんでした。

それは、復習をさせる時などに、よく知られることでしたが、時として惟規にも、読み方を忘れた字や、読み下しのあやふやなところがある場合でも、この小さい妹は、常によく覺えてゐて、何の淀よどむところもなく、読みおほすのが常だつたからです。その様子を見てゐると、全く、「この子は、忘れるといふことを知らないのではなからうか。」と、疑ひたくなるほどでした。

學問をもつて、自分のすべてとする爲時にとつて、學才豊かな子供を持つ喜びが、何物にもかへ難いものであつたことはいふまでもありません。

彼は暇ひまさへあると、子供達のことを考へては楽しんでゐたのです。

惟規だつて、決して、できの悪い子ではない。——爲時は、兄の方の子の才能を思ひ浮かべながら、ひとりうなづくのでした。

しかし、妹の方の子のすばらしさはどうだ。あの、記憶の確かさは……。そして、あの熱心さは……。

かう考へると、爲時は、今すぐにでもその側へ飛んで行つて、抱きしめてやりたいやうな氣

さへしてくるのです。そして、最後には、いつも、みんなこのまま、この調子で伸びていつてくれたら……と、子供達の輝かしい未来を想像して、その親としての自分の幸福を、彼は、ひとり味はつてほほゑむのでした。

しかしながら、とりわけ優れた子供が「女」であり、従つて、思ふままに、その學力を生かすことのできない身の上であると思ふと、腹の底から、惜しくて惜しくてたまりませんでした。

長男惟規はどちらかといへば、祖父の兼輔かねすけや、伯父の爲頼ためよりと同じやうに、學問といふよりもむしろ文學、とりわけ歌を作ることの方面に、より優れた才能を示してゐるのに反し、この妹娘の頭は、すばらしく緻密ちみつにできてゐるので、これでみっちり勉強すれば、どんなに立派な學者となることか、その將來は、まことに頼もしい限りでありました。それを思へば思ふほど、彼女が「女」であるといふことが、それはもう、口惜しくてたまらなかつたのです。

「男の子だつたらなあ！」

かうした深い深い歎息たんそくが、何度、爲時の口から漏れたことでせう。

しかし、或時は、また、優れた才能をめぐるあまりに、男子なれかしと願つたところで、かひの無いことであると思ひ返し、それより、その優れた素質を、女らしく伸ばしてやることが、

父としての大きな責任であると、しみじみ考へることもありました。

また彼女の稀に見る聰明わきまさにも、世の常の親のやうに、もしや短命に終るのではないか、またその才智が、却つて禍わざはひひとなるやうなことが起るのではないか、といった不安に襲はれることもしばしばでした。そんな時には、きまつて、いつそのこと、もうこれ以上、學問はさせないでおかうか、とも思ふのでした。

けれども、このままやめさせるには、あまりにも惜しい彼女の熱心さであり、ほんたうに、磨けばどこまで光るかわからない、寶石のやうなその才智でした。ですから、爲時は、やはり自分の考へ通り、兄惟規と同じやうに、彼女にも、全力を傾けて教へ續けていつたのです。

藤原爲時の末の娘、そして、惟規の妹、即ち、この世にも稀な天才少女こそ、實に後年の紫式部その人でありました。

その後、彼女の學問は、父の熱心な指導によつて、眼に見えて進歩を示しました。そして、儒教の書物、歴史や詩の書物などが、次から次へと讀破されていつたのです。

父親として、爲時は、それが嬉しくてたまりませんでした。ですから學習の際、惟規が首を

かしげることがありますと、すぐに、

「おまへは覚えてゐますか。」

と、彼女に答へさせたり、

「では、その次から、おまへが読んでごらん。」

といつて、讀ませたりするのでした。

が、さうした度毎に、兄様の知らないことを、私が知つてゐる、といふ誇らしい氣持が、子供ながらにも、彼女の顔にあらはれるのは、どうにも仕方のないことでした。

それに氣がついた爲時は、どんなに自分の輕率けいそつを後悔したこととせう。彼はそれ以來、兄よりも自分の方が偉いと思はせるやうな質問は、一切さし控へるやうに注意いたしました。

それといふのも、己おのれの才能にうぬぼれることのないやうに、また、兄を兄とも思はないやうな高慢かうまんな心をもたないやうに、ひいては學問があるために、女らしくない女にならないやうにといふ、爲時の親心からでありました。

この平安期は、一般の女性に對して、最も「女らしさ」を要求した時代であり、しとやかで、やさしくて、しかもどこかにしつかりしたところのある女性——、さうした女の人が、最も理

想とされてゐた時代です。従つてこの時代では、學問は男のするもの、女の關係しないものと定められてゐたといふのも、つまり、女に學問をさせることによつて、その「女らしさ」を失はせたくない氣持から、起つたものでありました。

爲時は、妻——彼の妻は、同じく一門の藤原爲信たけのぶの娘で、堅子といひ、まことにしとやかな婦人でありました。——とも、また乳母とも、絶えずこのことについて話し合ひました。そして、皆で心を合はせて、「女らしさ」を失はない女に育てていかうと、努力したのでした。ですから爲時は、學問をさせると同時に、この時分の女の人達が、その嗜たしなみとして修めてゐたものは、すべて彼女にも習はせたのでした。

この時代では、和歌を詠むこと、字を書くこと、琴こととか琵琶びばなどを奏かなでることが、缺くことのできない女の嗜たしなみとされてをりました。とりわけ和歌は、我が國固有の文學であります。特にこの平安期では、歌の贈答そうたふといふことが、日常生活のうへに、大きな意義をもつてをりました。例へば、人から歌を贈られて、その返しをしないことは禮を缺くばかりでなく、たいへん蔑さげすまれたものです。従つて、歌が詠めなかつたり、また、とても下手だつたりすることは、現今の人が、ろくに挨拶もできないのと同じやうに、恥づかしいことであつたのです。

そこで、歌を上手に詠むために、當時の人々は、『古今集』『拾遺集』しゆいしふなどの和歌集を始め、優れた人の歌集を読むこと、そして、その中の有名な歌を覚えることなどをもつて、大切な和歌の勉強法としたのでした。

前にも申しました通り、和歌が贈答に用ひられた關係上、しぜんと字をきれいに書くことが喜ばれ、それが、その人の人柄まで左右したのでした。

そこで、女の字として定められてゐたのは、かな假名でしたから、上手な人や、親兄弟などに書いてもらつたお手本によつて、假名の續け方・散らし方・墨つぎなどの稽古をも、怠ることはできませんでした。

かうして和歌が、當時の日常生活のうへに、なくてはならないものであつたと同様に、音楽もまだ、缺いてはならないものの一つでした。

つれづれの折、また興きようにのつた時、ひとり琴をひいて、心を慰めるなどといつたやうな場合も、もちろんありはしますが、花を見、月を眺めて、宴會が數限りなく行はれた時代のことですから、さうした會合には、必ず、琴や笛や琵琶などの合奏が、つきものとなつてをりました。ですから、少くとも、何か一つ以上の樂器に巧みであるといふことが、女として缺くことので

きない嗜みの一つであつたのです。

爲時が、これらのものを何一つ缺けることなく彼女に學ばせたことは、いふまでもありません。なほ、その他に、裁縫や繪なども教へ、かうした女の修養に、できるだけ多くの時間をつひやし、また、できる限り深く入らせることによつて、學問のために、ともすれば失はれがちな「女らしさ」を保たせようと、苦心したのでした。

ですから、さうしたものの稽古がすんで、やうやく暇ができ、彼女が父の書棚から、漢籍の書物などを探し出してゐる時でも、乳母や母などは、なほも、「いい紙があるから、お手習してごらんなさい。」とか、或はまた、「染めものをしてゐるから、見においでなさい。」などと彼女を誘つたばかりでなく、時には、父の爲時までが、

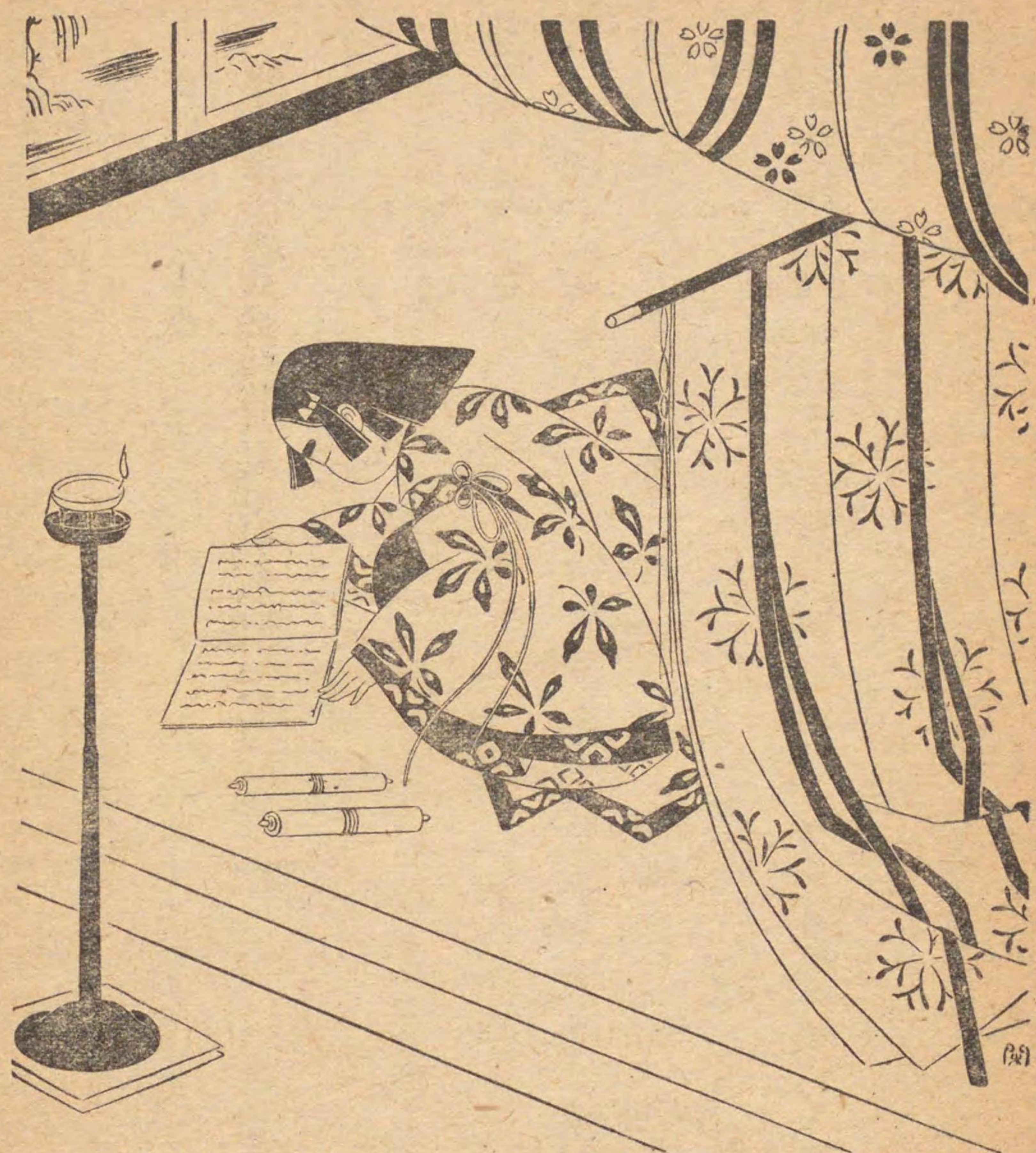
「今日は、何の曲をあげたか、ひとつ、聞かせてもらひたいものだ。」

と、琴を所望して、氣を變へさせようとすることもありました。

そして、そればかりでなく、乳母などは、折にふれて、

「男でも、あまり物しりて學者ぶる人は、大抵不幸な目にあつてゐるやうでございますよ。」

と、世間の例を話して聞かせた後、



「まして、女は。」

と、女としての心のもちやうを教へ、また、或時などは、

「女で、あまり學問がおありになることは、

よろしうございます

ん。昔から、『學問ある

女は夫を殺す。』といふ

諺ことわざさへございますも

のね。」

といつた調子で、なるべく彼女を、學問から、遠ざけよう遠ざけようとした。



女を、あくまでも「女」として、大成させようと、氣をつかつてゐた時、彼女自身は、一體どんな氣持でゐたのでせうか。

前にも述べた通り、當時の我が國で、學問といへば、支那風の學問を意味してゐたのですから、いはゆる「學者」と呼ばれる人の中には、支那のことは十分よく知つてゐるが、肝腎かんじんの本のことは、さまで深く知らないといふやうな人も、少くなかつたのです。

しかし、彼女は、支那風の學問をすると同時に、『古事記』『日本書紀』などといふ我が國の古い歴史の書物にも、眼を通すことを決して怠つてはゐませんでした。そして、そればかりでなく、當時、世間にひろまつてゐた、『竹取たけとり』『伊勢いせ』『宇津保うつぼ』『落窪おちくぼ』などといふ物語をも、かたはしから手に入る限り、讀んでいつたのです。

それらはもちろん、殆どが自分の獨學であり、父や母から命ぜられた、習字や琴のお稽古の

あひまあひまにするのですから、僅かの時間をも惜しまねばならなかつたでせうし、夜もなほ遅くまで、燈を近くとぼして、書物に読みふけることもあつたのでした。

かうして、彼女が、そのもつて生まれた才能と、驚くばかりの努力と根氣とをもつて、飽きることなく續けていつた讀書は、彼女に對し、廣い知識を與へたばかりでなく、深い深い魂の糧ともなりました。

そしてそこから、自分で自分をふりかへつてみる力が、まだ若い彼女の胸に、いつの間にか養はれていつたのです。

かうして彼女は、自分が女である、——たとへ、男子と同じやうに、男子のする學問をし、男子に劣らない知識をもつてゐるとしても、どこまでも、自分は女である、といふことをはつきりと心に刻みつけると共に、それ故に自分はどこまでも、女らしくなければならぬのだといふ考へを、心から離しませんでした。

「女は女らしく」——、彼女はさうした努力を、遂に一生涯し續けていつた人でした。

彼女は、かうした自分の姿を、その日記の中で、

「一といふ字も書けないやうな様子をしてゐた。」

と、述べてゐます。

もちろん、だからといつて、彼女は、勉強そのものを、決してやめようとしたものではありません。「知識を得たい。」そして、「自己を高めたい。」といふ學問への熱意は、なほも年と共に深まつていつたのです。

しかも、他面、自分は女であるといふはつきりした自覺に生きる彼女は、女としての嗜みである習字にも和歌にも、そして音楽や裁縫にも、熱心に勵みました。そして、そのいづれにも優れた腕前を見せたのです。とりわけ音楽では、琴が最も上手なやうでありました。

かうして彼女は、十七八歳になる頃には、『古事記』『日本書紀』、また、『萬葉集』など、日本の古來の書物はいふまでもなく、『論語』を始め、『書經』『詩經』などの儒教の書物、『史記』『漢書』などの歴史の書物、また、『文選』『白氏文集』などの詩文集に至るまで、當時の日本にわたつてゐた支那の書物は、殆どすべてに眼を通してゐました。

しかもそれだけではなく、多くの經文をさへ、彼女は讀んでゐたのです。

それには、小さい時分から三井寺に行つて修行をつんだ、あの三番目の兄から教へられるところが多かつたと思はれます。この兄は、名を定暹といひ、後には、阿闍梨といふ僧侶の位を

もらつた人でした。

それはともかく、かうして得られた彼女の佛教の知識については、天台宗の奥義を得てゐたといふ傳説があるほどです。はつきりしたことはわからないとしましても、さうした傳説が起るところから考へても、とにかく、相當に深い知識をもつてゐたことだけは、十分に考へられませう。かうして學問は和漢にわたり、儒佛二教に通じてゐた彼女の學識は、なまなかの博士も、恥づかしいほどでありました。

と同時に、さうした深い學識を、表面にあらはすまい、できる限りつつまじやかに生きよう、とする奥ゆかしい心根が、彼女の人柄を一層高めていつたのでした。

紫式部の少女時代から娘時代にかけての生活は、かうして築かれ、營まれてきたのでした。

残念なことには、彼女のまことの名は、今もなほわかりません。紫式部といふ名前は、彼女が、宮仕へをした時につけてもらつた、いはば呼び名なのです。その呼び名の方が有名になつて、實名はあまり使はれなかつたので、記録にも、残らなかつたものと思はれます。

このお話でも、今まで、彼女とか、妹娘とかと呼んできたのは、全く、その實名がわからないためでありました。

三、越の白山

一條天皇の長徳二年(紀元一六五六年)正月二十五日、朝廷には、公卿達が集つて、諸國の國司を任命する會議が開かれてをりました。

國司になりたいと望んでゐた人々は、ちやうど入學試験の發表でも待つ時のやうな氣持で、この會議の結果を待ちうけてゐたのです。そして、誰もが、それぞれ使を禁中に遣はして、少しでも早く、その結果を聞かうと、手はずをととのへてをりました。式部の父爲時^{むねとき}もまた、その一人であつたのです。

爲時は、前にも述べた通り、圓融天皇^{まろみ}の御代の末年から、もう六年も式部丞^{しきぶのじょう}として、その役目をまじめに勤めると同時に、一方では、藏人^{くらひび}としての仕事をも勤めてきましたので、この當時の習慣に従へば、もうどこかの國司に、任命されていい頃でした。また、爲時自身も、それを心待ちにしてゐたのです。

そこで、誰もがするやうに、今度國司となれば、こんなふう^{いふ}に政治をしたいと思ふ、といふ抱負^{ほうふ}を述べた、國司の志望書を度々差し出してゐました。けれども、なかなか思ふやうにはな

らなかつたのです。

もともと學者肌な爲時は、だからといつてあせりもせず、ひたすら時のくるのを待つてゐたのでした。ところが、今年は方々の國司に、その任期の満ちた人ができたので、多くの新しい人が、その代りとして任せられることになつてゐたのです。ですから、今年こそは、きつと——と、爲時は、この會議の結果に大きな望みをかけたのでした。

會議は、夜にかけて行はれるのが常です。もどかしかつた二十六日の夜が明けた時、宵から遣はしておいた使の者が、歸つて來ました。

「どうだつた。」

「何におなりなされたか。」

と、爲時の家の誰彼は、歸つたばかりの使の者をとりまいて、口々に問ひかけました。

「淡路でございます。淡路守に、おなりなされました。」

使の者は、いかにも残念さうに、口ごもりながら答へるのでした。

「ほう、淡路に。」

「さうだつたか。」

と、皆が顔を見合はせました。

その頃日本の國々は、收穫の多い少いによつて、大・上・中・下の四等に分けられてをりました。その中でも、國が小さく、産物も乏しかつた淡路は、下國げこくであつたのです。そして、その國司は、今度のやうに、獨立して任せられることもありましたけれど、また、讃岐さぬきの國司が兼任することもあつたほどの、そんな國だつたのです。

その淡路に、今、爲時が任せられたといふのですから、家の人たちが顔を見合はせたのも、決して無理ではありません。

爲時もまた、これを聞いて、さすがに残念に思はないではゐられませんでした。

始めて地方に下り、地方の政治を立派にやつてみようと思つて、意氣こんでゐたところであつただけに、何としても物足りない氣持がして、ともすれば、胸がいつぱいになつてくるのでした。彼は自分の部屋に閉ぢこもつて、じつと考へこんでしまひました。

立派な家柄でないから、大臣などといふやうな高い地位に上れないことは、もう諦めてゐます。そして、學問をしたり、詩や歌を詠んだりすることによつて、ほんたうに魂の慰めを見出すことに慣れてもゐます。が、しかし、せめて家柄相應の官位官職だけは得たいと、彼は、

心から願はないではあられませんでした。

さうだ、せめてこの氣持だけでも、知つていただきたい。——彼は、時の右大臣藤原道長に書を差し出して、この自分の氣持を察してもらはうと、決心しました。

詩が上手であつた彼は、これまでに、度々道長の家にも招かれ、共に詩を作りかはしたことがありました。身分こそ違ひますが、二人は、いはば詩の友達だつたのです。

爲時は、机に向かひました。心を澄まして、筆を走らせてをりますと、大學の學生であつた時分、我ながらよくやつたと思はれるほどの勉強ぶりや、終夜苦吟して、今は、世になき師匠、菅原文時からほめられたことなどが、なつかしく思ひ出されてまゐりました。

苦學の寒夜、紅涙巾を霑し、

除目の春朝、蒼天眼に在り。

彼は肅然として、こんな句を書きつけました。それは、全く、現在の悲痛な心持をありのままに詠んだものでした。

この句の意味は、「これまで、冬の寒い夜、火桶もなしに勉強してゐると、思はず涙がこぼれるほど、つらかつたことが幾度あつたことだらう。だが、それもみな我慢して、一途に勵んで

きたものだつた。しかし、今年の春の除目(地方官を任命する會議)には、思はしいところへ任命されることができなかつた。この不運を、自分は、ただ天を仰いで歎ずるよりほか仕方がない。」といつたやうな氣持のものです。

やがて道長は、爲時から届けられたこの書を読みました。そして、とりわけ、爲時が涙のにじむ思ひで書いたこの句には、さすがに心を打たれたものとみえました。そこで彼は、自分の乳母の子にあたる藤原國盛が、今度越前守に任命されてゐたことを思ひ出すと、早速わけを話して、それをことわらせ、改めて、爲時が越前守に任命されるやうに、とり計らつてやつたのです。

越前は、淡路と違つて大國ですから、四等の中でも、最も上位にある國です。しかも、敦賀の港を控へてゐるので、海外との交通上からも、貿易上からも、非常に重要なところでした。従つて、その國司は、責任も重かつた代りに、それだけ、仕事のしがひもあつたのです。

時の帝 一條天皇には、「爲時を、改めて越前守に任命いたしましたは。」といふ道長からの奏上を、聞き召されると、

「爲時を越前にであるか。それなら、唐人と詩を作りかはすのによい。」

と仰せられて、直ちにおとりあげ下さいました。

その頃、宮中では御宴があると、必ず詩や歌を詠んで、興を添へることが習はしとなつてをりましたので、詩の上手な爲時は時々御召を受けて、さうした御宴に列席し、詩を獻じてゐましたから、天皇にも、よく彼を御存じでいらせられ、文人として、常に手厚いおもてなしを賜はつてゐたのです。彼が淡路守に任ぜられた時、道長に差し出した書は、天皇も御覽あそばされ、一方ならずかはいさうに思し召されてゐたところでしたから、今度の改任をも、早速お許し下さつたのであります。

爲時は、大御心のかたじけなさに咽びながら、我が身の幸ひに、心ををどらせたのでした。そして、次のやうな歌を詠みました。

遅れても咲くべき花は咲きにけり

身を限りとも思ひけるかな

歌の意は、「櫻の花が、たとへ時期の遅れることがあらうとも遂には開くやうに、我が身の望みも時期さへくれば、このやうにかなふではないか。それなのに、氣短にも、おのが前途を悲しんでゐたことよ。」といふほどの意味です。

かうして爲時は、その年（長徳二年）の初夏、家族を引き連れて京都を立ち、越前へ下つて行きました。その一行の中には、末の娘、後の紫式部がまじつてゐたことは、いふまでもありません。式部はその時、十九歳ばかりになつてゐました。

これまでも何度か、父のお供をして、和泉國にある玉井の山莊には、行つたことがありましたが、こんなに遠く、しかもこれからさき四年といふ長い間、都を離れてゐるといふことは、今度が始めてでした。それだけにまた、美しいこの都を離れ、そして、愛讀してゐたあの『史記』を始め、いろいろの書籍が藏はれてある、なつかしい我が家と別れるといふのは、彼女にとつて、このうへもなくさびしいことでした。行きたくない。都に、このまま留つてゐたい——と、心の底から思ひながらも、ひとり都に残るわけにもまゐりません。

かうして、父爲時の喜びにひきかへ、彼女は、何かものさびしい感情を懐いたまま、一行に加つたのでした。

父母や兄の惟規、それに乳母や召使なども合はせると、一行は二十人を越えました。この中

には、ずっと以前に仕へてゐた者で、今度の田舎下りを聞くと、「是非とも供をさせてほしい。」といつて来た者も、まじつてをりました。さうした昔なじみの顔を見るにつけても、式部には、ただ一人の姉君のことが、なつかしく思ひ出されてくるのでした。

前にも述べた通り、生まれおちる時から、體の丈夫でなかつた式部の姉は、とかく病の床に親しみがちでした。ですから、根をつめて學問することは到底できませんでしたが、氣分のいい折々に、習字や和歌やお琴などを、一通りは修めてをりましたし、また、さうした病氣がちの人の常として、小さい時分から、たいへん敏感で、人一倍よく氣がつくのでした。

「あなたが、そんなに心配してくれなくてもいいのですよ。それよりも、早く丈夫におなりなさいね。」

と、この病身の子の細かい心づかひに、母の堅子は、涙ぐんでいふのが常でした。

かうした彼女が、ただ一人の妹である式部に對して、どんなにやさしかつたかは、いふまでもありません。この姉娘がなくなつたのは、式部がまだほんの子供の時分でした。けれども、やさしかつたお姉様として、その面影は、はつきりと式部の胸に焼きつけられてゐたのです。しかも、彼女が姉君を慕ふ心は、大きくなるにつれて、ますます強くなつてさへきたのでした。

式部が、妹をなくした仲のいいお友達と、「お互が、めいめいのなくなつた姉になり、妹にならう。」と約束して、そのお友達を「姉君」と呼んできたのも、さうした氣持のあらはれでありました。しかし、そのお友達もまた、今度お父様について肥前へ行くのです。

「お姉様がをられたら、こんな時も、これほどさびしくはなからうのに……。」

今はもう、攝津國まで下つたといふ、その人の手紙を眺めながら、旅支度の式部は、しみじみと思ふのでした。

險まぶたの姉をなつかしむ氣持は、とりもなほさず彼女にとつて、「姉君」と長い間呼びなれた、あのお友達をなつかしむ心でもあつたのです。

難波なにはがた群れたる鳥のもろともに

立ちゐるものと思はましかば

その手紙には、こんな歌が記されてありました。

都を遠ざかるにつれ、あたりの景色は、次第に鄙ひなびたものになつてきました。とりわけ、琵琶湖の邊まで来ると、その眺めは、今までに見られなかつた變つたものとなりました。

漁夫が大勢群れ集つて、網を引いてゐる三尾崎の有様や、磨針峠の西の麓、磯前の島の濱邊に、鶴がたくさんおりてゐて、聲々に鳴いてゐるさまなどは、到底、都では見ることのできない全く珍しいものでした。

しかし、さうした見馴れない景色を見るにつけ、彼女の都戀しさはつるばかりでした。琵琶湖を過ぎれば、越前はもう程近く、都を出てから七日目に、爲時の一行は、國府に着きました。

その頃、越前の國府は、今の武生の町にありました。ここは、附近一帶に山地で、殊に東南には、町の上におほひかぶさるやうに日野岳が聳え、はるか加賀國との國境には、白山の峻しい峯も眺められます。

この白山は、一年中雪の消える時がない白い姿をしてゐる山として、都の風流な人々に知られてゐる山です。従つて、

消え果つる時しなければ越路なる

白山の名は雪にぞありける

都まで音にふりくる白山は

雪つきかたきところなりけり

などと、この山を詠んだ歌は、昔から多いのでした。

越の國といへば、その當時の都では、ずるぶる遠い外國のやうに感じられてゐたものです。その越の國にあるこの白山の名を、かうして歌で讀んだり、人の話で聞いたりしてゐる時に、いつかは自分にも、それを實際に眺める日がこようとは、どうして思つたこととせう。それなのに、今は、眼のあたり、その山を、朝な夕なに仰ぎ眺めて暮すことになつたのです。それにつけても、はるばる遠く來たものだと、彼女は、我が身の上が、さまざまに思ひめぐらされるのでした。

父の爲時にしてみれば、自ら望んで來たことですから、もとより不足のあらうはずがありません。毎日、國司の館から國府へかよつて、自分の仕事を熱心に勤めてをりました。

その時から數年前に、隣の若狹國へ、唐人が七十人ばかり來たことがありました。國の人々の、親切なもてなしを受けてゐるうちに、彼らは、とうとう、このまま日本に永住させてもらひたいと、若狹の國司に願ひ出て來たのです。

しかしながら、我が國に來た外國人で、本國に歸らうとせず、永住を願つた者は、あながち

この人々だけではありません。

かの上代に於て、學問や工藝を我が國に傳へた、支那や朝鮮の人々が、我が國人から手厚くもてなされて安住し、その子孫もまた、久しく朝廷に仕へて繁榮した多くの例があることは、國史に明らかです。

また、その人々のやうに、我が國文化の發達のうへに、大きな功績があつたといふわけでもなく、ただ單に、暴風雨などのために、漂流して來たやうな人々の場合にも、同じことがあつたのでした。

桓武天皇の御代に、三河國の海岸へ、今の佛印地方から、一人の印度人が漂着したことがあります。

髪は縮れ、皮膚は黒く、もちろん言語は通じません。しかしながら、土地の人々は、この見馴れない外國人を親切に勞つて、都へ送つてやつたのです。その後、彼は、大和の河原寺や、近江の國分寺に住んで、我が國人の厚い情に感謝しながら、安らかな一生を終へたのでした。これらは、いづれも我が國の人々が、外國人だからといつて輕蔑したり、排斥したりすることなく、いかに親切にもてなしたかといふことを、よく物語つてゐます。

かうした情深い心、海のやうに廣い心持、それは我が國民性の一つであつて、代々我々國民の胸の奥に、流れてゐるものです。

さて、話は前に戻ります。

かの、若狹國に來てゐた唐人達の、日本に永住したいといふ願ひは、國司を通して、朝廷に言上されました。朝廷では、それをお許しあそばされ、更に若狹國から越前國へ、彼らを移すやうにお命じになつたのです。それはちやうど、爲時が赴任する前の年の長徳元年(紀元一六五五年)八月のことでありました。

朝廷の御命令が若狹に届いた時、國司は仰せを奉じて、直ちに越前國へ、唐人達を送りました。

ですから、爲時が越前に行くことになつた時、天皇には、

「唐人と詩を作りかはすのにいい。」

と仰せられたといふことを、前にも述べましたが、それは、かういふ次第で、當時の越前には、とりわけ、多くの唐人がおたからなのです。

ここに唐人と申しましたが、正しくは宋國の人と呼ばなければなりません。その頃、支那は

宋の時代だったからです。しかし、我が國では、政治上にも文化上にも、教へられることの多かつた唐といふ名を、いつの時代の支那にも冠せてきたため、唐の國は亡んでも、なほ、支那のことを唐といひ、「支那の人」といふ意味で、「唐人」と呼び慣らしてゐるのです。で、爲時は、新しい國守として、この唐人達を引見したのでした。

彼らは、その殆どが商人で、大した學問のある人達ではありませんでしたが、その中できようせい 昌といふ人だけは、教養も高く、人格も立派でした。で、爲時も、この人とは親しく交際して、詩の贈答などをしたのです。爲時が、彼に贈つた二つの詩は、『灑藻集』といつて、當時の詩人達の詩を集めた本の中に載せられて、今日にも傳はつてゐます。

長徳二年といへば、遣唐使が廢止されてから百年ほどたつた時であります。従つて、文學・藝術・制度など各方面に、支那の影響が薄らぎ、日本的なものが生まれつつあつた時でした。しかし、一方では依然として、漢詩が非常に喜ばれてをりましたから、漢詩の本場である支那の人々と、詩を作りかはすといふことは、一つの誇りであつたに違ひありません。

かうして、爲時には越前の生活もまた、おもしろく楽しいものでした。いいえ、彼にとつては、思ふ存分に何の束縛もなく、この越前國に關する限り、自分の力を發揮し得るのですから、この田舎の生活の方が、却つて、快いものであつたとも思はれます。

ところが、娘の式部にとつては、あながちさうばかりでもなかつたのです。東山の、あの柔かな山の姿を見馴れた眼には、日野岳や白山の、こごしい峯々の線は、いかにもきびしく、親しみにくいものに感じられてなりませんでした。

彼女の眼には、ともすると、都の風物がちらつきました。まづ第一に、毎年夏の初めに行はれるあの賀茂の祭、その美々しい行列こそ、都に住む者のみに與へられる、無上の見物みものでした。それから、禁中でとり行はせられる四季折々の御行事も、折にふれては、よそながら拜觀できることもあります。詣まうでるには清水寺きよみづでらがあり、少し足をのばせば、初瀬はつせがあり、石山寺もあります。身分の高い人々が次々に建てられる立派なお寺の、供養の様子などは、ちよつと覗いてみただけでも、極樂の有様とは、こんなのをいふのではなからうかと思はれるほど、ありがたく美しいものであります。方々のお寺では、御八講みはつかう（法華八講會のこと。法華經を一巻づつ、朝夕二度にわたつて問答し、四日で全八巻を終るもの）や、菩提講ぼだいかう（亡者追善や自己の往生極樂を願ふため、法要を修し、法華經の講説を聞くこと）などといふいろいろなおつとめやお説教も行はれて、心の汚れを清めることもできました。

それなのにこの越前の地方には、さうした、眼を喜ばせ、心を樂しませるものは何もありません。とりわけ、彼女が最も悲しかったことは、書物が自由に讀めない、といふことでした。ここまで持つて來てゐる書物の數は、ほんの僅かであるうへに、新しいものを手に入れるなどといふことは、全く斷念しなければなりません。いひやうのないさびしさが、そこから生まれてくるのでした。それは、單なる故郷戀といふ氣持では決してなく、もつともつと深いもの、いひかへれば、何となく満たされない精神の餓ゑから起る、しみこむやうなさびしさでした。やがて、冬がきました。

毎年のやうに、日本海の沿岸一帯を埋めつくす雪は、この武生の町に、今年もまた降り積りました。その雪は、都では到底考へられないほどの深さでした。

すぐ眼の前に聳えてゐる日野岳にも、上へ上へと降り積るばかりです。こんなにも積つて、とける日が、いつくるのかと、全く疑ひたくなるほど、眞白になつてしまひました。

國司の館たちに仕へてゐる人々は、いつもさびしさうに、うち沈んでゐるこの國司のお嬢さんを、どうかして、慰めてあげたいと思ひました。そこで或時は、庭に、屋根の雪までかき落して、大きな雪の山を作り、それに上つて遊んでゐるところを見せようと思ひました。

また、或時は、

「唐人を見にいらずしやいませんか。」

と、誘ふこともありました。

けれども、彼女のさびしさは、それらのことで、容易に慰められるやうなものではなかつたのです。ですから、

「雪の山が大きくできました、皆が、上つて遊んでをりますから、あなたもなにとぞ。」

と、呼びに來られた時も、ただ、さびしくほほゑんで見ただけでした。そして、

故里へ歸る山路のそれならば

心やゆくと雪も見てまし

と、靜かに、料紙へ書きつける彼女でありました。

父爲時は、この田舎へ來てから、めつきり沈んでしまつた娘の様子を、内心、非常に心配しないではられませんでした。そして、自分の任期は、まだすまないけれど、この子だけを、ひとまづ都へ歸さうかと思つたりしました。

ちやうどその時のことでした。思ひがけなくも、遠縁にあたる藤原宣孝のぶたかといふ人から、彼女

を妻に迎へたいと、はるばる都から使を遣はして、頼んで来たのです。

それは、あまりにも突然なことでしたから、彼女自身はいふまでもなく、爲時さへ、即座に返答はできかねるのです。そこで、この、宣孝からの申し入れを、承諾するにしろ、しないにしろ、とにかく、これを機会に、彼女を都に歸らせよう、といふことになりました。

越前に来てから、ちやうど二年目、長徳三年の秋も終に近い頃、彼女は、京都に向かつて、越前國武生を立つたのです。

まだ國司の任期がすまない父の爲時と、その父と共に、なほここに留る、兄の惟規などに別れて、いよいよ自分だけが都に歸るとなると、さすがに、淡いさびしさを覚えるのですが、それにも増して、都に歸る喜びは、深いものでありました。

今日から、もう四日目には、都の人だ。——さう思ふと、心が明かるくなつて、體までが、ひとりでに軽くなつてくるやうに思はれるのでした。

行きには七日もかかつた道が、歸りとなると下りが多く、日數も、殆ど半分ですみます。

越前を立つて三日目、琵琶の湖は、もう、ひろびろとひらけ、雪を頂いた伊吹の峯が、眼の前に聳えてゐました。

都にゐた時こそ、高い峻しい山として考へてゐたこの伊吹の山も、越前國の、あの雪深い白山の峯を朝夕見馴れてきた眼には、もう、さほどのものとも思はれません。

名に高き越の白山ゆきなれて

伊吹の嶽を何とこそ見ね

彼女は、思はず口ずさみました。

ここから、都はもう近いのです。さういへば、比叡の峯の都を守る姿も、はるかに望み得るやうな氣がします。そして、その山の下にこそ、なつかしの都が、横たはつてゐるのです。

彼女の胸は、たとへやうのない感激で、早くもいつぱいになつてきました。

都へ。都へ。——

そして、我が家へ。いろいろの書物の豊かに藏められた、なつかしの我が家へ。——
車の進みやうが、今は、ひとしほもどかしい彼女でありました。

四、宇佐の使

長徳三年(紀元一六五七年)の冬の初め、父爲時にさき立つて、ひとりて都へ歸つて來た式部には、平穩な、そして、落ちついた毎日が、ずっと續いてゆきました。

明くれば長徳四年、彼女はもう二十一歳です。

去年の秋、はるばると越前まで人を遣はして、彼女を妻に迎へたいといつてよこした宣孝は、あれから、もう何度か爲時のもとへ、同じことを懇望して來てゐました。けれども、なほ爲時は、心にそれをきめかねてをりました。

一體、この宣孝といふ人は、式部の家と同じく北家の藤原氏——房前の系統——であるばかりでなく、その中でも、冬嗣の六男良門の子孫であることまで、同じなのです。

この良門には二人の子供があつて、兄を利基、弟を高藤といひました。この利基といふ人は、賀茂川の堤つみに家を建てて住んだといふ、あの風流歌人兼輔かねすけの父で、式部の父の爲時からは、曾祖父にあたる人です。

この利基の弟にあたる高藤は、内大臣の地位に上り、死後は正一位といふ、臣下としては、

最高の位を贈られた人でありました。宣孝の先祖は、實に、この高藤なのです。ですから、式部の家は兄筋であり、宣孝の家は弟筋にあたるといふことができます。しかも、かうした古い關係があるばかりでなく、式部の祖母——爲時の母は、藤原定方の娘で、爲時から定方は、外祖父にあたるわけですが、同時にこの人はまた、宣孝の曾祖父でもあるのです。

爲時と宣孝とは、かういふ親戚關係があるほかに、圓融天皇の御代の末頃、二人は、共に藏人として、天皇の御側近くお仕へしたこともありました。それで、以前から、とても仲がよかつたのです。

仲よしといつても、年は爲時の方が五つ六つも上でしたし、またその性質も、すっかり違つてをりました。

爲時は、まじめで曲つたことは大嫌ひ、やりかけたことは、何でもできるまでこつこつと續けていく、といつた性質でした。そのかはり、人からは、多少けむたがられるところもあつたやうです。いはば彼は、いかにも學者らしい人でありました。それにひきかへて宣孝は、鷹揚おうやうで、さつぱりした明かるい感じのする人でしたから、皆から好かれてゐたのでした。

こんなに、二人は、それぞれ違つた特徴をもつてゐたのでしたけれど、お互に相手の人とな

りを信じ合ひ、尊敬し合つて、交つてきたのです。
 年下の宣孝は、爲時を、兄のやうに慕つてゐました。そして、爲時は、どうかすると、なげやりになりがちな、間がぬけたやうなところのある宣孝を、ゆきとどかない、しかし愉快な弟として、いつもかはいがつてゐたのです。

こんなことがありました。

圓融天皇の永觀二年(紀元一六四四年)の冬のことです。賀茂の臨時の祭が、十一月二十七日に行はれるといふので、朝廷では、その御準備にお忙しかつたのです。

臨時の祭といふのは、春はとりわけ賑やかでいいが、冬は、何も慰むものがなくてさびしい、といふ賀茂の明神様のお告げによつて、宇多天皇の御代から始められたといはれてゐます。さういふわけで行はれる祭ですから、とりわけ、神樂や舞樂を盛にして、神様の御心を、お慰めすることになつてゐました。

その頃、藏人として、天皇の御側近くお仕へ申しあげてゐた宣孝は、この年の祭の舞人まひびとに選ばれました。そして、舞をするほかに、禊みそぎの儀式が行はれてゐる時、御馬を神前にひき出す役目をも、仰せつかつたのでした。

いよいよ、その日になりました。

今は、神官も設けの座につき、帝みかどもお出ましになりました。これから、宮中での御儀式が行はれるのです。

それは、まづ、禊みそぎをすることから始ります。神官が、大麻たのまを奉じて神前にすすむ時、御馬がひき出されて来るはずになつてゐました。

ところが、もう、神前に神官がすすんでしまつてゐるのに、まだ御馬はひかれて來ません。そして、御馬をひくはずの宣孝は、すました顔をして、さつきから神樂をあげる人達の席に坐つたまま、一心に拜觀してゐるではありませんか。

彼に注意をしようにも、おごそかな気分のみなぎつてゐるこの式場で、席を立つたり、話し合つたりすることは、もちろん許されません。

人々は、ただ、はらはらするばかりでした。

そして、御馬は、ひかれないうままで、とうとう禊みそぎはすんでしまひました。

それから後、歌舞の儀・神樂の儀などが、定められた通りに滞とどまりなくすすんでゆきました。しかしながら、一番はじめが失敗だつたものですから、何だか、忘れ物でもしたやうな、あと

口の悪い氣持が、誰の胸にも残つてゐたのです。

祭の行事が、すっかりすむやいなや、

「今日、御馬をひかなかつた者を、よく調べるやうに。」

と、天皇には、藏人頭藤原資實くらうどのとうすけざねにお申しつけになりました。そこで、宣孝は、資實から呼びつけられたのです。

「なぜ、御馬をひかなかつたのか。」

「御馬を、……でございますか。」

宣孝は、きよとんとして、不思議さうに申しました。

「さうだ。襖みそぎの折に、御馬をひくやうにと、あれほど申しておいたのを、一體、何を聞いてゐたのだ。不注意にも、ほどがあらう。」

「しまった！」

と、叫んだ彼の顔色は、さすがに變つてゐました。

「すっかり忘れてをりました。」

今、氣がついた自分の過あやまち、しかも、とり返しをつかない大きな過の恐しさに、彼は、次第

にうなだれてゆきました。

あの、襖みそぎの折に、御馬をひかなかつたのは、なまけたのでもなければ、わざと怠つたのでもなく、襖みそぎに氣をとられた結果、自分のなすべきことをも忘れてしまつたのです。そして、祭がすんでしまつても、まだ思ひ出さず、今いはれてみて、始めてびつくりする。——宣孝といふ人は、こんなおんきなところのある人だつたのです。

藏人頭藤原資實は、をかしくもあり、かはいさうでもあり、叱るのに、張り合ひがなくなつてしまひました。

「とかうの仰せがあるまで、家に歸ることは相成らぬ。」

かういつて、資實は、宣孝を一室にとちこめておき、自分は、一部始終を 帝に申しあげました。

天皇には、その顛末てんまつを聞き召されると、

「いかにも、宣孝のやりさうなことだ。」

と、お笑ひあそばされました。そして、

「これから後、再びかかることのなきやう、よく戒めよ。」

と、仰せられただけで、それ以上のお咎めは、ありませんでした。

宣孝は、どんなに、畏くもありがたくも思つたこととせう。

かうしたお話でもわかるやうに、彼には確かに、凡張面さ、綿密さといつたものに、缺けたところがあつたやうです。しかしながら、鷹揚で、物事にこだはらないことを、その特徴とする彼としては、その一面に於て、かうした缺點のあるのも、また、いたし方のないことであつたともいへませう。

しかも、無邪氣であるだけ素直であり、鷹揚であるだけ、また、大膽なところもありました。彼は、自分のいいと信ずることなら、世間の思はくなどは少しも顧みず、どんどんやつてのけるやうな人でした。

彼が、今から七年ばかり前に決行した、御嶽詣では、さうした彼の性格を、よくあらはしてゐるものです。

御嶽は、金峯山ともいひ、紀伊山脈中の高峯の一つとして有名です。昔、役の行者といふ修験者が、千日の間ここにこもつて、この山の本尊とするための佛を祈つた時、金剛藏王がおあらはれになつたといふいはれのある山で、それ以来、頂上に、藏王権現をお祀りし、靈験あ

らたかなお山として、この時代の人々からも、たいへん尊ばれてをりました。

昭和の今日、この山の峯嶺きである大峯山に詣でる人が、山伏姿に身を固めるやうに、この當時に於てもまた、御嶽にお参りする人は、長い間精進して心身を清め、白い行衣に身を包んで、極めて質素な身なりで参ることが、その習慣となつてゐたのでした。どんなに身分のいい人でも、このお山に登る限りは、さうした服装に、身をやつされたものです。

ところが、宣孝には、どうしても、それが氣に入らなかつたのでした。

「神様に對して、失禮にならない衣服でさへあれば、どんな着物でもよささうなものだ。行衣を着ないと登られないといふ法は、一體どこから出てきたのだらう。」

彼は、御嶽の話が出ると、きまつたやうに、こんなことをいつて議論するのでした。

そして正暦二年(紀元一六五一年)の春の暮、彼は思ひ立つて、御嶽詣でを決行したのです。先達が行衣をつけるやうに申しましたけれど、もとより、一向に聞き入れようとはしません。そして、彼は、その當時、朝廷で定められてゐた一番正式の、美々しい服装に身を正しました。「まさか、御嶽の神様が、そんな身なりで詣でるとはけしからぬと、お叱りにもなるまい。」彼は、そんな皮肉をいひながら、これ見よがしに、堂々と都を立つて行つたのです。

御嶽は、もとより峻しい山です。奇怪な形の大きな岩石が、所々に聳え立ち、切り立ったやうな深い谷に臨んでゐます。道らしい道は、もちろんありません。

詣でる人、下る人、いづれも粗末な行衣を身にまとひ、冠つてゐる烏帽子も、長い間の山ぶみに、いたみ損じてゐます。久しい精進で、眼もくぼみ、頬もこけて、いかにも行者のやうな風體の人達ばかりです。

さうした人達の中に立ちまじつて、宣孝が、美々しい服装で平氣で登つて行つたものですか、さあ、たいへんです。

「まあ、これは、これは……。」

「一體何といふことだらう。」

「御山始つてから、こんな人は見たことがない。」

と、口々に罵つたり、呆れたりしたあげく、

「今に権現様の罰があたるに相違ない。」

といふ聲が、誰いふとなく、お山中に廣がりました。

地面の底から、揺り動くかと思はれるやうな物凄い山鳴り、すさまじい響と共に、轉り落ち

る巨大な岩石、濛々と立つ土煙、吹きつゝの大風、——彼らは、このお山の荒れ狂ふ有様を、いひ合はせたやうに、頭の中に描きました。そして、こんな罰あたりな人と、一緒に參り合せた我が身の不運を、早くも恐れ悲しみ始めました。

ところが、宣孝は一向平氣です。自分のことを誹つたり、呆れたりしてゐる人々を、尻目にかけて、彼は、さつさとお參りをすませました。そして、もとのままの服装で、四月の末に、無事に都へ歸つて來たのです。

正装をして御嶽へ詣でたといふこのことは、非常に大きな冒険として、彼らが都を立つて行つた後、實は、たいへんな評判になつてゐたのです。そして、果して、彼らが無事に歸り得るかどうかといふことが、都でもまた、噂の種になつてをりました。それですのに、今、彼は、無事に歸つて來たのです。何だか、あてのはづれたやうな物足りなさを感じながら、

「たとへ、參詣こそ無事にすましたにせよ、これからさきはあやしいものだ。」

と、都の人々は、なほも、彼のその後の動靜に、注目してゐたのでした。

それから、一月あまりたつた六月十日頃のことです。不意に筑前の國司が死んだので、彼は、全く思ひがけなく、その後任に任せられました。

筑前は、大國です。太宰府を控へたこの國は、九州一の立派な國であり、また、文化の中心でもあつたのです。

その國司に任せられたといふのですから、罰があたるところか、たいへんな幸運といはねばなりません。

彼が、いよいよ筑紫へ下る日、彼を知つてゐる人も、知らない人も、一樣に、新しい任地へ向かつて、はればれと出發する彼の一行を、何だか、軽い失望に似たものを感じながら、見送つたのでした。

考へてみれば、いかにも宣孝がいふやうに、神様に詣でるためには、不敬にあたらぬ服装でさへあれば、どのやうななりでもいいやうに思はれます。

「必ずこれを着て參れ。」

と、神様の方から、人間の着て詣でる着物を、お選びになるなどといふやうなことは、確かにないはずで、それが、いつの間にか、

「御嶽詣では、必ず行衣を着ること。」

と、定まつてしまつたのには、もちろん、種々の理由があつたことは、いふまでもありません。

しかし、時代がたつにつれ、最初の精神は忘れられてしまひ、ただ何の考へもなしに、行衣を身につけ、それでなくては罰があたるなどと、まるで神様がお定めになつたかのやうに、窮屈に考へてゐる世間の人の心が、彼には、氣に入らなかつたのです。

そして、彼は、正しいと信ずるところを、勇敢に實行したわけなのでした。

筑前守が不意に死んで、彼が思ひがけなく、その後任となつたことも、或は、かうした彼の態度や考へを、御嶽の権現様がお感じになつて、お與へ下さつた御利益なのかも知れません。

しかし、かうした彼の眞の考へがわからない世間の人々は、このことがあつてから、彼を、すつかり變人扱ひにしてしまひました。

しかしながら、さすがは爲時です。彼は、この宣孝が、世間の人々の頭より、一步すすんだ考へをもつてゐることを、この事件によつて、更に、はつきりと見抜いたのです。そして、見どころのある、立派な人として、より一層彼を信じるやうになりました。

宣孝はまた、爲時の娘が非常に優れた天才であり、立派な學者でもあることを知ると、持前の、鷹揚な無邪氣な性質から、そんな偉い女の人なら、どうかして、自分の妻にほしいものだと、一途に思ひこんでしまつたのです。

長徳三年の秋、はるばると越前まで人を遣はして、爲時にその由を申しこんだのも、全くそのためでした。それから後もまた、何度か越前の爲時のもとへ、同じことを頼んで来て、火のついたやうに催促してよこしたのです。

爲時は、この宣孝の申し出に對し、心の底から迷つてゐました。

爲時は、決して、宣孝の人となりについて、とやかく、思つてゐるわけではありません。彼が、宣孝の申し出に對して、容易に心をきめることができなかつたのには、他に理由があつたのでした。實をいふと爲時には、既に數人の子供があるうへに、五十に近い自分と、殆ど年の違はぬ宣孝では、僅かに二十を少し越したばかりの式部に對して、あまりにも年が違ひすぎると思つたからでした。

「やはり、こればかりはことわらう。」

と、そんなに思ふものの、また宣孝の鷹揚な、明かるい素直な人となりを思ふと、式部のやうな女は、却つて、かうした人にあづける方が、よくはないかと迷ふのでした。

かうして迷ひながらも、爲時は、宣孝の熱心な申し出に、少しづつ動かされてゆくのでありました。

その頃、右衛門權佐に昇進してゐた宣孝は、式部が、越前から歸つた翌年、即ち長徳四年の四月、更に、山城守に任ぜられてゐました。

山城は都のある國です。ですから、いはば今の東京府のやうに、國々の中でも一番上に位しましたし、従つて、その國司も、他の國の國司に比べて、格が高かつたのです。いろいろの神社のお祭などがある場合でも、山城の國司は、國守として参列することができましたし、何かと名譽を得ることも多いのでした。ですから、宣孝は、爲時に比して、非常に恵まれてゐたともいへるでせう。そして、彼が、よくかういふ地位に達することができたのについては、いろいろの理由も考へられますが、つまるところ、彼の家柄や彼の人となり、或はまたその運といつたものが、大きなはたらきをもつてゐると思はれます。

さきにも述べたやうに、彼の家は、式部の家と同じ系統ではありませんが、彼の先祖高藤の女で、胤子と申される方は、第五十九代 宇多天皇の女御でいらせられ、第六十代 醍醐天皇の御母にあたらせられます。

このやうに、先祖が、皇室の外戚となつたといふことが影響して、同様に、北家の末流であるとはいへ、高藤の家は、その兄利基の家よりも、代々勢力があり、また、いい地位にも就き

得たのでありました。その家
に生まれたために、宣孝は、僅
かに爲時が越前一國の國司となつ
てゐる間に、備中・備後・周防・筑
前等の國司を歴任して、今、山城の
國司をつとめてゐるのです。

そして、明かるいその性格の故に、多
くの人々からかはいがられてゐましたし、
時の右大臣藤原道長なども、ずるぶん彼に眼
をかけてゐたやうです。

道長は、宣孝が、式部を妻にほしがつてゐる
といふ話を聞いた時、早速、自分からも爲時に話
してやりました。

道長は前にも述べた通り、爲時とは詩の友達であ

り、越前へ行けるやうに、盡力してやつたことのある
間柄です。

爲時は、自分でも氣持の動いてゐたところへ、道長から

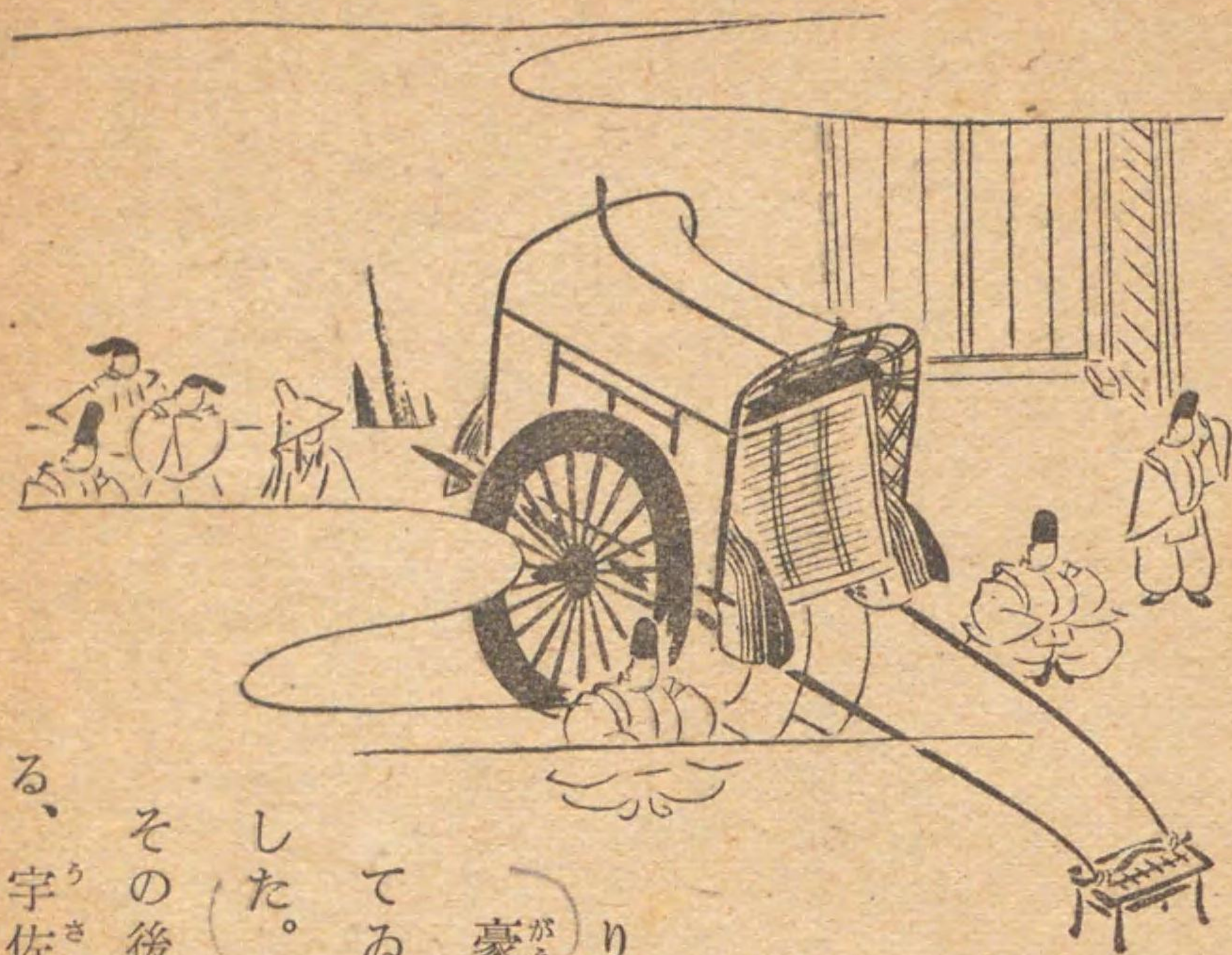
のとりなしを受けて、遂に、式部を妻として宣孝に
與へようと、決心したのでありました。

かうして、長保元年(紀元一六五九年)、越前から歸つて
三年目の秋に、式部は宣孝の妻となりました。

その時、宣孝は四十二歳ぐらゐ、式部は、二十三歳ばか
りでありました。

豪放で、明かるくて、どこかに子供らしい無邪氣さをもつ
てゐた宣孝は、式部に對し、全くやさしい、いい夫でありま
した。

その後間もなく、宣孝は、三年に一度行はれることになつてゐ
る、宇佐八幡宮奉幣の勅使として、都を立ち、再び九州へ下るこ



とになりました。

朝廷から、お供へあそばされる品々を納めた幾つもの唐櫃からげつ、御獻進ごけんしんあそばされる御馬などを加へた勅使の行列が、おごそかに都を出て行くのを、式部もまた、大路に車を立てて見送つた一人でした。

十一月も、終に近い頃のことです。大路を吹き通る冷たい風が、容赦ようしゃなく車の簾すだれから吹きこんでくる中を、

「なにとぞ、長の旅路を恙つつがなく、立派にその任務を果して下さいますやうに。」
と、彼女は、いつまでも、いつまでも、祈り続けるのでした。

五、試煉に堪へて

長保元年(紀元一六五九年)十一月、宇佐八幡宮へ奉幣の勅使として、都を立つて行つた宣孝は、その翌年の二月に、重い任務を無事に果して、再び都へ歸つてまゐりました。

夫を、久しぶりに我が家へ迎へた式部の喜びは、もとより大きいものでした。

そして、それから後、妻としての彼女の生活が、なごやかに續いていきました。

右衛門うゑもん権佐ごんのすけといつて、右衛門府といふ役所では、上から二番目に偉い役人であつた宣孝は、宮中内外の警衛を司どる任務をもつてをりました。それと同時に、彼は、山城國の國司でもありましたから、山城の國務をもみなければならぬので、たいへん忙しいのでした。

一日中の務めをすませて、すっかり疲れて歸つて来る宣孝を、式部は、いつも、優しくにこにこしながら待ちうけて、その勞をねぎらひました。それから、楽しい夕餉ゆふけのひと時が過ぎられるのです。

宣孝は、今日一日、お役所であつたいろいろの出來事や、仲間の人達の様子などを、式部に話して聞かせます。時には、政治向きのことなど、女では容易にわからないやうなことをさへ、

話題に上せることがありました。そんな時には、とりわけ、彼女は、熱心に聞き入るのが常でした。

式部の父爲時は、何度か述べてきたやうに、どこまでも學者肌の人ですから、學問の道には詳しく、その點では式部にとつて、またと得難い先生でもありました。しかしまた、その半面に於て、實際的な方面には、多少うといところもあつたのです。

ところが、この宣孝といふ人は、それとは反對でした。彼もまた、大學は出てゐるのですから、當時の役人としては、恥づかしくないだけの學問はあつたはずですが、爲時の學者肌なのに對して、實際家であり、政治家肌の人でありましたから、それだけにまた、世間の事情にもよく通じてをりました。

それ故に式部は、宣孝のもとに來てから、今まで、父に教へられてゐなかつた世間の事情などを、いろいろと知ることができ、政治向きの問題なども、よく辨わきまへるやうになりました。このことは式部をして、從來の深い學問的知識のほかに、豊かな常識の持主もちぬしとならせたのです。そして、このことは、これから後、式部の考へが深まつてゆくためには、どれほど役に立つたかわからないことなのです。

それと同時に、夫の宣孝もまた、式部の深い教養から、いろいろの助力を受けたのでした。つつしみ深い式部のことですから、宣孝のところへ來てからも、決して自分の學問や詩才を誇るやうなことはなく、ただまめまめしく家庭の仕事にいそしむ日本の女性でありました。こまごました、わづらはしい家の中のこと、彼女の聰明な判断と、機敏な手腕とによつて、整理されていきましたから、少くとも家事に關しては、宣孝は、何の心配をすることもなかつたのです。

宣孝は、また時折、式部に、歌や詩の代作をしてもらふこともありました。宮中や、友達の家などで、歌や詩の會が開かれることがあつて、前からその題がわかつてゐる場合は、

「ひとつ、またよろしく頼みますよ。」

といつて、彼女のところへ持つて行くのが、常でした。

「まあ、御自分でお作りなさいませ。」

と、式部がことわつても、

「いや、詩なんてものは、私にはどうも苦手で……。」

と、むりやりに押しつけてしまふのでした。

妻が、自分よりも、恐らく詩でも歌でも上手であらうし、また學問も深いであらうけれど、それを少しもあらはさないで、つつましかかにしてゐることを、宣孝は常に感心もし、また、さうした式部の人となり、ゆかしくも思つてゐました。で、持前の率直な朗かな性格から、彼は、自分の妻に對する喜びを、時折、友達に對してもありのままに話すのでした。

「どんな話をして、ちゃんと理解してくれるから、ほんたうにありがたいと思ふよ。」とか、「大抵、女といふ者は、知らないことまで、知つたかぶりをしたがるものだけれど、それが少しもないのだよ。私は、あの控へ目なところが何よりも好きだ。」

などと、無遠慮に申しますので、時に、宣孝が何かわからなかつたり、困つたりしてゐますと、「家に歸つて教へてもらふといふ。」などと、からかはれたりしました。

そんな時、彼は家に歸るとすぐさま、いかにも楽しさうに、式部に報告するのが常でした。二人の家庭は、かうして、春風の吹いてゐるやうななごやかな氣分が、いつも充ち満ちてをりました。しかも、喜びは、そればかりではありません。その年——長保二年の秋、彼女は、

遂に母とさへなりました。玉のやうな女の子が生まれたのです。

「何といふ幸福なことせう。ほんたうに私は、幸福すぎるのではないかしら。」

自分の傍に、すやすやと眠る幼兒をさなごの顔を見つめながら、また乳房をくくませながら、彼女はしみじみと思ふのでした。

母であるといふ喜び、——それは、女と生まれた者のみに、神様がお與へ下さつた、人間最大の喜びでなくて何でありませう。

立派な兩親の下に、その愛を一身に受けて育ち、更にまた優しい夫の下に、妻として愛せられてきた式部は、今や、母として、子を愛する楽しみをも味はひました。この世の中で、得られるだけの喜びを、式部は、すつかりもつことができたのです。

その頃、世間は、また騒がしくなつてきてゐました。

一昨年の夏から冬にかけて、都中の人々を滅しつくすのではないか、と思はれたほどのひどい勢ひで流行した疫病が、今年はまだ、九州の國々で、ひどくはやつてゐるといふ噂が立つて、この頃では、寄るとさはると、その話でもちきりなのです。

「これは、都もただではすむまい。」
 「きつと、ここへも今にくるだらう。」
 そして、人々は、一昨年の疫病の、ひどかつた様子を思ひ出して、いひやうのない不安に襲はれるのでした。

その疫病といふのは、赤いぶつぶつしたものが、體中一面にできて、非常に高い熱の出る病氣でした。そこで人々は、これを赤斑瘡あかもがさ(麻疹はしか)といつて、たいへん恐れたものです。唯今なら、病人を隔離かくりしたり、豫防注射を行つたり、消毒をしたりして、それぞれ、適當に處置する方法が備はつてゐますが、今から九百年ばかりも昔のその頃では、まだ何といつても、衛生の設備は不完全であり、防疫設備といふものは全く無いといつてよい有様でしたから、ちやうど風にあふられる火のやうに、病氣は廣がる一方でした。身分の高い人、低い人の差別はありません。十日あまりも苦しんだあげく、快くなつた者もありましたが、大抵は二三日のわづらひで、死んでしまひましたから、その慘狀は、更に不安を生み、恐怖はつるばかりでした。ちやうど、その時のことです。

「左京は三條大路の南、油小路あぶらの西にある井戸の水を飲め。さすれば、病は、立ちどころに

快くなるであらう。——といふお告げがあつた。」

こんな噂が、パツと立つたのです。

誰も彼も病におびえてゐるところでしたから、これを聞いた人々は、手に手に、桶ひしやくや柄杓ひしやくを提さげて、我も我もと、三條の大路を油小路へと急ぐのでした。

その井戸は、水も濁り、底には、深い深い泥がたまつてゐて、平生から皆が、氣味悪がつて寄りつかかなかつたところでした。

何年も何年も淀よどんだまま、汲よまれなかつた水は、かうして、病氣におびえた哀れな人々によつて、あとからあとから汲よまれていきました。そして、病氣を逃れたい一心から、これらの人は前後の分別もなく、この水を、おしいただいて飲んだのです。

すると、どうでせう。

もう病氣にかかつて苦しんでゐた人々も、まだ幸ひにかかつてゐなかつた人々も、激しい下痢ひりが起つて、二日もたたぬうちに、皆、立つこともできなくなつてしまひました。

かうして、赤斑瘡あかもがさだけでなく、この井戸水のためにも、たくさんたくさんの病人が殖え、多くの人が死んでいつたのです。

また、一方では、

「眼には見えないけれど、疫病神が飛び廻つてゐて、その入りこんだ家に、病人が出るのだ。」
といふ噂も立ちました。

それを聞いた人々は、また、我も我もと、家の門を固く鎖して、一步も外へ出ないやうにしましたので、道行く人はめつたに見られず、これがあの美しい都であつたかと、怪しまれるほどに、ひどくさびれてしまひました。

朝廷でも、たいへんお困りになつたことは、いふまでもありません。

まづ、三條の古井戸は、絶対に飲まないやうに、固くその周囲をお圍ませになると同時に、諸國の神社に使を遣はして、疫病の退散をお祈りになり、諸國の寺々にも病氣平癒の祈禱をおさせになりました。そればかりでなく、疫病神を都の郊外に祀つて、

「なにとぞ、これ以上仇をなさらぬやうに……。」
と、願はせられました。

かうした真心が、通じたのでせうか、その年も暮れ、翌長徳五年の正月になると、さすがの疫病も、次第に下火となつてきたのです。

「もう安心だ。」

「ああ、よかつた。」

と、人々は、互に顔を見合はせて、自分達の無事を喜び合ひました。やがて、その月十三日、年號も改つて、長徳五年は長保元年(紀元一六五九年)となりました。そしてその年は、何事もなく無事にすみました。それが長保二年の秋になつた今、一昨年と同じ病氣がまた、九州で盛にはやつて來たといふのです。

親を、妻を、或は夫を、また、その子供を、といふやうに、親しみ愛する者達を失つた痛手も、まだなまなましい人々は、この噂を、身を切られるやうな思ひで耳にしました。そして、また、不安にをのきながら、更に自分も、人に傳へたのです。

かうした不安のうちに日がたつて、年の暮も迫つた頃、恐れに恐れてゐたあの疫病は、とうとう都へ入つて來たのです。

九州から上つて來た旅商人の一人が、その最初の病人でした。

一旦都の地に、根を下した病菌は、枯草に火がついたやうな勢ひで、翌長保三年の春になると、都の人々を襲ひ始めました。貴賤上下の別なく、また、男女の差別もなく、人々は、次々

に高熱と發疹はっしんとに苦しみ、そして、死んでいったのです。

朝廷にお仕へする公卿達で、今度、この禍わざはひひにかかった者は、五位以上の人で六十人ほどありました。そして、式部の夫右衛門權佐兼山城守藤原宣孝もまた、實にその一人でありました。

その年(長保三年)の春から、宣孝は、身體の工合が何だか變でした。ずっと、床についてゐるほどではなかつたけれど、氣分のはつきりしない日が、幾日も幾日も續きました。それ故に、宮中へ出仕することも稀となり、平生から、彼をかはいがつてくれた藤原道長——當時左大臣になつてゐました——が、わざわざ人を遣はして、自宅の宴會に招いてくれても、いつもことわつて、ただ家に引きこもつてばかりゐたのです。

もちろん式部は、かうした夫の容體を、たいへん心配しました。御祈禱を頼んだり、自分も御願おぐわんをかけたりして、看病にひたすら心をくだきました。そのかひがあつてか、三月になり、櫻の花も咲き始める頃、宣孝は、平常の元氣をやうやくとり戻すことができたのです。

「もう大丈夫。」

庭の花が、一目に見渡される縁に出て、傍の妻をかへりみながら、長い間の心づかひを、宣

孝は感謝するのです。

元氣を恢復した夫の顔を見るだけで、式部はもう、十分に満足することができました。かうして、ずるぶる長い間忘れられてゐた夕餉ゆふげの楽しさが、再び彼女の家庭に蘇よみがへらうとしてゐました。

そこへ、この疫病の流行です。

長い間の病氣のあとで、體の抵抗力が、まだすつかり恢復してゐない宣孝には、この激しい病菌の侵入を、どうしても防ぎきることができませんでした。

僅か二日足らずのわづらひで、遂に宣孝は、最後の息を引きとつていったのです。時に、長保三年四月二十五日の晝下りでした。

すつかり青葉と變つた庭の木々が、黒々と動かない影を、地面に落してゐました。その沁みこむやうな静けさの中を、式部のすすり泣きの聲が、堰せきを切つて、庭一面に廣がつていきました。

「僅か二日足らずで……、あんなに長い間看病して、折角、あれまで快くなられたのに。——

ああ……。」

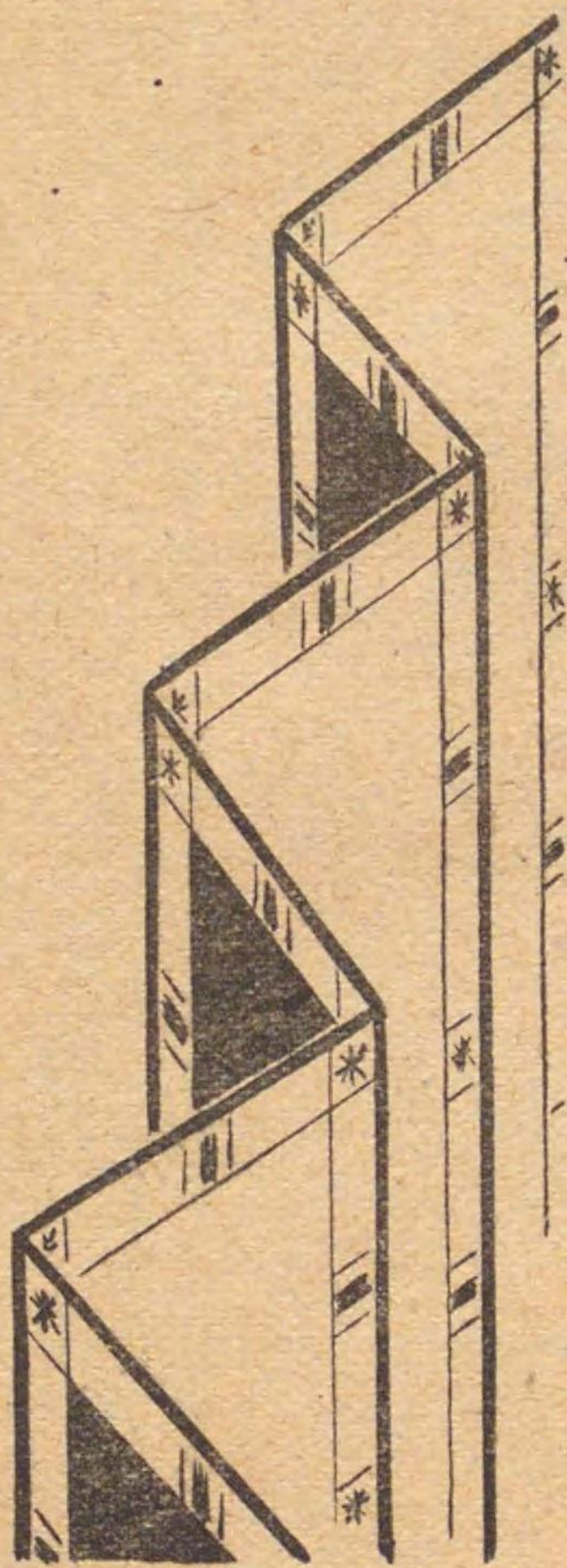
悲しさ、腹立たしさ、情なさ、——さうしたあらゆる感情が、小さな胸の中でもつれ合ひ、からみ合ひ、そして、あげくの果ては熱い熱い涙となつて、止めどもなく流れ出るのです。彼女は、ただ泣き続けました。

去年で國司の任期がすんで、都に歸つてゐた父の爲時も、急を聞いて、早速駆けつけて来てくれました。

親戚の人々も、宣孝の友人達も、皆集りました。

さうした人々によつて、葬式の準備がととのへられていつたのです。

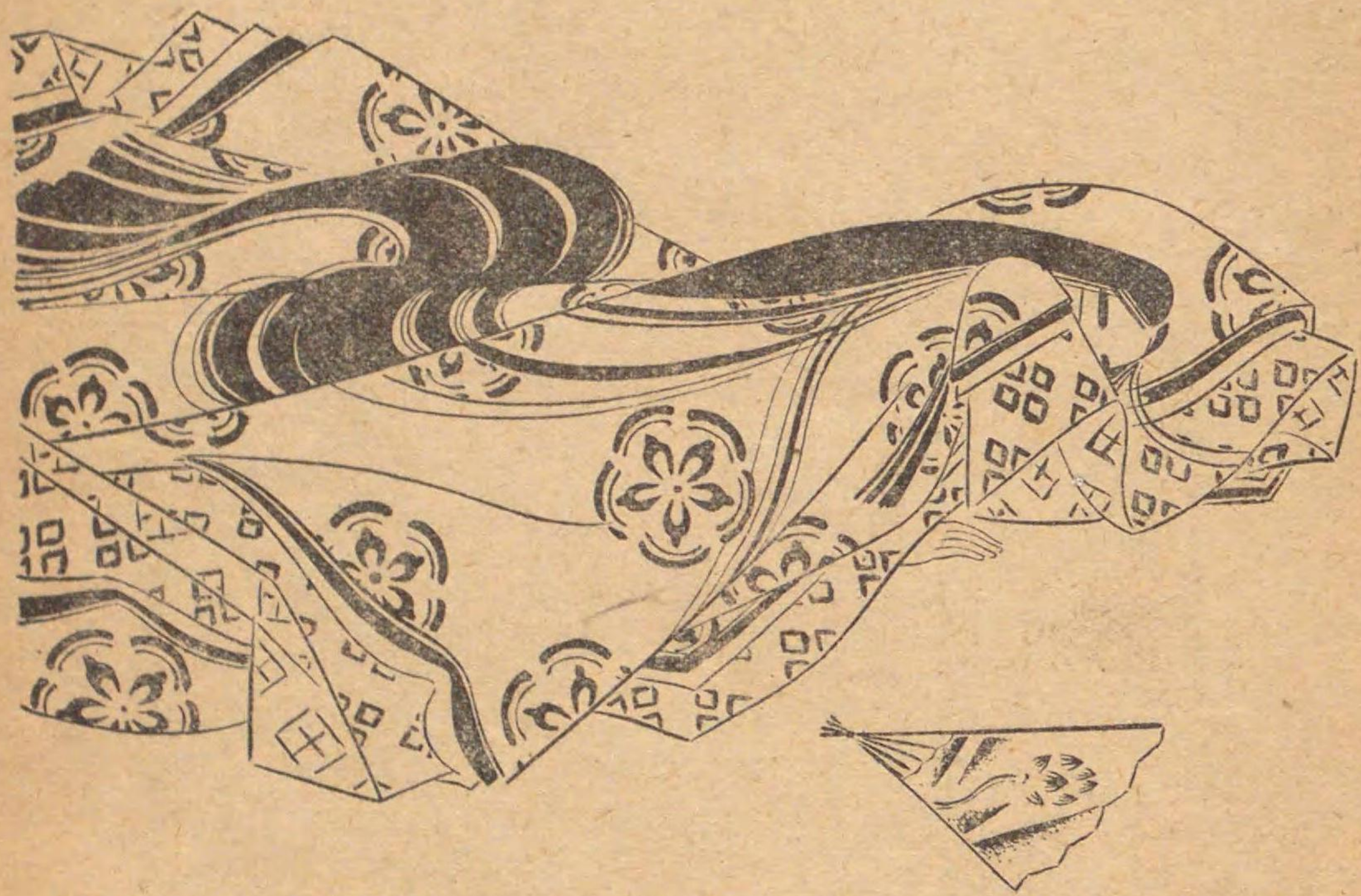
なきがらを送る夜、赤い火をとぼした人々に前後を守られて、柩を載せた車は、靜かに門を出て行きました。そして、その行列が、やがて、一面の闇の中に吸ひこまれてしまひ、ただ人々の持つ赤い火だけが、ちらちらと動いて行くのを、式部は、いつまでもうつとりと見送るのでした。



夫が死んで、今、愛宕の火葬場（今の京都市松原建仁寺町東北側の邊で、念佛寺がある）へ送られて行く。そして、自分は今、それを見送つてゐる。動いて行くあの赤い火が、その行列の火なのだ——。

事實としては、確かにわかつてはゐるのですが、なほ、それが現であるのか、夢の中の出来事であるのか、わからない氣持なのです。

頭の中いつぱいに、もやもやしたものが詰つてゐる氣持で、自分のしてゐることが、現とも夢ともはつきりわからぬやうな幾日かが、なほも



續くのでした。

集つてゐた人々が、ぼつぼつと引きとつて行くにつれて、家の中は、何だか急にガランとした感じになりました。

そして、くる夕方も、くる夕方も、

「ああ、疲れた。」

と、口では大仰おほきやうにいひながら、それでも元氣よく勤めから歸つて來た宣孝の、あの聲は、あの足音は、もう決して聞くことはできませんでした。

彼女にとつて、宣孝の話を通して、世間のことを知るのに、このうへもないいい機會であつた、あの楽しかつた夕餉の時も、今は、彼女の膳だけがわびしく待つてゐるばかりです。

宣孝の机の上の書物には、しるしのしをり柴はきが挿はさまれたまま、もう、その上に埃ほこりが白く浮かんでゐました。

それらを見るにつけ、やうやく、夫の死といふことが、否めない現實として、式部の頭にはつきりしてきたのです。

夫は、逝いつてしまつた。そして、二度と再び歸つては來ないのだ――。

何ともいひやうのないさびしさが、痛いほど、胸の中に沁みこんできました。

悲しみの薄もやの、なほ霽はれやらぬ式部の頭の中に、時としてゆききするものは、匂ふやうに樂しかつた思ひ出のかずかずでした。

「やはり、私は恵まれすぎてゐたのだ……。」

式部は、思はずつぶやきました。そして、乳母の口からよく聞かされた、「あまり賢いと、不幸な目にあふ。」「あまり頭がいいと、人は短命だ。」といふやうな言葉が、またしても意地悪く頭に浮かんでくるのでした。

實際、この言葉が、ほんたうに自分の一生を暗示してゐるやうな氣がして、宣孝のもとにかしづいてから、優しい夫の妻として、また、かはいの子供の母として、その幸福にひたりながらも、一抹いちまつの不安を覺えたことが、彼女には、これまでに何度あつたか知れませんでした。

それがどうでせう、遂に事實となつて、今、眼の前にあらはれてゐるのです。

「くるべきものがきたのだ。やはり私は、かうならねばならなかつたのだ。」

つくづく、彼女は考へました。

どんなに人間が偉くとも、なほ、到底及ばない大きな力、それが運命であるとすれば、式部

は、今、はつきりとその力を認めたのです。そして、自分もまた、その手の中から出ることができないのを、はつきりと悟つたのです。

式部には、沈んだ心で暮す日が多くなりました。

あの恐しい疫病の流行は、かうして式部から、大切な夫を奪ひましたけれど、その片手には、みどりご 嬰兒があるといふ幸福がまだ残されてゐました。

去年の秋に生まれて、やうやくこの頃、這ひ這ひができるやうになつたこのなまなこ 幼児には、もとより父の死も、母の歎きも、わからうはずがありません。毎日々々、手あたり次第に何でもつかみ散らしたり、ねぶつたりしながら、部屋中を、元氣に這ひ廻つてゐます。そして、式部の姿を見つけると、どこにゐても、大急ぎで這ひ寄つて来て、遠慮なく膝の上にかき上り、お乳を催促します。口いっぱいに乳房を含んで、満足さうに母の顔を見上げる、圓い黒い二つのひとみ 瞳、——そこには、世界中で、ただ一人の人に對する絶対の信頼が、無邪氣にあらはれてゐるではありませんか。

「賢子！」

式部は、思はず抱きしめるのでした。

「私には、まだこの子がある！」

打ちのめされたやうな暗い心に、「母だ！」といふ氣持が、明かるく強く蘇つてきました。賢子、——このみどりご 嬰兒こそは、實際、式部にとつて心の太陽でした。

「どんなことがあつても、この子だけは、立派に育てあげねばならない。」

と思ふと、かうしてはゐられない、もつと元氣を出さう、もつと強く生きよう——といふ、生活に對する新しい熱意が、再び強く起つてくるのでした。

若竹の伸びゆく末を祈るかな

この世をうしと思ふものから

自分のすべてを幼児に捧げて、今はただ、母としてのみ雄々しく生きていかうとする式部の眞情が、ここに十分に窺はれるではありませんか。

六、佗び住まひ

五月、六月、七月。——月日は風のやうに流れていきましたが、夫を失つた式部の悲しみまでは、拭ひ去つてくれませんでした。

しかし、その悲しみも、だんだんと月日がたつにつれ、しみじみと沁みこむやうな、何とはなしにやるせないものになりました。

宣孝の死後は、邸に使ふ人の數も、ずっと減つてゐましたので、これまでは、草一本なく、きれいに手入れされてゐた庭にも、所々に雑草が青く伸び、いつの間にか、水苔が一面についた池は、木の葉が幾つも幾つも散りこんで、何となく古さびて見えました。

家の中心となる人が一人ゐなければ、かうまでさびれるものであらうかと、式部は、暴風雨に損じたままの壁や扉などを見廻すのでした。

そして、我が子の遊び疲れてぐつすり眠つてしまふ晝下りや、また、夜更けなど、あたりがしんと静まりかへつた中に、ただ一人であると、式部には、いひやうのないさびしさが、ひしひしと迫つてくるのでした。

彼女は、そんな時、いつもその無心な寝顔に見入りながら、思ふのでした。——

「この子のためには、どんなことがあつても、自分は強く生きねばならない。そして、また、立派に成人させてやらねばならない——」。

しかし、人間の壽命などといふものは、全く、あてにならないものなのです。式部は、今度といふ今度、夫宣孝の死によつて、それを、あまりにもはつきりと見せつけられたのでした。

「このうへ、自分にもしものことがあつたら、一體この子は、どうなるだらう。」

と、何ともいへない不安な氣持で、胸がいつぱいになつてくることもありました。そればかりでなしに、一方、さし迫つた暮し向きのことも、考へないではゐられませんでした。

それは、夫が遺してくれた財産を、頼みにすることができないところから、起つてくる悩みでありました。

今日でこそ、財産といへば、主にお金を指しますが、貨幣といふものが、まだ十分に發達してゐなかつた當時では、田地の多寡によつて、貧富の別がきまるのです。

朝廷から、公卿達にお分け與へになるのも、この田地でした。それですから、高い官位や官

職を賜はつてゐるほど、多くの田地を持つてゐるわけで、従つて、當時財産家といへば、その多くが、都に住む公卿達でありました。

かうした人々は、もちろん自分自身の力で、その田地を作るなどといふことはできません。その場所も、日本全国にわたつてゐるのですから、適当な人々に耕作させ、それからとれた米の幾割かを、年貢として納めさせてゐたのです。今日の言葉で申しますと、地主と小作人との關係になります。地主が高位高官である場合は、その威光によつて、何の面倒も起りませんでしたが、これに反して、地位の低い者ですと、その権力の遠くまで及ばないのを、いいことにして、小作米を納めないばかりか、しまひには、横領してしまふやうな狡猾な小作人もありました。

かういふよくない例を、式部は實際に聞いてゐましたので、夫にさき立たれた無力な女の身として、田地からの収益に對する不安を濃くしたのは、むしろ當然のことといへませう。

夫の宣孝をなくした式部としては、父爲時に頼ることも考へられますが、彼はどこまでも學者肌な人でありますから、常々名利に背を向けてきただけに、別段暮しに困るといふほどではなかつたけれど、さればといつて、とり立てていふほどの財産も無かつたのです。ですから、

式部自身としても、これからさき、ずっと、自分達親子の生活を見て下さいなどは、どうしてもいひかねることでした。

そこで彼女は、長い將來への暮し向きのことを、考へておかねばならなかつたのです。この問題につきあたると、式部はいつも、なくなつた夫宣孝のことが思ひ出されました。

「ああ、生きてゐて下さつたら——。」
と、はかない溜息が、またしても彼女の口から洩れるのでした。

齒の抜けたやうなさびしさの中に、式部は、なほも深い物思ひに沈んでいきました。

——私は學問に熱中した。日本の書物も、支那の書物も、大抵は讀んできた。佛教の教へも、あの多くの經文を通して、私にはわかつてゐる。

しかし私は、學問の深さも、みやびの道に長じてゐることも、人に知られまい、あらはすまいと、どれほど、氣をつかつてきたことだらう。しかもそれは、勉強のための苦勞よりも、はるかに大きなものであつた。そのために、私は、とうとうこんなに陰氣な、はしやげない女になつてしまつたやうな氣がする。

でも、せめてこの子、この賢子だけは、自分のやうな目にあはせたくない。思ふままにのび

のび育てて、十分に、幸福な一生を送らせてやりたいものだ。そして、さうすることが、私のつとめなのだ。――

物思ひは、いつもそこへ落ちてゆくのでした。

宣孝がなくなつてから、二年あまりもたつと、さすがに彼女の心には、よほど餘裕よゆうができてきました。

宣孝との結婚から、その死別まで、――この世の中で、味はふことのできる最大の喜び、楽しみ、また、悲しみ、さうしたものを、すべて味はひつくすことのできた、あの三年間の生活が、今は、ただ暮れなづむ夕霽ゆふもやの中に、そこはかどなく匂ふなつかしい思ひ出となりました。

喜び、楽しみ、悩み、悲しみ、苦しみ、――さうしたさまざまな感情を味はひながら、人は生き、そしてまた、死んでゆく。

けれども、もしも、喜びや悲しみがなかつたら、人の世は、どんなに退屈なものになつてしまふことであらう。――

かういふ氣持でも物を見れば、喜びにつけ、悲しみにつけ、それらはみな人生の一断面とし

て、いづれも捨て難い趣おもむきのあることが、見逃せなくなつてきます。

で、式部もまた、さうしたものの見方から、自らの過去をふり返り、周囲を見廻しました。

そして、そこに一卷の繪卷物のやうに、くりひろげられるあらゆる事柄に對して、彼女は強い關心の眸ひとみをそそぎ、そこからじみ出す人生の味はひを噛みしめては、そのなつかしさ、そのうるはしさに打たれるのでした。

やがて式部は、身につけた學問・詩才を通して、しみじみと、咽ぶばかりに、なつかしく美しいこの人生を描いてみたい、秘められた人の情や、殿上人てんじやうびとの華やかさをも、つぶさに寫してみたいと思ひ立ちました。

それには物語がいい、さうだ、物語を書かう。――式部はかう思ひ立ちますと、何か身内にゆさぶるやうな熱情を感じないではをられませんでした。

そこで、彼女は、賢子の面倒を見るかたはら、物語の筋を考へ、人物を工夫することに、多くの日數を費しました。そして、その後は、賢子の眠つてゐる暇ひま々に、机に向かつて物語の筆をすすめるのでした。

すこやかに成長していく賢子が、式部の腹から生まれた愛娘まなむすめであるならば、この物語は、

式部の頭から生まれた、いとしの子供であるともいへませう。

賢子の成長を、こよなく楽しい氣持で見守りながら、彼女は、また、この物語の發展に、いやうのない喜びを、覺えないではをられませんでした。

晝は賢子の面倒を見、夜は物語の筆をとる。——かうした毎日の習はしが、いつか式部の生活を形作つてゆきました。

このやうに育兒と著作とに、すべてが捧げられたので、もはや、物思ひに沈む時間は、彼女には残されてゐませんでした。

それからといふものは、母と著作者との二通りの生活が、その侘び住まひに、續けられてゆきました。

この、式部の夜を日についての努力に、やがて、花が咲き實のなる秋がまゐります。愛娘賢

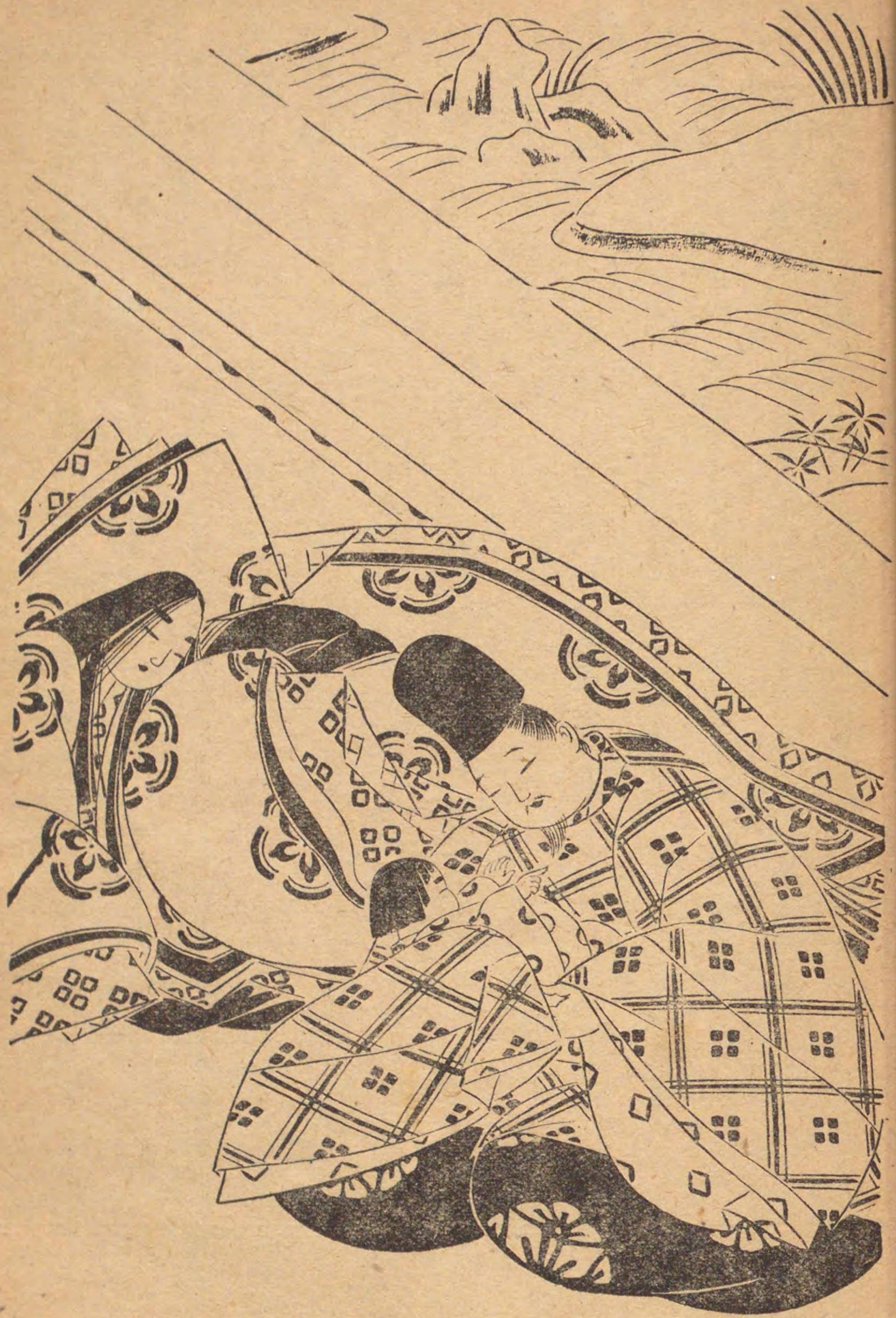
子は無事に成人して、たかしななりあき高階成章といふ人の妻となつたのです。かの小倉百人一首の中の、

ありまやまひな有馬山猪名のささ原風吹けば

いでそよ人を忘れやはする

の作者として有名な、だいののさんみ大貳三位こそ、生ひ立つた賢子のみやびた姿にほかなりません。

そして、毎日書き續けられていつた物語の筆もまた、いよいよ熟し、數年の後には、あの有名な『源氏物語』として、立派に完成するのであります。



七、宮 仕

越前守をやめてから、まだ官に就いてゐなかつた爲時は、讀書や詩作に、餘裕よゆうのある落ちつ
いたその日その日を送つてゐましたので、氣が向くと、よく式部の家をたづねました。

「おお、大きくなつたな。」

と、着物をすつかり後に廻してしまつて、胸もお腹も出したまま、おいたに餘念のない賢子を
見つけると、彼は、きまつてかういひました。

「さあ、おぢいさんのところにおいで。」

賢子は、抱いてもらふと、

「お庭に出ませう。」

といつて、せがむのでした。時には、

「お馬がいい。おぢい様、お馬になつてちやうだい。」

などと、いひます。

「まあ、何ですな、この子は。」

見かねて、式部が、たしなめることもありました。このやうな親子水入らずの、うちとけたまどぬに於ても、彼は、父親としての限りない愛情をもつて、娘の態度に、細かな注意を拂ふことを忘れませんでした。

かうして、彼は宣孝の死後二年もたつたこの頃になつて、やうやく彼女が冷靜にかへり、ものの考へ方にも、ずつと落ちつきができてきたことを認めて、心ひそかに喜ばずにはをられませんでした。ですから、

「氣ばらしにと思つて、こんなものを書き始めてゐます。」

と、式部が、例の書きかけの物語の原稿を持ち出してきて見せた時、

「ほう。」

と、それを手にした爲時は、式部が、いつかこの物語を完成し、この物語の中に、彼女自身の生きてゆく道を見出すであらうと、とつさに思ひました。

「まあ、せいぜいしつかり書くがいい。暇も十分あらうからな。」

と、爲時は、娘を勵まして、讀み終つた草稿を、満足さうに返すのでした。

彼は、この娘が、小さい時分から、自己の才能なり學問なりを、常に、表面に出すまい、あ

らはすまいとして、一心に努力してきたことを、十分に知つてゐました。それだけに、また、さうした彼女が、いとしくていとしくてたまらなかつたのです。けれども、今、かうして物語を書くとなれば、これまでずつと包まれ、藏かくされてゐた彼女の深い學問や才智が、その物語の隨所に、始めて十分に發揮されるであらうといふことは、いふまでもありません。従つて、物語を書くことにより、學者としての彼女の生きる道が、ここに開かれたといつてよいわけなのです。そしてまた、とりもなほさずそのことは、もう長い間、式部に對し、學者の家の女の子として、爲時自身が懐いだき續けてきた物足りなさを、せめて補ふものでもあつたのです。

「まあ、せいぜい書くがいい。」

かういつた爲時ははればれした表情のうちには、實に、學者である父親としての無限の感慨が、こもつてゐました。

「子を知るは、父に如くはなし。」——それは全く、この場合の式部と父爲時との間に、ぴつたりとあてはまる諺ことわざのやうでありました。

この世に於て、またと得難いただ一人の理解者である父爲時のほかに、式部には、もう一人、外部から常に彼女を慰め、力をつけてくれた人に、左大臣藤原道長がありました。

道長は、結婚後、僅か三年足らずで夫宣孝にさき立たれ、幼児を抱へて、式部がただ一人暮してゐることを、たいへん氣の毒に思つて、何か珍しいものでもあると、すぐに届けさせ、
 「たまには邸に遊びにおいでなさい。氣も紛れようから。」
 などと、慰めの言葉をかけました。

或時は、わざわざ車まで用意して、

「今、これに乗つて來るやうに。」
 と、招いたこともありました。

かうして、式部は、道長の邸に、しばしば参入するやうになり、その妻倫子とも近づきになりました。ここに、彼女が、道長の長女にあたり、しかも、一條天皇の中宮であらせられる、彰子の侍女として、宮中にお仕へするやうになる、そもそのいとぐちがあつたのでした。

道長の家も、式部や宣孝の家も、同じく藤原氏で、しかも、北家に屬するのですから、皆、一族の間柄なのです。

系圖を見ればわかるやうに、道長の家は、冬嗣の長男長良から出てをり、式部の家は、その弟の良門から出てゐますので、道長の家は、兄筋にあたるわけです。しかも、長良の子孫は、

基經もとつね以來代々優れた人が多かつたものですから、北家の中でも、この系統の人々が、最も大きな勢力をもつやうになつて、御歴代の皇后は、概ねこの家からお立ちになり、攝政せつしやう或は關白といふ、臣下としては最高の地位に上ることが、その習はしでありました。
 それに反して、式部や宣孝の家は、せいぜい、國司に任せられる程度の家柄であつたのです。ですから、一族であるとはいふものの、この兩家の間には、公おほやけには、長官と部下との別がはつきり存在してゐましたし、私には、「氏の長者ちやうじや(氏全體を統べる人)」と、「氏人うぢびと」との相違があつたのです。

中でも、基經の孫であり、道長の祖父である師輔もろすけは、さうした關係を、動かすことのできな
 いものに確立した人でした。といふのは、師輔の女安子は、村上天皇の皇后に立たせられ、冷泉天皇、圓融天皇の御母とならせられたばかりでなく、また、五人の男の子は相次いで、太政大臣の地位に上ることができたものですから、師輔の家の勢力は、同族を壓し、氏の長者としての地位を固めたのであります。

道長の父は、兼家かねいへといつて、師輔の四男でありましたが、その兼家もまた、一條天皇・三條天皇の外祖父にあたり、太政大臣でもありました。そして、道長は、この兼家の五男であ

ります。しかも、皇室の外戚として、また、藤原氏の氏の長者として、先祖の誰もが達し得なかつた強い勢力をもち、いはゆる、藤原氏の全盛時代を築きあげた人でありました。

いかに家柄がよかつたとはいへ、長男ならばまだしも、五男の身として、よくさうした地位に達し得たのには、やはり彼が、人に優れた幾多の長所をもつてゐたからであります。

ちやうど、花山天皇の御代のことでした。その頃は、まだ年も若く、従つて官も低かつたのですが、至つてまじめに、道長は、兄の道隆・道兼と共に、宮中にお仕へしてゐたのです。

五月雨さみだれが、しとしと降つて、何だかうす氣味の悪い或夜のことでした。いつものやうに、兄弟三人は、御側の人々が控へることになつてゐる部屋に詰めてをりますと、御年若くいらせられた帝みかども、ものさびしく思し召されたのでせうか、そこにお出ましになりました。そして、人々を御相手に、いろいろなお話に、時をお過しあそばされたのです。ところが、いつの間にか、話題は、怪談じみた物凄いのものに移つていきました。この時不意に、

「今夜は何だかうす氣味悪い晩だが、どうだ、これからただ一人で、人氣のないさびしいところへ行つて来る勇氣はないか。」

帝はお笑ひあそばされながら、一同をお見廻しになつて、仰せられました。

「どういたしました。」

「とても、一人でなど、まゐられさうにございません。」

一座の者が、口々におことわりの御返事を申しあげる中で、道長だけは、

「仰せのところ、いづこへなりとまゐります。」

と、平然として申しあげたものです。

「さうか、それはおもしろい。では、道隆も道兼も行け。場所はこれから定めてやらう。」

帝は、御氣軽く仰せられました。

思ひがけなく、お鉢の廻つてきた二人の兄が、すっかり驚いたことは、いふまでもありません。

「よけいなことを、申しあげねばいいのに。」

と、弟を睨にらんでみましたが、もう追ひつきません。

三人の兄弟は、それぞれ、自分の行くべき場所を承ると、その席を退出いたしました。

雨は、ちやうど上つてゐましたが、一面の闇が、廣い廣い御所全體をすっかり包んでゐます。

時刻は、今の午前の二時に近い頃でした。

豊樂院（饗宴などを催された御殿）といふ御殿へ、行つて來ることを仰せつかつた道隆は、恐る恐る半分ばかりも行つた頃、突然、行く手にあたつて、奇妙な鋭い叫び聲を聞きました。その瞬間、冷水をかけられたやうに、ぞつとして、彼は、はふはふの體で引き返して來たのです。仁壽殿（御内宴・相撲などの御遊を行はせられた御殿）といふ御殿へ出かけた道兼は、やつとの思ひで、その傍まで行き着くことができませんでした。もう四五間も行けばいいといふところまで來ると、彼は、始めて頭を上げて、眞直に前を見ました。

すると、どうでせう。

黒い御殿の軒のきに、軒丈ばかりの大入道が、夜目にもしるく、突つ立つてゐるではありませんか。彼は、胸の動悸どうきが、一瞬間止つたかと思ふほどびつくりしました。それから後は、彼もまた、もう無我夢中で、引き返して來たのです。

帝を始め奉り、人々は、二人のかうした失敗談を、大笑ひして聞かれました。恐しい恐しいと思ひながら行くものですから、そんな幻影げんえいを見たのに相違ありません。しかしながら、當の二人の顔色は、なかなか、もとには戻りませんでした。

かうして、一座の人々は、今はただ、大極殿（御即位式などの大禮を行はせられた御殿）へ行つた道長

の歸りを、今や遅しと待ち構へてをりました。

「いづこへなりとまゐります。」

と、大きなことをいつた彼が、こんなに遅いのは、きつと、行き着いてゐるに相違ありません。しかし、さきにあれほど高言を吐いておきながら、もしも失敗して歸つて來たら、散々ひやかしてやらう、といつた氣持から、道長が元氣を失つて歸つて來るのを期待する心も、ひそかに皆の胸には起つてゐたのです。

「どうだつた。」

「どうだつた。」

やがて、悠然と歸つて來た彼を見ると、人々は口々に問ひかけました。しかし、道長は、眞直に御前にすすんで、何だか木のきれはしのやうなものを、恭うやまつしく差し出したのです。

「何か、これは……。」

「はい。仰せのところ、確かに行つてまゐりました。しかし、何もその證據がなくてはと存けづじまして、御殿の柱の根もとを削り取つてまゐつたのでございます。明朝にでも、どうか合はさせてみて下さいませ。」

彼の顔は、いつもの通りはればれとしてゐました。

まつくらの闇の中を、しかもこの深夜、遠く離れた御殿にまで行つて來ることさへ、なかなか勇氣がいりますのに、まして、證據のために柱を削つて歸るといふ、その豪膽さ、その用意の周到さに、帝の御感はもとより、並みゐる人々も、いづれも感心いたしました。

道長は、若いけれど、ただ者ではない。——かういつた感じが、この時より以後、人々の胸にはつきりと残りました。

一方、彼はまた、弓の上手であり、馬術に於ても、評判の暴れ馬を乗り靜めるだけの、手並をもつてゐました。

しかも、さうした武藝ばかりでなく、學問・文學といつた方面にも、優れた才能をもつてゐたのです。この當時、誰もが嗜むことになつてゐた漢詩や和歌も上手であり、音楽や建築といつたものにも、ひとかどの技倆と見識とをもつてをりました。

つまり、道長といふ人は、當時の貴族として、高い教養と、深い藝能と、廣い趣味とを併せもつてゐた、立派な人物であつたといふことができませう。

評判の人相見が、彼を見て、

「一點、非のうちどころのない相だ。」

と、口を極めてほめ讃へたといふのも、かうした内の深さが、おのづと、その相貌にあらはれてゐたに違ひありません。

そのうへ彼は、さうした人並優れたものをもつ自分といふものを、十二分に發揮し得た、世にも幸運な人であつたのです。

長兄道隆——かつての雨の夜、豊樂院へ行く途中恐しくなつて引き返した人——は、もうその頃、父兼家の跡を嗣いで、關白となつてをりましたが、長徳元年（紀元一六五五年）の四月、病氣のために、四十三歳でなくなりました。その後を受けて關白となつたのは、次兄の道兼でした。あの雨の夜、仁壽殿から逃げ歸つて來た彼も、今年は、もう三十五歳で、立派な公卿となつてゐました。彼は關白に任命された時、病氣で床についてゐたのですが、任命の御禮を言上するために、病をおして参内したのが、いけなかつたのでせうか、それから、めつきり悪くなつて、七日目に、とうとうなくなりました。長徳元年の五月二日から八日まで、この間、僅か七日にすぎませんので、世間では、彼のことを「七日關白」と呼びました。

道長には、この二人の兄のほかに、なほ二人の兄がありました。一人は道綱といひ、立派な

人でしたけれど、事情があつて、道長達とは別に暮してゐましたし、もう一人の兄は、病身で常に引きこもつてばかりをりましたので、この二人の兄をさしおいて、五男ではありますが、道長が、内覽ないらんに任命されたのでありました。ここにいふ「内覽」とは、「關白」より、少し軽い意味ではありますが、實質的には、關白と變らない役です。

そして、その年、やがて彼は右大臣に上り、翌長徳二年、あたかも式部が、父と共に越前へ下つて行つた年の七月、左大臣に昇進いたしました。

かうして、兼家の子供達の中でも、道長が藤原の氏うぢの長者として、一族を統率する地位に立つたのでした。

正暦年間しやうりやくの末、うち續く疫病えきびやうや饑饉のために、世の中に不安な氣持がみなぎつてゐた時、まだ官の低かつた彼は、

「自分が政治あづかに與るやうになつたら、世間は、きつと靜かになるだらう。」

と、すました顔をしていつたさうですが、運命といふものは、おもしろいもので、道長を中心とする平和な時代が、實際に、これから生まれてくるのです。

長保元年（紀元一六五九年）十一月十一日、道長の長女彰子は、一條天皇の女御にようびとして入内な

さいました。

四十人の侍女、六人の童わらべ、六人の下仕しもつかへ、これだけの人々が、その際、彰子のおつきとして、宮中に入つたのです。

侍女として選ばれた人々は、身分や家柄もよく、性質もおだやかで、姿かたちの美しい人達ばかりでした。しかも、字を書くこと、歌を詠むこと、琴・琵琶びばなどの音楽にも優れてゐて、さうした女性の嗜みには、すべて缺けるところがないのみならず、人との應對もまた上手といふ、侍女としての條件を、兼ね備へた人達ばかりでありました。

入内の翌年、即ち長保二年に、彰子は中宮の位に上られました。中宮と申すのは、皇后様と同様な位であります。

彰子は、この時十二歳でありました。しかし、天性非常に聰明そうめいな方でありましたし、おつきしてゐる侍女達もまた、何かとお相手をしてお導き申しあげましたから、中宮としての御修養は、立派におつみになつていらつしやいました。ですけれど、何と申しても、まだお若くいらせられませんでしたので、父の道長も、母の倫子も、年とつたしつかりした人物を、中宮におつけ申し、學問なり、世間のことなり、さうしたいろいろなことをお教へできたらと、ひそかに、よき侍

女の物色中であつたのです。けれども、ただ、侍女としての條件にかなうた人ならば、たくさんありまして、求めるやうな人は、なかなか見つかりませんでした。かうして、探しあぐんでゐた道長夫妻が、ともども「この人ならば。」と思つたのが、實に式部でありました。

道長は式部に對し、早速その旨を申し入れました。しかし、今の自分のやうな氣持では、とてもさうした生活に、なじんでゆけないと思つた彼女は、宮仕への華やかさには、心をひかれながらも、おことわり申しあげたのです。

さうしてゐるうちにも、月日はずんずん流れました。愛娘賢子は、すくすくと育つてゆき、日毎に少しづつ書き續けた物語も、もう大分はかどつてゐました。そして、その中の一部は、既に世間にも傳へられ、全く目新しい讀物として人々に愛讀され、また、書き寫されてもをりました。それと同時に、物語の作者としての紫式部の名は、次第に高まつてまゐりました。

道長の懇望を、どうしてもことわりきれなくなつた式部が、七つになつた賢子を、父の爲時の家にあづけ、書き残りの草稿を抱いて、中宮の侍女として宮中に出仕したのは、寛弘四年（紀元一六六七年）十二月二十五日、彼女の三十歳の時でありました。

かうして、式部の新しい生活が、始つていくのでした。

八、才女の集ひ

「いままゐり」（新參者）としての、落ちつかない氣がねの多い生活が、しばらくの間、式部には續きました。そして、一方では、さうした毎日を過してゐる間に、宮中の様子や、朋輩の侍女達の氣風を、少しづつ會得していききました。

侍女のことを、この時代では女房にようばうと申します。女房としてお仕へするためには、歌も、字も、音楽も、凡そ女として知つてゐなければならぬものは、すべて心得る必要があります。しかも、その中のどれか一つに秀でることが、大切なこととされてゐました。例へば、和歌がたいへん上手であるとか、琴が非常にうまいとかといふやうに。

自分の侍女が、天下に並ぶもののない歌人であつたり、琴の名手であつたとしたら、さうした優れた侍女をもつてゐる主人の人格もしのばれて、尊敬が増すのであります。ですから、なるだけ、自分の名譽になるやうな侍女を得ようと、苦心をされるのが常でした。

同時にまた、相當な家柄に生まれた女の人は、宮仕へに上ることを誇りとして、それをめあてに自己の才能を磨くことに、ひたすら努力したものです。

かうして、この時代には、教養ある女性がたくさん生まれ、そして、宮中は、さうした人々の集つてゐるところでありました。

彰子が 一條天皇の中宮となられた時、その父道長が、藤原氏の氏の長者として、藤原氏全體を統率する自己の大きな勢力を利用して、できる限り優れた女の人を、その侍女に選んだことはいふまでもありません。さきに述べたやうに、彰子が入内じゆだいされる時、おつきとして、共に宮中に上つたあの四十人の侍女達は、いづれも、かういふ道長の鑑識めかひにかなつた、立派な女人たよなん達ばかりでした。

その中へ、當時既に評判になつてゐた『源氏物語』の作者、紫式部が加へられたことは、一段の色彩を添へたに違ひありません。

それでは、宮中に於けるこの新しい式部の仲間には、一體、どのやうな人がゐたでせうか。式部はその日記の中に、仲間の人達の何人かについて、いろいろと書きとどめてゐます。この人々の中から、當代でも指折りの歌人をあげてみますと、まづ第一に、和泉式部いづみがあります。和泉式部は、その子小式部内侍こしきぶのなむしと一緒に、お仕へ申してゐました。そして、母子おやこともに優れた歌人でありました。

この和泉式部といふ人は、生まれつき非常な感情家であつたので、その生活ぶりには、しぜん、派手はでなところが少くなくかつたやうでしたけれど、その豊かな感情は、巧みな表現と相待つて、多くの立派な歌となつて残されてをります。彼女の歌は、その當時、既に公おはやけにされてゐた彼女の日記と共に、ずるぶん世間で、もてはやされたものでした。

彼女の娘小式部内侍もまた、この母の血を受けて、歌が上手でした。けれども、母親の式部があまりに有名なので、小式部内侍の歌については、

「あれはきつと、母親に作つてもらふのだらう。」

「いや、作つてもらはないにしても、直してもらふに違ひない。」

などといつて、その實力は、なかなか、世間の人々に認められませんでした。

或時のことです。不意に、宮中で歌合はせの會が開かれることになり、女房達も歌を出すやうにと、仰せられました。その折、和泉式部は、ちやうど丹後たんごに行つて、留守でありました。常々、内侍の歌の上手さに、疑ひをもつてゐた人々は、

「小式部は、さぞかし一人で弱つてゐることだらう。」

「今度こそ、自分で作らないわけにはゆくまい。」

「が、どうだらう、出すだらうか。」
 「いや、きつともう、丹後へ人をやつて、母親に作ってもらつてゐることだらう。」
 などと、いらぬ心配をしたあげく、ひとつ、彼女を慰めがてら、様子を見に行かうといふことになりました。

中納言藤原定頼さだよりを先頭に、數人のおせつかい達が、彼女の部屋に尋ねて申しました。

「今度の歌合はせの歌は、どうなされますか。」

「丹後へ、ひとつ使を出されたら、どんなものでせう。」

「いや、大丈夫。今頃はお母さんの返歌を持つて、使が丹後を立つてゐるよ。」

定頼は、いかにも自信ありげに、一緒に來た友達に向かつて斷言すると、一步、小式部に近づいて、申しました。

「それにしても、やはり使の顔を見るまでは、何かと御心配でせうね。」

その言葉が終るか終らないうちに、小式部は、彼の着物の袖をすつと捉とらへました。そして、

大江山いくの道の遠ければ

まだふみもみず天の橋立

と、ほんたうに、すらすらと詠みかけたのです。

「都から行くのには、あまりに道が遠いので、あの有名な天の橋立を、自分はまだ踏んでみたこともないが、その地に行つた母からも、なほ何の文かみ(便り)ももらつてゐない。それなのに、どうしてこちらから使がやれることでせう。」——と、定頼のあの失禮な言葉に對して、彼女は、見事に歌をもつて、抗議を申しこんだのでした。

和歌を詠みかけられて、返歌をしないといふことは、このうへもない恥づかしいことでした。しかし、この場合、どこまでも小式部の歌才を、みくびつてゐた定頼は、思ひがけない優れたこの歌に對し、即座に返歌ができませんでした。そこで彼は、捉へられた袖を振り離すと、はふはふの體ていで逃げ歸つたのです。

この話は、忽ち宮中に、また、世間に廣がりました。そして、母親の和泉式部の名と共に、小式部の歌人としての名聲も、一時に高くなりました。そして、この「大江山」の歌は、當時多くの人々に、愛誦あいしよされたといふことです。

かうした逸話いつわの持主である和泉式部母子と並べられ、果してどちらが歌の上手かと、論じられた人に、赤染衛門あかぞめもんといふ人がありました。

この人は、學者として名高かつた大江匡衡おほえのまさひらの妻で、あの有名な大江匡房まさふさの、曾祖母にあたる人なのです。性質の極めておとなしい、しとやかな婦人でありましたから、おのづと、その作る歌も、おだやかな感じのものが多いのでした。

和泉式部母子のやうに、この衛門にもまた、さうした逸話が幾つか世間に傳はつて、歌人としての彼女の名を高くしたものです。

和泉守であつた赤染衛門の子息舉周たからかが、その任期をすませて、都へ歸る途中のことです。彼は急に、わけのわからない奇妙な病氣にかかつて、醫者にみてもらつても、御祈禱ごきたうをしてもらつても、とても、助りさうもなくなりました。

息子に付き添つてゐた母の衛門は、もう、氣が氣でありませぬ。自分の壽命は縮めてもいい、子の命を延ばしてやりたい——と、彼女は、切ない母心の、ただ一心に思ひつめました。そして、住吉の神様に、御幣ごへいを捧げて、我が身をもつて、子の命に代へて下さいと、ひたすらお祈りしたのです。

代らんと祈る命は惜しからず

さても別れんことぞ悲しき

彼女は堪へきれなくなつて、御幣の串くしに、そつと、ありのままの氣持を書き添へました。

「子供のために代る命は、自分は少しも惜しくありません。しかし、自分が死ねば、あの子の顔は見られなくなります。それが悲しうございます。——」といふ意味の歌です。

彼女が、この御幣を捧げて祈願した、その夜のことです。神々しい白髪はくはつの老人が、その御幣を手にとりあげて下さつたと夢みて、眼が覺めました。

すると、どうでせう。看護の人が驚くほど、舉周は急に元氣づき、ずんずんと眼に見えて、快方に向かつていきました。

元氣を恢復した舉周は、やがて、何だか母の元氣がないのに氣がつかしました。

「母上、どうなさいました。私がこのやうに快くなりましたのに、さびしさうなそのお姿は。」彼は心配のあまり、母にかうたづねました。衛門は、ただ黙つて、いつぞや御幣の串に書きつけたあの歌を、書いてみせたのです。

舉周はそれと知ると、

「自分が快くなつても、母が、そのためになくなられるやうなことがあつては、たいへんです。それでは子としての道が立ちませんから、なにとぞ、もと通り私の命をおとり下さい。」

と、また、一心こめてお祈りいたしました。

母子の至誠が通じたのでせうか。それから後、舉周は、次第に出世しましたし、衛門自身も、何の變つたこともなく、宮仕へを續けることができましたのです。

當時の人々は、この話を聞いて、住吉の神様の靈驗あらたかなのに驚くと共に、神をも動かすものとして、歌のもつ偉大な力に、今更のやうに感心いたしました。そしてまた、それほど

の歌を詠じた衛門の才を、ほめ讃へたのであります。かういふわけで、彼女達の歌は、歌人として最高の名譽である、代々の勅撰和歌集にもえらばれ、また小倉百人一首の中にも、採られてゐます。

あらざらんこの世のほかの思ひ出に

いまひとたびの逢ふこともがな

これは、和泉式部の歌であり、

やすらはで寝なましものを小夜更けて

かたぶくまでの月を見しかな

は、衛門の作であります。そして、小式部のは、あの「大江山」の歌が採られてゐることは、

いふまでもありません。

寛弘五年の春、——紫式部が宮仕へに上つた翌年——和泉式部や赤染衛門に並ぶべき、有名な年若い歌人が、いま一人、同じく侍女として、中宮にお仕へすることになりました。伊勢大輔と呼ばれる人です。

大輔の父は、大中臣輔親おほなかとみのすけちかといひ、皇大神宮の祭主であり、また、神祇官の大副じんぎくわん たいふ（神祇官の次官、省の大輔にあたる）といふ役目であつたので、彼女は、「伊勢大輔」と呼ばれるやうになつたのです。彼女の曾祖父頼基よりもと、祖父能宣よしのぶ、父の輔親ら、いづれも歌人として有名であり、わけでも、祖父の能宣は、古今集の後にえらばれた勅撰集である『後撰集』の撰者として、名高い人でもあります。かういふ家柄に生まれた彼女が、和歌に優れてゐるのは、當然のことでありませう。

大輔が出仕して、まだ幾日にもならない時のこと、例年の習慣通り、奈良にある藤原氏の寺、興福寺の僧都そうづが、八重櫻を献上してまゐりました。

献上された花の枝は、まづ、女房にようぼうが受け取つて、中宮の御前に出て御覽に入れるのですが、風流を愛した當時のことですから、そこでもまた、歌がつけられることになつてをりました。取り入れ役と定められた一人の女房が、その枝を受け取るや、その場にふさはしい歌を詠んで、

その花を中宮の御前にお持ちするのです。

道長は、晴れの取り入れ人に紫式部をえらびましたが、彼女は、

「私よりも、この間來られた、あの新しい方に取り入れていただきませう。」

と、大輔に譲りましたので、出仕したばかりの大輔に、この大役が廻ってきたわけでした。

中宮彰子が、皇子様御生誕ごせいたんの御祝ひの夜、晴れの御膳をとりまかなふために、数多い侍女の中から、とりわけ美しい人ばかりを八人えらばれたことがありますが、大輔は、その選に入つたほどの美人でした。さうした彼女が、今しも爛漫らんまんと咲き誇る八重櫻の枝を捧げ持った姿は、ほんたうに、繪のやうな美しさであつたらうと思はれます。

新參の彼女には、この時、歌を詠むのだといふことが、まだわかつてゐないと考へたのでせうか、道長が、傍から注意を與へました。

「黙つて取り入れるといふ法はありませんよ。」

その言葉の終るか終らないうちに、

古の奈良の都の八重櫻

今日九重にほひぬるかな



玉をまるばすやうな聲が、大輔の口をついてほしほし迸り出たのです。
 「何といふ氣のきいた歌であらう。」
 と、並みある人々は、一様に驚き、かつ感心してしまひました。
 かうしてこの歌は、彼女の名前と共に、當時の世間では、誰一人知らない者が無いほど、有名になつたのでした。

歌全體を眺めますと、伊勢大輔よりも、和泉式部や赤染衛門の方が、或は上手かも知れませんが、この「古の奈良の都」の歌のやうに、いかにも氣のきいた歌を、卽座に詠みおほすことができるのは、確かに彼女の特徴でありました。

これらの人々は、いづれも、屈指の歌人であり、女ながらも、三十六歌仙といつて、三十六人の歌の上手の中に、數へられてゐる人もありました。

紫式部は、これらの人々の中でも、和泉式部とは、度々手紙をとりかはし、思ふこともいひ合ふくらゐの間柄でした。また、伊勢大輔とは、ずゐぶん年も違ひましたけれど、幾度か歌のやりとりをするほど、親密でありました。

紫式部が『源氏物語』を書いたのに對し、『枕草子』といふ書物を書きあらはしたことで同じくらゐ有名であり、常に並べて考へられてゐる清少納言といふ人は、式部と同じ頃、いや、もう少し前から、宮中にお仕へ申してをりましたが、詳しくいふと、式部とは、そのお仕へした御方が違つてゐたのです。紫式部のお仕へした御方は、中宮彰子でありましたが、清少納言のお仕へした御方は、皇后定子であらせられたのです。

定子は、道長の兄みちたか道隆（長徳元年に薨去）の姫君で、彼がまだ關白として、時めいてゐた時分に入内じゆだいされ、やがて、皇后の御位におつきあそばされた御方でありました。

道隆は、己が女である定子のために、文藝の道に秀でた侍女を、多數に召し集めました。清少納言は、その中でもとりわけ、光つた一人でありました。

彼女は、清原氏の人で、父を元輔もとすけといひました。ちやうど、紫式部の父爲時と同じやうに、官位は低く、やはり國司にまでしかなれませんでした。歌人として名高い人でありました。しかも、元輔の祖父は深養父ふかやぶといつて、最初の勅撰和歌集である『古今集』の撰者であつたのです。このやうに、彼女の家は、代々歌人の家であるといつていいやうな家柄でありました。

そこで、「深養父の曾孫、元輔の娘」といふだけでも、當時としては、相當に、世間から重く

見られるだけのものはあつたのですが、そのうへ、彼女自身が生來たいへん頭がよく、しかも小さい時分から非常な勉強家で、『史記』『漢書』『白氏文集』など、當時日本にきてゐただけの書物は、ことごとく眼を通してゐたばかりでなく、讀んだことを實によく覚えてゐて、場合場合に應じて、うまく活かして使ふことの巧みな人でありました。しかも、生まれつき非常に勝氣で、強情なところもあつたものですから、紫式部のやうに、知つてゐることまで、知らないふりをして過すなどといふことは、決してできません。自分の知つてゐることは、どこまでも、堂々と発表しましたし、また、相手が間違つてゐたり、知らなかつたりすれば、たとへ、それが男の人であらうと少しも遠慮せず、やりこめることぐらゐは平氣でした。

かうして、有名な歌人の娘であり、また、非常な秀才兒として、彼女の名は世間に有名でした。そして、それ故に、皇后定子の侍女として選ばれたのでもありました。

清少納言が、皇后の侍女として宮中に上つてからは、その鋭い感覺はますます磨かれ、その才智は冴えるばかりでした。

雪の非常に降り積つた或日のことです。

あまりに寒さがきびしいので、格子はすつかり下したまま、炭櫃に火をかんかんとおこして、

女房達は、定子皇后の御前に侍してをりました。

「このさしこんでくる光の白さ、さぞかし、雪はたくさん積つてゐることです。」

「ちよつと、格子を上げてみませうか。何だかこのままでは、惜しい氣がいたします。」

皆は、積つた雪が見たいのでした。でも、そのためには、格子を上げねばならず、さうしたら、寒さはひとしほ身に沁みるでせう。雪は見たし、寒くはあるし、誰も動かうともせず、ただ、話し合つてばかりをりました。

と、不意に、定子皇后が、清少納言の方を御覽になつて、

「少納言よ、香爐峯の雪はどうであらうか。」

と、仰せになりました。

その御言葉の、終るか終らないうちに、彼女は、すつと立ち上ると、格子を一問上げさせました。そして、自分は、ただ黙つて、御前の御簾をさらさらと巻き上げたのです。

一面の銀世界となつたお庭が、そこから一目に見渡されました。

並みゐる人々は、我知らず、その雪景色に見とれてしまひました。

皇后様も、最初はちよつとお驚きあそばされたやうでしたが、やがて、それが何を意味する

かにお氣づきあそばされると、につこりお笑ひなさいました。

清少納言は、自分のしたことを、皇后様がおわかり下さつたと見奉ると、再びもとのやうに御簾を下して、自分の席へ靜かに戻りました。

香爐峯といふのは、支那の名山で、その山の麓に住んでゐた、有名な唐の詩人白樂天といふ人が、その詩の中に、

「香爐峯の雪は簾を撥げて見る。」
と、詠じてをります。

白樂天の詩集は、『白氏文集』といつて、當時の日本ではたいへん有名な書物であり、その詩句は、殆ど諳誦あんしやうされるくらゐに、皆から讀まれたものでしたので、今、皇后様が、「香爐峯の雪は……。」と、おたづねになつた時、清少納言は、瞬間、この詩句を思ひ浮かべ、それを行ひにうつしたのですから、機智のほども窺うかがはれるではありませんか。

風流といふことを、このうへもなく愛好した當時では、かうした並なみはづれたみやびな行ひが非常に喜ばれましたので、この話が忽ち宮中隈くまなく傳はつたことは、いふまでもありません。

「實際、清少納言は、后きさひの宮になくてならない人だ。」

人々は、かういつて、ほめたたへたのでした。そして、さういはれることは、とりもなほさず、女房としての彼女が、その使命を、十分に果してゐることなのです。

歌人の家に生まれはしましたが、彼女は、歌の方はさう上手でありませんでした。ただ和漢の書物に通じてゐただけに、口を衝いて出る名言名句のあざやかさに於て、彼女の右に出る者はなかつたのです。

彼女が高慢であり、たいへん學者ぶつてゐるやうに見えたことは事實ですが、その非凡な才智をめでられた皇后様の御信任が極めて厚かつたことも、また事實でありました。身分こそ違ひますが、彼女との間は、姉妹のやうにお親しくいらせられたといふことです。あの有名な『枕草子』は、彼女が、この十年間の宮仕へ生活の、楽しい思ひ出を中心に、見たり聞いたりしたことを、思ふままに書きつらねたものでありました。

もとより清少納言のかうした生き方は、あの紫式部の生き方とは、すつかり反對であるといへませう。従つて、紫式部は、彼女のことを、よく思つてゐなかつたやうでもありませんが、女房としての使命を全うしたものととして、また『枕草子』の著述によつて、國文學に大きな金字塔をうちたてた人として、清少納言は、やはり大きな存在であつたといはねばなりません。

かうして、宮中には、當代有数の才女が集つてゐたのです。そして、紫式部もまた、とりわけ優秀な一人として、その中にあつたのです。彼女の優れた才能は、その宮仕へによつて磨かれ、その評判は、宮仕への間に、ひとしほ高くなつたのであります。

九、みつむる心

ほんたうに、『源氏物語』の作者として、紫式部の評判は、宮中でもないへんなものでした。今日のやうに、印刷術といふものが發達してゐない當時では、ほしい書物は、人から借りるか、或は、それを一字一字書き寫すよりほかに、致し方がありませんでした。ほんたうに、それは、今から考へてみれば、どんなに手間のかかることであつたでせう。それでも、新しい讀み物を求めてやまない人々は、さうした勞苦をも厭いとはず、食むさばり讀んだものでした。當時では、文字といふものが、まだ世間一般に、廣くゆきわたつてゐなかつたので、物語を讀むといふことは、教養ある人々に限られてをりました。従つて、式部の『源氏物語』が愛讀され、評判となつたのも、朝廷にお仕へ申してゐる貴族達や、その子女である女房達の間にかつてでありました。

中には、二三人連れ立つて、式部の部屋をおとづれ、

「あなたは、一體、何をいはうとして、あの物語を書いてをられるのですか。」

「主人公の源氏の君は、あれからどうなるのでせうか。」

とか、

「どうか、あの調子で續けて下さい。今までの物語に比べて、あれは、ほんたうに読みごたへのある氣がします。」

などと、質問したり、勵ましたりする人もありました。

中宮彰子に、敦成親王が御生誕あそばされたので、その御祝宴が、道長の土御門の邸で、盛大に開かれたことがありましたが、その席上で、大納言藤原公任でさへ、

「若紫は、どこにをりますか。」

と、彼女に呼びかけたものでした。

若紫といふのは、『源氏物語』の巻の名前の一つで、ここでは、いふまでもなく、紫式部を指してゐるのです。

この公任といふ人は、學問の深いこと、才智の優れてゐること、政治にも詳しいことで、當時、彼の右に出る者は、誰もゐないといはれるほどの人物でした。ですから、彼に對して、ものをいふにしても、いふ方の人は、ひどく氣がおけたものでしたが、その半面、公任と交際がある、公任と話をするといふことだけで、ずるぶん肩身の廣い氣がするといはれるほどであり

ました。それほどなのに、今は、公任の方から、ものをいひかけたといふのですから、紫式部の評判が、いかに高かつたかがうなづけませう。

そればかりではありません。

やがて、彼女の書いた物語は、恐れ多くも、時の帝 一條天皇の御眼に止る光榮に浴したのでありました。しかも、その折、

「式部は、『日本紀』の素養がきつとあるであらう。漢文學の知識は、ずるぶん深いに相違なす。」

といふ、おほめの御言葉さへ賜はつたのです。このことがあつてから、彼女は、仲間の女房達に、「日本紀の局」と、いはれるやうになりました。それは、彼女が、宮仕へ生活の間につけられた、ただ一つのあだ名であつたのです。

式部の直接お仕へ申しあげる中宮彰子もまた、彼女をたいへん頼りになさつて、常々御眼をかけて下さいました。

式部が、始めて宮仕へに上つたのは、三十歳の頃でしたが、その時、彰子は御二十歳ばかりでいらせられました。式部は、或時は侍女として、時には、後見人として、また、或時には先

生として、ひたすら中宮にお仕へ申しあげたのです。「文集」や「樂府」などといふ、有名な支那の書物のいくつかをも、彼女は、中宮にお教へ申しあげましたし、儀式立つた折の中宮の御歌を、代作してさしあげることなどもありました。

「こんなに親しくならうとは、思はなかつた。」

と、御側に人の少い折、彰子は、しみじみ式部に仰せられたことがありました。その際、彼女は、ただ光榮と感激とで胸がいつぱいになつて、何のお答も申しあげることができないほどであつたといふことです。

このやうに、畏くも 天皇を始め奉り中宮より、御厚遇と御信任とをいただいたほかに、彼女はまた、中宮の父君であり母君である道長夫妻からも、厚いもてなしを受けてをりました。

九月九日は菊の節供で、重陽の宴と申して、宮中でその宴が開かれます。そして、この日、菊の花に綿をかぶせて露を受け、それで顔などを撫でれば、病氣をせず、年もとらないといふいひ傳へがあつて、菊の綿は、殊に女の人々には大切がられたものでした。が、その菊の綿を分ける時にも、「これは式部に……。」と、倫子が、式部の分を別にして、わざわざ届けて下さることもあれば、時には、道長自身、庭の女郎花を、手折つて下さるやうなこともありま

た。

里へひき下つて、歸りが少しでも長びくことがありますと、

「どうかしたのか。早く戻るやうに。」

と、使を遣はして、たづねさせるといふやうに、ちよつとしたことにも、道長夫妻の式部に對する好意のほどが、よく窺はれるのでした。

上は、天皇・中宮の御信頼を蒙り、臣下として最高の地位を占める、中宮の御兩親である道長夫妻からは、大切にしていただき、また同僚の人々からは、尊敬もされ、もてはやされる。——これが、宮中で式部の立場なのですから、これほど恵まれた、結構な地位にある者が、他の女房の中にあつたでせうか。

それにもかかはらず、式部は、いつものやうに、あのつつましやかな控へ目な態度で、中宮様に仕へ、また、人々と交つてをりました。

それは、もとより内氣な生まれつきにもよりましたが、小さい時分から、女の人が出しやばるのは、よくないもの、學者ぶるのは見苦しいもの——と知つて、自分は、さうならないやうに、さうしないやうにと、一生懸命に努力し續けてきたのが、もう、長い間の習慣となり、今

では、しぜんと控へ目になれるのです。

ですから、たとへ、どのやうに人からほめられても、それで、有頂天うちやうてんになつて喜んだり、いい氣になつたりするなどといふことは、式部には、決して、ありませんでした。それよりも、むしろ、よいにつけ、悪いにつけ、自分の學識や才能について、とやかくいつてほしくない、なるべく人の眼につきたくないといふのが、彼女のほんたうの氣持であつたのです。

ですから、あのかはいい賢子と、僅かの召使とだけの、極めて簡素なこれまでの生活から、華やかな宮仕へへと、その環境くわんきやうこそ變つても、式部自身の控へ目な日常の振舞には、いささかも變つたところはありませんでした。

「中宮様が、漢詩について知りたく思ひ召してをられるので、できるだけこつそりと、人のゐない暇ひま々に、『樂府』といふ書物を、不十分ながら御講義申しあげてゐるが、自分がかうしてお教へ申してゐることを、おしやべりの人達が聞いたら、何といふだらう。」

かういふ日記の一節を見ましても、さうした式部の氣持が、よく窺はれると思ひます。さきにも述べましたやうに、中宮彰子が入内じゆだいされる時、おつきとして一緒に従つた侍女は、四十人でありましたが、なほそのほかに、もともと宮中に仕へてゐる女房達で、しかも、中宮

附と定められてゐる人が、何人かをりました。ですから、童女や、下仕しもへなどいふやうな人々は別として、ただ「中宮の女房」と呼ばれてゐる人々だけでも、ずるぶん多くの數に上つてゐるに違ひありません。

女房などといひますと、何だか年とつた人を想像なさるかも知れませんが、ここでいふ女房とは、十二單衣じふにひとへを重ね、裳もや唐衣からぎぬをつけて、背丈よりも長い髪を、おすべらかしにして後に垂れ、檜扇ひあふぎをかざした、ちやうどお雛ひな様のやうな服装をした、若い美しいお姫様達であります。

そして、これらの女房達は、中宮様が、御座所にいらつしやる時には、御前近くあちこちに群れ集つて、いろいろのお話をしたり、碁ごや雙六すうろくに興じたり、時には、歌を詠み、琴をひくなど、風流の遊びに心を慰め、何かの儀式や法會ほふゑなどのために、中宮様のお出ましの際は、揃つて、その御供をする——といつたやうな、さうした日常を送つてをりました。

さうかといつて、中宮附と定められた女房全部が、一度に御供をしたり、一度に御前に詰めてたりするわけではありません。その中の何人かは、里へひき下つてゐるでありませうし、また、昨夜中、ずっと御前に詰めてゐて、今朝ほど退いた人もあれば、つい今しがた上つて來た者もあるといふやうに、御前に詰めてゐる女房達は、その日、その折で、代り合ひながら、それで



あて、十人、二十人の人々は、常に御前に侍してゐたのです。

で、かうした女房達の間には、いづれも何かによつて、人よりぬきんでたいといふ氣持が、しぜんと強くなるわけですが、あの伊勢大輔や小式部内侍のやうに、いい折を捉へて自分の名を揚げるといふことは、誰にでも、さうたやすくできることはありません。そこで、彼女達が、日頃、他人に劣らない自分のねうちを、人に示す唯一のものは、實に、その服装であつたのです。

平安時代の女房達の服装ほど、歴代の女子の服装の中で、美しいものはないといはれてをりますが、實際、當時では、裳・上衣・唐うはぎ



衣など、その一つ一つについて、地質・地色・模様などを、念入りに選んだばかりでなく、全體として、色の配合とか、調和とかといふことについても、深い注意が拂はれたのでありました。さうした服装から、ひいては、その人の趣味を知り、人となりを見るといふやうなことも、その當時の人々は、非常に鋭敏だつたのです。ですから、彼女達は我劣らじと、衣裳や、更に扇などにまでも、心をくだくのでありました。

かうして、何かにつけて自分をあらはすことに、一生懸命になつてゐる人々の中に立ち交りながら、式部だけは、どこまでも自分をあらはすまいと力めたのですから、一般女房

達の氣風と、多少どこかびつたりしないものがあつたことは、事實であります。中には、
 「わざとらしい、きざな人だ。」
 といつて、嫌きらふ人もあつたやうですし、
 「上品ぶつて、いつもつんととりすまし、ほんたうにつき合ひにくさうな人だ。」
 といふ者もあり、

「物語ずきで、何かといふと、歌を詠む小憎らしい氣どりやだ。」
 などと、悪口をいふ者もありました。さういふところから考へてみますと、式部に對し、いい
 感じをもたなかつた人のゐたこともまた、十分に察せられませう。

實際、大勢の人と調子を合はせて、賑やかに談笑するなどといふことは、確かに、式部には
 できなかつたやうです。そして、彼女自身もまた、それを知つてをりまして、若い女房達が、
 朗かに笑つたりさわいだりしてゐるのを見るにつけて、「自分も、あんなになつてみたい。」と、
 しみじみ思ふのでした。

無邪むじやぎ氣になりたい、純眞でありたい、といふことは、式部のいつもいつも、心を離れぬ念願
 でありましたが、しかもさうなれなかつたところに、式部の歎きがあつたのです。

「習ひ、性となる。」といふ諺ことわざがありますが、小さい時分から、自分を抑おさへることに慣れて
 きた彼女が、いつか、つましやかな、内氣な、従つて、反省的な、どちらかといへば、暗い
 感じのする人になつてゐたのも、そのいい例でせう。

しかも、夫を失つてから後、ともすると、物思ひにふけりがちな彼女としては、多くの若い
 人達のあこがれの的まである、この宮仕への生活に入つても、なほ、

身のうさは心の中にしたひきて

いま九重におもひみだるる

と、なじみきれない氣持を、うたはねばならなかつたのも、また無理のないことでありました。
 美しい建物、立派な調度、そして、そこに明け暮れ住み馴れてゐる美しい人達、——それら
 のものの醸かし出す、この世のものとも思へない美の世界、それが九重でありました。

お美しく上品な中宮様が、大勢の女房達にかしづかれて、思ふことなげにいらつしやるの
 を拜する時には、さすがに、式部も、

「この世の惱みも心配も、皆すつかり忘れてしまつて、さながら、壽命が延びるやうな氣が
 する。」

と述べてあります。

かうして、宮仕への美しい生活は、時として、彼女のさびしさを忘れさせることもありましたが、その華やかさ、その美しさのうらに、何やら自分ひとりのうらさびしさをかくすことが、彼女にはやはりできませんでした。それといふのも、自分は、もう年をとり、悲しい過去をもつ身の上だ、他の人達とは違ふのだ、といふ強い自覚が、式部の胸に常にはつきりと存在してゐたことが、また、その一つの原因であつたと思はれます。

このやうに、自分自身をみつめてやまぬ心は、同時に周囲の人達をも、深く静かに眺める心でありました。そして彼女は、いふまでもなく、そこにさまざまな性格を見出したのです。

ここに集つてゐる人々のことです。もとよりより抜きの人達ばかりで、立派な人々には違ひありませんが、それでもなほ、どこかにそれぞれ缺點があつて、この人こそ申し分のない人だと仰ぎたくなるやうな人は、ただの一人も、見つけることはできませんでした。

それを思ふと、彼女は、もう十三四歳になつてゐる世間見ずのわが子賢子に對しての心づかひが、かれこれと、湧いてくるのを感じるのでした。

大抵の女房は、中宮の御側へ上つたとみえて、局つぼねに人の少い静かな或夜のこと、式部は、父爲時の家へあづけたまま、もう長い間逢つてゐない我が子の面影を思ひ浮かべながら、靜かに筆をとりました。

この時彼女の頭には、賢子と同年輩の女房達の姿や思ひ出が、さまざまにちらついて見えませんでした。

——母さんは、ここに来て、ほんたうにたくさんの人々と、おつき合ひしてゐます。みんな、よくできる立派な方達ばかりです。けれども、何一つ缺點のないといふやうな人は、まだ見あたりません。——

彼女の筆は、次第に、しんみりした調子になつていくのでした。

——母さんが思ふのに、人には、のんびりと鷹揚おんやうなところのあることが、一番大切なのではないでせうか。さういふ人であれば、身につけた才藝も、十分に見ばえがするといふものです。また、さうした人に、多少輕率けいそつなところがあつたとしても、もともとおほらかな氣質なのです。また、お友達にも、さして嫌はれず、圓滿にゆけようと思ひます。

それにしても、いやにまじめになり、何かにつけて、もつたいぶることのないやうに、お

前も十分注意して下さいね。

偉ぶる人に對しては、皆がその氣になりますから、ちよつとした動作やもののいひ方など、他の人ならば見過すところにも、自然と、眼をつけることになります。さうすると、誰でも缺點があるものですから、必ずそこに、足りない點や、悪い癖くせが見つけられ、『何だ、偉さうにいつておきながら。』と、かへつて、輕蔑けいべつされることにもなるのです。偉ぶる人でさへさうなので、まして、みんなと調和できない人や、どうかすると直ぐに、人の批評をしたらがる人が、皆の注目の的となるのは當然です。

とにかく、缺點のない人などはゐない世の中ですから、お互に、ちよつとした悪口でもないやうに、どんな人とでも、圓く仲よくつき合つていけるだけの、心のゆとりがほしいものだと思ひます。――

彼女の深い省察せいさつの眼にうつつたさまさまの人の姿は、今しも、母としての眞情にあやなされて、偉大な處世訓しよせいくんの趣おもむきさへ帯びながら、なほも書き續けられていくのでした。

十、創作に生きる

中宮の御前から、自分の局つぼに退いた夜、或は、御前に出ない晝間など、暇を見つけては、式部は、机に向かつて、『源氏物語』の筆をすすめていきました。

宮仕へに出てゐなかつた頃に比べて、今は、時間の餘裕が、ずつと少くなつてゐましたけれど、一方、宮中にくりひろげられるさまざまな場面、華麗な几帳きちやうにつつまれた種々の出來事などを、親しく見聞きすることができたといふことは、どれほど、この物語を書くうへに役立つたかわかりませんでした。

夫宣孝の忘れ形見がたみであり、彼女にとつては、かけがへのない子供である賢子は、もうすつかり成人して、祖父の爲時の家に暮してをります。娘式部の教育に心血をそそいだ爲時のことですから、この孫娘の養育にも、心をくだいてくれるに違ひはありません。ですから、式部は、ほんたうに安心して、賢子を父に托し、中宮にお仕へすることができましたし、物語の筆をとることでもできたのでした。

今日のやうに、芝居や映畫といったものが、何もない當時では、世の中の有様を學ぶことが

できる唯一のものは、物語でありました。物語は、ほんたうに、人間の心のもちやう、生活の仕方を、善いにつけ悪いにつけ、楽しみながら人に教へ、また、反省させてくれるものです。この當時の人々が、みんな物語ずきで、式部の物語をも、たいへん好んで読んでゐるのも、さうしたわけがあつたのでした。

ですから、中宮様を始め奉り、朝廷にお仕へしてゐる貴族達や侍女達が、式部の物語の愛好者であつたばかりでなく、恐れ多くも、時の帝におかせられてさへ、御興深く御覽あそばされましたことは、さきにも述べた通りです。中でも、中宮様の父君道長は、最も有力な愛讀者の一人で、また、批評家でもありました。あらゆる學問や才藝について、よく一家をなしてゐた彼は、いろいろと、物語の筋や仕組について、言葉を添へ、参考になる話なども、してくれたものでした。それが式部にとつて、どれほど勵みになつたかわかりません。かうして、靜かな夜の夜更など、時のたつのも忘れて、式部は、ひたすら筆を運ばせるのでした。

それでは、一體『源氏物語』には、どういふことが書いてあるのでせうか。今、そのあらましを述べてみませう。――

その頃、都に、源氏の君と呼ばれる、非常に身分の高い、しかも、顔かたちといひ、才能といひ、申し分のない立派な方がいらつしやいました。

もとを正せば、帝の皇子であらせられたのですが、わけがあつて、臣下にお降りになり、源氏の姓を賜はつたのです。で、この源氏の君の容貌の美しいことといつたら、たとへ、鬼や閻魔の



やうな恐しいものでも、一度この君の顔を見れば、ほほゑまずにはをられないだらうと、いはれるほどでありました。父帝には、他にも皇子様がいらせられましたけれど、どの御方も、この君の美しさには及びませんでした。

世の人々は、その輝くばかりの美しさに、いつの間にか、この君を、「光るの君」とか、「光る源氏」とかと、お呼び申しあげるやうになりました。

源氏の君は、七つになられた年から、學問を始められました。もとより、當時の男子が修めるものとされてゐた、あの支那風の學問ですが、その御理解の早いこと、御記憶のよいことは、おつき申してゐる先生の方が、驚いてしまふほどでした。學問と同時に、琴や笛のやうな音楽、歌を詠み、字を書くことなどの御嗜みおんたしなも深くいらせられ、何一つとしてお上手でないものはありませんでした。

このやうに、源氏の君は、容貌が美しく、學問才藝に秀でてをられたのみならず、その御性質もまた、たいへん立派でした。源氏の君の御性質の中で、とりわけ目立つてゐるところは、非常にやさしく、思ひやりのお深いことでありました。實際、いかに多くの人が、この君のお世話になり、その御恩を蒙つて生活してゐたことでせうか。

優にやさしく、世にもうるはしいこの源氏の君こそ、紫式部ふきぶ不朽の名作『源氏物語』の主人公でありました。

そして、女主人公、紫の君は、この源氏の君と、母方のいとこにあたります。つまり、源氏の君と紫の君との母君は、共に、按捺大納言あなごと申す方の姫君であつて、姉と妹との間柄でありました。

紫の君の父君は、兵部卿ひやうぶ宮みやと申す御身分の高い方であつたのですが、これも理由があつて、紫の君とは、別の家にお住まいになつてをられ、按捺大納言の姫君であつた母君は、早くなくなられたので、紫の君は、お祖母様の尼君あまぎみに、お小さい時分から育てられた、お氣の毒なお身の上でありました。けれども、紫の君は、さうした不幸な境遇の中に、大きくなつてこられたにもかかはらず、ほんたうに無邪氣むじやぎなかはいらしいお姫様でした。

或年のこと、御病氣御保養のために、北山へお参りされた源氏の君は、ふとしたことから、その尼君のお住まひをおたづねになりました。そこで始めて紫の君のお話をお聞きになり、その不幸な身の上に、たいへん同情されて、御自分の立派なお邸に、お引きとりあそばすことになさいました。その時、紫の君は、十歳ばかりのいとけなさでした。

それから後、源氏の君は、お暇を見ては紫の君に、音楽や字や歌などを習はせ、また、女としての心づかひや身嗜みまでも教へましたので、もとより優れた天性をもたれた彼女は、めきめきと上達され、殊に、字などは、當代女流の中でも、指折りの上手でした。このやうにして彼女は、才藝に優れてゐられたばかりでなく、その人となりに於ても、また、まことにしとやかで、どこかに、きりつとしたところのある立派な婦人となられたのです。

攝政として、幼帝の御輔佐を申しあげてきた源氏の君は、やがて、その勞をねぎらはせられる思召で、朝廷から、お手厚い待遇を賜はるることになりました。

かうして、四町四方にわたる立派な御殿に住まはれて、源氏の君は、紫の君と御一緒に、幸福なその御一生を終へられたといふのが、大體、『源氏物語』五十四帖の中で、正篇ともいふべき、前四十四帖のあらまします。そして、残りの十帖は、主人公の源氏の君も、紫の君も、共になくなつた後の物語になつてをります。

源氏の君のお子様は、三人ありました。一番上と一番下とが男のお子で、真中が女のお子でした。

皆それぞれ、美しく立派な方ばかりでありましたが、とりわけ、末の弟君は、その周圍に、

何ともいひやうのないよい香が、常に立ちこめてゐるかときさへ思はれるほどの、まことに氣高い美しさでした。それで、薫かをると名づけられてゐたのです。

源氏の君の、ただ一人の女のお子は、やがて入内されて、御后様おきさきとなられ、多くの皇子の母君とおなりになりましたが、その中でも、二番目の皇子は、外祖父の源氏の君そつくりの美しさで、匂宮におのみやと申しあげました。

匂宮と薫と、このお二人の若く美しい貴公子達の、宇治の別荘での生活を述べたのが、残る十帖なのです。

大體、以上のやうな筋に従つて、式部は、主人公の源氏の君がお生まれになつてから、その御一生を経て、更に御子孫の代に至るまで、凡そ七十年間にも及ぶ長い間の出來事を、時代を追つて、こまごまと書き綴つたのであります。

物語が展開していくにつれて、主人公の他に多くの人物が、あらはれてまゐりますが、彼女の筆に躍らせられた男・女・子供・老人などが、全部を通じて三百人近くにもものぼり、その中で、主な役をもつてゐる者だけでも、三十人にも及びました。また、それらの人々の活躍する舞臺は、京都が主であります。初瀬はつせや石山・宇治・大井など、京都の近郊はもちろん、須磨・明

石、更に遠く九州の筑紫などにも、廣がつてゐました。そしてそこに描かれた人物は、式部のやうな女房にようばうはもちろん、貴族の男女が主でありましたから、さうした人々がお仕へしてゐる宮中のお話が巧みにとり入れられ、大臣とか大納言とか大將とかといつた人々、或はその奥方やお姫様が、多く描かれました。

それだからといつて、この物語の題材を、うんじやうびと雲上人のみの間に限つたわけではありません。國司の生活や、地方に大きな勢力をもつてゐる土着の豪族や、或は、しがなひその日暮しの人人の有様まで、彼女の才筆さいひつに彩られないものはありませんでした。

これによつて見ても、この物語が、いかに大規模であり、また、複雑なこみ入つたものであるかがわかります。このやうに、當時の世の有様を、あますところなく寫されたこの物語が、多くの人にもてはやされたのも、さこそうなづかれるではありませんか。

これだけの大部のものを完成するのに、長い年月を要したことは當然ですが、式部が作者として、たいへん都合のいい立場にゐたことも、見のがすことはできません。

第一に、彼女が、藤原氏の中でも北家ほくけの末流として、いはば、中流にすぎない家柄に生まれ、たこと、それは彼女の體驗を豊かにするのに、たいへん役立ちました。といふのは、あまりに

よい家柄に生まれ、いはゆる、深窓に育つたお姫様ですと、一般社會の有様などは、殆ど御存じないでせう。それにひきかへ、身分の低い家に生まれた者は、自分達の生活に慣れて、上流の人達の生活がどのやうなものであるか、想像もつかないことが多いのです。

それに反して、中流の家に生まれた式部は、彼女自身の綿密な注意深い性質と相待つて、自分達の生活はいふまでもなく、上流・下流いづれの生活をも、つぶさに見極めることができたのです。式部がこの物語の中で、あらゆる階級の生活を取り扱ふことができたのは、一つは、かうしたところにそのもつがあるのです。

それから、第二に、父の爲時が、越前守となつて、越前に下つた際、彼女も伴なはれて行つたことです。あの時、彼女は美しい都を後にすることがたいへんいやで、任期の満たない父を残したまま、とうとう一人で都に歸つてしまつたほどでしたが、はるばると越前に下つて、そこで二年ばかり生活してきたといふことは、どれほど彼女の見聞を廣め、その體驗を豊かにしたかわかりませんでした。

生まれてから死ぬまで、都の外へは一步も出ない人々、——せいぜい出たとしても、石山や初瀬にお参りすることぐらゐるが、關の山であつた當時の人々に比べると、遠く越前まで行つた

彼女が、何かにつけて、都と異なつた地方の風物に對する觀察を深めたことは、疑ひありません。物語の舞臺が、都から須磨・明石に、更に遠く九州までものび廣がり、都の人々には、全く縁遠いと思はれる地方の風物が、生き生きと描き出されてゐることは、彼女の才筆もさることながら、かうした體驗のお蔭でもありました。

そればかりでなく、彼女自身は、藤原爲時の娘として生き、次いで宣孝の妻として、やがて、賢子の母として、次々に違つた立場に生活してきたうへに、今また新しく、寡婦としてその悲しみを嘗め、更に女房として宮仕への生活をも體驗したのです。いはば、女としての生き方のすべての場合を、味はひつくした人と申せませう。かうして、彼女が、娘としての氣持も、妻として、また、母としての氣持も、みんなよくわかつてゐたといふことは、物語を書くうへに、ほんたうに都合のよいことでした。

そのうちで、一番豊かな體驗を與へたのは、何といつても宮仕への生活でありました。

當時の宮中は、女子だけについて見ましても、さきにも述べた通り、御后様を中心に、最も優れた人々が、侍女として集つてゐたところす。まして、政治に與つてゐる公卿達が、當時の日本の男子の中で、學問・技藝に長じた、立派な人々であつたことは、今更申すまでも

ありません。従つて、宮中は、政治の府であるばかりでなく、また、國の學問・藝術など、あらゆる文化の花の開くところでもあつたのです。

式部が、かうしたいみじくも匂ふ百花の間に立ち交つてゐたといふことは、一層その才藝を磨くことになつたばかりでなく、さまざま人間の性格をも、知ることができたのでした。さればこそ、この物語の中に、三百人ほどの人物をとり扱ひ、その中でも主な者ばかりで、三十人にも及びながら、その人その人なりに、違つた性質の人として書き分けられ、讀んでゐるうちに、「ほんたうに、こんな人があるな。」と、今日でも、思ひあたらずにをられないほど、生き生きと描き出されてゐることは、確かに、かうした宮仕へ生活の賜物であつたといふことができませう。

物語作者としての彼女にとつて、更に都合のよかつたことは、彼女が、『伊勢物語』『宇津保物語』『落窪物語』などといふやうな古い物語を、多くこれまでに讀んでゐたことです。今、自分が物語を書くやうになつた時、このことはたいへんよい参考になりました。その他、『古今集』や『後撰集』などを始め、代々の勅撰和歌集や個人の家集、それに支那の歴史や詩の書物、また、佛教の經文など、かうしたさまざまの書物から得た深く廣い知識は、知らず知らず

の間に、その物語の筋・仕組・表現などにあらはれたのでありますが、それとても、これを物語のここにあてはめてやらうなどと、考へてしたのではありません。それは、もうすっかり彼女のものとなつて、彼女の頭の中に藏しまはれてあつたのが、ひとりでに出てきたものです。つまり、彼女の豊かな閱歴えつれきや、深い學識や、注意深い態度や、さうしたすべてのものが、一つになつて凝りかたまり、ここに、『源氏物語』といふ日本の文學の中での一番優れた古典の一つが、作りあげられたのであります。

考へてみますのに、人間には、誰でも、自分を發表したいといふ氣持があるものです。式部のやうな天才には、さうした氣持が一層強かつたとさへ思はれます。それが、他方では、内氣なつつましやかな性質のために、常に押しこめられ押しこめられるのですから、式部の場合では、自己を發表しようといふ氣持が、いつも満たされなかつたといへませう。彼女が、どこかさびしさうな、そして、近づき難い感じを人に與へたといふことも、その満たされない氣持が、胸の中で、自ら高しとする心を、生み出してゐたからだともいひ得ると思ひます。

かうした式部にとつて、物語は、自分といふものを發表するのに、最もいい手段でありました。

實際、物語は、その筋・仕組・表現などに於て、知らず知らずのうちに、作者の人となりや見識などのすべてをあらはすものであります。ですから、平生から、その作者の抱いてゐる意見なり、思想なりは、作中の人物を通して、發表することができなのです。

この物語の中にも、式部自身の、平生抱いてゐた意見と見られるものに、婦人に對する評論を始め、音樂について、繪についてなど、その他、數多く擧げることができます。そして、それらは、いづれも作中の人物の口を藉かりて、堂々と述べられてゐるのです。ですから、この物語には、「教養ある一個の才女」としての式部の姿が、ありありと窺うかがはれるのであります。

たとへば、

「女といふものは、自分を慎重しんちゆうにかまへることが大切であります。ですから、小さい時分からあまりに氣軽く、放任主義で育てるのは、どうかと思ひます。でも、さうかといつて、まるで不動様が陀羅尼だらにを讀み、印を結んでゐるやうに、固苦しくぎごちないのもまた、感心できません。まあ、とにかく、できるだけすべてのことに通じさせておいて、しかも、あまり固苦しくならないやうに、ゆるやかに育てるのが、一番いいことでせう。」

などといふところがありますが、これは、賢子の教育に力をつくす、母としての式部の姿のあ

らはれと見られませう。
かうしたことを、いろいろ考へ合はせますと、この物語こそ、實に、紫式部その人が、自己の全體を生かし得た、唯一のものであつたといふことができると思はれます。
すばらしい頭腦と、深く廣い學識とをもちながら、しかも、他面に於ては、どこまでも内氣なつつましやかな女性であつた式部は、この『源氏物語』に於て、始めて自己のすべてを發揮し、自己を完全に生かしきつたのです。そして、そのことは、とりもなほさず、彼女がこの物語に於て、不朽に生き得られるゆゑんでもありました。

尼君は、その頃、ちやうど四十歳ばかりでした。もう長い間の病氣が、一向はかばかしくなく、さりとして、寢てゐなければならぬといふほどではありませんでしたけれど、とかく氣分のすぐれない日が、幾日も續くのでした。そのために、大分瘦せられはしましたが、もともと上品な顔立ちは、一層の氣高さが増したやうにも見えました。

尼君は、もう自分の命が、さう長くないことを、よく知つてゐました。夫に死に別れてからこの方、尼となつて、ひたすら佛様にお仕へしてゐる方でありますから、自分の命は、さして惜しいとは思ひませんでしたけれど、ただ、この紫の君のことが氣になつて、仕方がないのでした。紫の君のお母さんにあたる人は、紫の君が生まれると、間もなくなくなりましたから、少納言せうなごんといふ乳母が、ずっとお母さん代りとなつて、いろいろの面倒を見てくれてきました。この人は、親切でもあり、また、よく氣のついた人でありますし、紫の君もまた、たいへんなついでをりますから、よしや自分に萬一のことがあつたとしても、この乳母が、きつと立派に成人させてくれると思ひはしますものの、やはり何かと心配で、尼君は、心のやすまる暇もありませんでした。

そのうへ、この紫の君は、十になつても、まだほんの赤ちやんで、髪を結つてもらふ間もじつ

としてゐないで、ただもう、遊びに餘念のない有様ですから、お祖母さんの尼君にしてみれば、このあまりの子供らしさが、かはいくもあると同時に頼りなくもあり、心配でもあるのでした。しかも、この山寺に来てからは、お庭は、自然の山腹をそのままとり入れてあるのですから、遊ぶのにおもしろいばかりでなく、都には珍しい草花なども多いので、紫の君は、すつかり喜んでしまひました。そして、ふだんから遊び相手として、自分につけられてある同じ年頃の女の子達と、夜が明けるが早いからお庭に出て、遊びほほけてをり*



* 或朝のことでした。どの木に巢があつたのでせうか。生まれて間もない雀の子が一羽、お庭に落ちてゐたのです。子供達の喜びは、たいへんなものを見廻すばかりで、餌につかうともしません。子供達は、心からそれを心配して、日がない日、籠の傍につききつてをりました。

のでした。早速籠かごに入れた雀の子は、まだよくも飛べない小ささでした。そして、おどおどしながら、あたり*



雀の子は、それから後、新しく、子供達の遊び仲間に加へられました。それが、この頃になつて、やうやく馴れ始めてきたのです。子供達の喜びは、それだけまた非常なもので、

「餌を食べたのよ。」
「水を飲んだのよ。」

と、一々知らせに行つたほどでした。それを、今、犬きが逃したといふのですから、泣いてく

やしがつたのも無理はありません。

かうした無邪氣さの反面に、また彼女は、

「わたしがこんなに病氣で、いつとも知れない身になつてゐるのに、あなたは雀の子に夢中なんですか……。」

と、お祖母様からたしなめられると、泣くほどくやしがつた雀の子のことを、もうそれ以上のひ張らないで、お祖母様のいふことを、しんみりとして聞き分ける、さうした素直さ、そして、利發さをもつてゐたのです。

幼い頃の紫の君は、かうした子供でありました。

源氏の君が、始めてこの尼君の住まひを訪れたのは、ちやうど、この頃のことでした。

「おこり」といふ病氣にかかれて、なかなか快くならずお困りになつてゐた源氏の君は、北山の頂上に近いお寺に、非常に徳の高い、御祈禱ごきたうに優れた上人のをられることを聞かれて、はるばるとここに詣で、しばらくの間、おこもりすることになつたのです。

今、尼君のゐる僧庵は、山の大分麓に近いところにあり、それから頂上へは、なほもくねくねと、幾重にも折れ曲つた道が、續いてをりました。そして、源氏の君の滞在してをられると

ころは、その頂上に近いお寺でありましたから、そこからは、五十に近いこの山の寺々が、一目に見渡されるのでした。

或日、御祈禱のあひ間に寺をお立ち出でなされて、麓の方を、見るともなしに眺めてをられた源氏の君は、多くの寺々の中にまじつて、柴垣の結びやう、庭の木立の作りやうも、何となく奥ゆかしい感じのする僧庵のあることに氣づかれました。そして、それが、都にも名高い僧都の庵であることを知ると、源氏の君は、その庵をたづねられたのでした。

そして、そこで、折から保養に來てをられた尼君、——僧都の妹であり、自分には叔母様にあたる、あの尼君に出會はれ、小さないとこ紫の君の身の上をも、お聞きになることができたのでした。例の雀の子のお話も、かうして、この時、源氏の君のお耳に入つたのです、源氏の君は、紫の君のお氣の毒な身の上に御同情なさると共に、その素直さ、純眞さを、このうへなく愛されました。

「もう御安心下さい。及ばずながら、親代りとも、後見ともなつて、お世話をいたしませう。御存じでもありませんが、私もまた、物心のつくかつかないうちに、母に死に別れました。それから、この方、ほんたうに頼りない氣持で、大きくなつてきたものです。あなた方のこと

も、かねてお話は承つて、どんなにさびしくしてをられることかと、案じてゐましたが、今まで、お眼にかかる機会もなく、お慰めできなかつたことを、まことに残念に思ひます。」

と、源氏の君は、力強く申されて、尼君をお慰めになつたのでした。それから間もなく、病氣の本復された源氏の君は、都から、わざわざお迎へに來た多くの人を御供として、都へお歸りなさることになりました。

世の中のことは、すっかり捨ててしまつたはずの御山の法師達でさへ、

「何といふお美しい方だらうか。あの方を見てゐると、ほんに私は、壽命が延びるやうな氣がします。」

「光るの君と申しあげるからには、さぞかしお美しい方とは思つたが、あれほどまでとは思ひませんでした。」

「せめて、もう一日でも、ごゆるりとなされればよろしいものを……。」

などと話し合つて、見えたり隠れたりしながら、曲りくねつた山道を、次第に麓へ下つて行かれる源氏の君の行列を、いつまでも、見送り續けるのでした。

秋になりました。

北山の僧庵から、都の家に歸つてをられた尼君は、病氣が次第に悪くなつたので、再び北山の僧庵へ移られました。そして、それから一週間もたたないうちに、とうとうなくなられてしまつたのです。

今はのきはに、乳母を始め侍女達に、紫の君のことをくれぐれも頼んで、靜かに、息を引きとつてゆかれたのでした。

一月の間、忌に服された後、紫の君は、ひとりぼつちになつて、再び都へ歸つてまゐりました。

生まれてから今まで、片時も傍を離れたことのなかつたお祖母様、この世の中で、何よりも大切なただ一人のお祖母様、そのお祖母様が、おなくなりになつてしまつたのだと思ふと、それだけで、もう胸がいつぱいになつて、食事もすすまず、まして、今までのやうに遊ぶ氣にもなれないのでした。

それでもまだ、晝は何かと氣の紛れることもありませんでしたが、夕方、西の空が赤く焼け、お寺の鐘々が響く頃になりますと、どうにもこらへきれなくなつてしまふのでした。乳母がお慰め

しても、遊び相手の子供達が何といつても、紫の君は、泣きやむことができませんでした。「ごもつともだ。ごもつともだ。」

と、年老いた召使は、その様子を眼にしますと、自分もたまらなくなつて泣きました。紫の君は、眼に見えて、瘦せてまゐりました。

尼君がなくなられたこと、紫の君が、ただ一人残されて、すっかりしをれてゐることが、源氏の君のお耳に入つたのは、それから間もないことでした。源氏の君は、かねて尼君とお約束した通り、いよいよ紫の君を引きとることにいたしました。

平常は使はないで、お客様の時の用意に残してあつた一棟のお部屋を、源氏の君は、紫の君とその召使の部屋にきめました。そして、御几帳みきちょうや屏風びやうぶなどのいろいろな調度は、いかにも子供の喜びさうな、かはいらしい、いろどりの美しいものを用意しました。遊び相手の子供達も、小さいかはいらしい子供を、えりすぐつて四人揃へました。きれいなお人形や、いろいろのお道具などを御厨子みづしにいつぱい、美しい繪も、たくさん箱にをさめて、お部屋に飾りますと、ほんたうに立派な子供部屋の感じが出ました。

もともと利發な、素直な紫の君の性質は、さうした際にも、十分にあらはれました。何を教へても、彼女はわかりが早く、覚えがよかつたのです。殊に著しいことは、琴でも琵琶びばでも、また習字でも、彼女には癖くせといふものがありませんでした。それは、教へられたままに、何でもその通り受けとつていく、彼女の素直な性質のあらはれにほかならなかつたのです。それから十年もたつた頃、すっかり成人した紫の君は、あえかにも匂にほひこぼれる立派な上臈じやうらふとなつてゐました。

そして、小さい時分に見られたあの純眞さ、無邪氣さは、源氏の君の妻として、交際の多い地位に立ちながら、しかも、誰ともまるく仲よくつき合つていかうとする、廣いなごやかな愛の心として、なほも、彼女の胸に生きてゐたのでありました。

以上が、大體『源氏物語』に描かれた、紫の君の姿です。

「幼い頃の紫の君は、かうあらせたいと思ふ、理想の賢子でありました。成人して後の紫の君は、かうありたいと思ふ式部自身の理想の姿であり、同時に、未來に於ける賢子のそれでありました。そして、一面に於てはまた、己がお仕へ申してゐる、中宮彰子の理想の御姿でもあつ

たのです。

十五にも満たないお若さで、彰子は御后おきさきの位におつきになりました。しかし、もともと聰明そうめいでいらせられたうへに、おつきの人々も、よく御指導申しあげたので、二十歳にもおなりになった今日では、ほんたうに御立派な御后様として、皆の尊敬を、御一身にお集めになつていらつしやいました。

その昔、聖武天皇の皇后様を、光明皇后と申しあげましたが、宮中の人々は、今、この中宮様の御ことを、そのお住まひになつてゐる御殿の名をとつて、自分達の間では、「輝く藤壺つば」と、お呼び申しあげたのであります。

式部は、さうした御立派な中宮様にお仕へするやうになつたことを、心から喜ばずにはおられません。道長の姫君としてのお生まれといひ、現在の御地位といひ、御上品で、奥ゆかしい御人となりといひ、式部は、中宮様の御前に出る度毎に、「理想の女性とは、御后様のやうな方を申すのではないか。」と、しみじみ思ふのが常でした。そこで彼女は、物語の中に理想の女性として、紫の君を描く時、多分に、この御めでたい中宮様の御有様をおうつし申したところもあつたのです。

「中宮様が、この物語をお読み下さることによつて、紫の君の人となりにおふれになり、何かの御参考ともして下さつたら……。」
さうした氣持が、後見としての、また、先生としての式部の胸には、いつも燃えてをりました。光と仰ぎまゐらせる中宮様が、御立派なうへにも、更に御立派におなりになるやうにと、願ふ心でいつぱいだつたのです。

かうして身分の相違を越えて、中宮彰子にも、式部自身にも、また、式部の娘賢子にも、理想とされることこそ、紫の君が、女性全體の理想の姿であるゆゑんだと申せませう。そして、その理想の中心は、わけても、この紫の君の人となりにありました。

おほらかで、うひうひしいところをもちながら、しかも、どこかに、ぴりつとした氣のきいたところのある人、——女は、さうなければならぬ、といふのが、もともと式部の理想でした。ですから、おほらかであると同時に、才智のひらめきの見える人、感情と理性とのほどよく調和した人、さういふ人こそ、式部の理想の婦人であつたのです。

「かどかどしう。らうらうしう。」

式部は、『源氏物語』の中に於て、さういふ言葉で、かうした自分の理想を表現してゐます。

そして、紫の君こそは、實に、その理想を具現した女性でありました。

紫の君の幼い姿が、最も生き生きと描き出されてゐるのは、若紫の巻であります。そして、昔から、『源氏物語』全體の中で、最も優れてゐるといはれたのも、また、この若紫の巻なのです。そして、式部が、「紫式部」といはれるやうになつたのも、ここにそのもつとがありました。

といひますのは、當時の女房達は、その保護者や後見者である父兄達の官名、或は、姓名などによつて、名づけられるのが普通であつたのです。あの、伊勢大輔の名が、伊勢の祭主で神祇官の大副であつた、父輔親の官名に基づいてゐることは、前にも述べましたが、また、赤染衛門といふ名にしても、右衛門尉赤染時用の子であるところから起つたものであります。

かうして、式部もまた、式部丞である兄惟規をもち、しかも、藤原氏の出でありますから、「藤式部」と、當然呼ばれるべきであり、また、實際にさう呼ばれてもをりました。しかし、『源氏物語』が有名になり、紫の君の評判が高くなるにつれて、いつの間にか、「紫」の名が、作者である式部に、冠せられるやうになつてしまつたのです。かうして彼女は、「紫式部」と世間一般に呼び慣らされ、また、その名で、後世に傳はつてきたのであります。

十二、雁のゆくへ

式部が、宮中に出仕してから五年目の寛弘八年(紀元一六七一年)の春、父の爲時は、思ひがけなく越後守に任命されました。

ちやうど、この前に越前守であつた時から數へると、十年あまりもたつてゐます。彼は、その間を、ただ靜かに詩を作つたり、歌を詠んだり、讀書をしたりして、落ちついた生活を送つてゐたのでした。宮中の御宴にも度々召し出されて、詩を獻ずるといふ光榮に浴したこともありました。宮中でお使ひあそばされる御屏風に貼るため、有名な歌人の作品をお選びになつた時も、爲時の歌は、一首採つていただいたのでした。この當時、學者として、また、文人として、非常に有名であらせられた具平親王のお招きを受け、御共に詩作の榮を賜はり、その他、道長の邸に招かれて、共に詩を作りかはしたことも、數へきれぬほどありました。

かうして、爲時は、靜かな風流な生活に、心を澄ましてゐたのです。

その間に起つた最も大きな事件としては、いふまでもなく、娘の式部が、その夫宣孝と死別したことであります。ほんたうに、これは、爲時の心を、どれほど痛めたかわかりませんで

した。けれども、やがて、式部も『源氏物語』を書くことによつて、氣も紛れ、元氣も出てきたやうなので、爲時も、ほんたうに安心することができました。そして、彼女が宮仕へに出るからは、一人の孫、賢子を預つて、その後見をしながら、なほも、ゆつたりとした生活を送つていたのであります。

若い時代には、高い地位にも上り、名も揚げたいと思つたこともありましたけれど、元來が學者肌な爲時のことですから、今は、靜かに讀書したり、詩や歌を作つたりして、貧しくとも、安らかな生活をするこのの方に、より大きな楽しみを見出すやうになつてきました。そして、年をとるにつれて、その傾向は、次第に強くなつていきました。

それだからでせうか、今、越後守に任ぜられましたけれど、十數年前の時のやうな元氣が、どうしても出てこないのです。

「なぜ、かうなのだらうか。」——彼は自分自身を、何度も何度も反省してみました。そして、「やはり、年のせゐだ。さうに違ひない。」と、思はないわけにはいかなかつたのです。

實際、爲時は、もう六十の坂を越してゐました。鬢にも髭にも、目立つて白いものがふえてゐる自分を思ふと、「今度越の國へ下つたならば、都は、見をさめになるのではないか。」とい

ふやうな不安な氣持さへ、こみ上げてくるのでした。そのうへ、後に残して行く賢子のこと、式部のこと、そして、近頃、とかく體の調子のすぐれない長男惟規のぶのりのことが、ひとしほ氣になつてくるのでした。

でも、かうしていろいろと思案もし、迷ひもしたあげく、爲時は、ともすれば起る氣弱い心を、「ばかな、自分としたことが。」と、自らをたしなめて、「これが最後の御奉公だ。よし、力の限り働いて來よう。」と、決心して、越後へ赴任ふにんすることを、お引き受けしたのです。そして、その年の初夏、老軀らうくを勵まして、彼は、再び越の國へ下つて行きました。

越の國は、このころ、三つに區分されてをりました。都に最も近いところが、「越の前の國」即ち越前國であり、その隣が越中でありました。越後は、越の國の中でも、都から最も遠いところになりました。ですから、その國府のある直江津なほえつに着くものにも、十日あまりもかかるのでした。越前の國府がある武生たけふへ、七日かかつたのに比べると、その遠さが、大體想像されませう。爲時の安着の知らせが、都の式部達の手許に届いて間もない頃、時の帝、一條天皇がおかくれあそばされて、世の中は、諒闇りやうあんの哀しみに包まれてしまひました。

一條天皇が、御徳極めて高くあらせられたことは、申すまでもありませんが、とりわけ、學

問・文學は申すにおよばず、音樂の道を殊のほかお好みあそばされ、御親おんみづからも、たいへんお上手でいらせられました。殊に漢詩と笛の御名手で、天皇の御製の詩の句は、普あまねく天下に讃たたへ誦せられ、その笛の御技は、御十一歳の御時に、圓融えんじゆう天皇の御前でお吹きあそばされて、おほめの御言葉をいただかれたほどでありました。ですから、當時、宮中にお仕へする公卿くぎやう達は、誰も彼も、天皇を御手本として、さうした道々の稽古に、ひたすら勵んだものでした。従つて、當時の宮中には、何か一藝に秀でた人々が、他の御代にもまさつて、非常に多かつたとさへいはれるくらゐであります。

遠く越の國にあつて、この御徳高き 天皇の崩御ほうぎよを洩れ承つた爲時の心は、どんなであつたでせうか。天皇の御生前、直接お仕へ申し上げて、お手厚い御待遇を賜はつてきただけに、天皇をお慕ひ申しあげ、お悼いたみ申しあげる氣持が、ひとしほ強かつたことは、十分に想像されるところと思ひます。

「せめて御大葬になりと、參列させていただきたいものを、――」

爲時は、今度、この地へ下つて來る時に、なぜか氣のすすまなかつたわけが、今、わかつたやうな氣がしました。そして、都を離れて來たことを、今更のやうに後悔したのでした。

一方、都では、すべての人々の哀しみのうちに、御葬送の御儀がおごそかに行はれました。そして、御忌おんいみも明け、御法事もすみますと、中宮彰子は、宮中をお出ましになつて、枇杷殿びはどのと申す御殿にお移りあそばされました。式部は、引き續いて、この御殿で、中宮にお仕へ申すことになつたのです。

これまで、中宮として宮中にいらせられた時とは違ひ、今はもう、いはば御隱居ごいんきよの御身分におなりあそばされたのですから、枇杷殿での御生活は、從來とうつて變つた、靜かなものでありました。

天皇に後れ給うた御歎きの深い中宮にとつては、さうした靜かな明け暮れにつけても、これまでの華やかな宮中での御生活を、何かとお思ひ出しになることが多いのでした。年若い女房達もまた、慣れないこの御殿でのもの靜かな生活が、たまらなくさびしいものに思はれました。沈みがちな日々が、かうして、中宮様を中心として、その女房達の間、繰り返されていつたのです。

さうした中であつて、式部は、何かと中宮様をお慰めしながら、時には、清水寺しみずでらに參籠して、崩御あそばされた 天皇の御ために、御燈明みあかしを捧げるなど、極めてつつましかな生活を續け

てゆくのでありました。

在りし世は夢とみなして涙さへ

止まらぬ宿ぞ悲しかりける

雲の上を雲の外にて思ひやる

月はかはらず天の下にて

かうした歌が、この當時の式部の氣持をうたつたものとして、今もなほ、その家集に残されてをります。

やがて、三條天皇が御位におつきあそばされ、次いで年號も、新しく長和と變りました。

宮中は申すまでもなく、世間一般に、新しい天皇の御代を、幸多かれとお祝ひ申しあげる朗かな明かるい氣分が、充ち満ちてをりました。

けれども、その年の秋に、前から、體の思はしくなかつた式部の兄惟規は、遂に仕へをやめて、はるばる越後の父のもとに、下つて行くことになつたのです。

どういふものか、一體に彼ら兄妹は、小さい時分から仲がよかつたし、また、非常に父と親しかつたのでした。しかも惟規は、女である式部の場合と違ひ、父のあとつぎとして、幼少か

ら、父の側を離れたことがありませんでした。この前、爲時が越前守であつた時も、惟規は、その任期がすむまで留つて、父と一緒に歸つて來たほどでした。何歳になつても、彼の父を思ふ氣持は、かうして、少しも變りませんでした。それにこの頃は、體が悪くて、幾分氣も弱くなつてゐるからでせうか、しきりに、父が戀しくて仕方がなかつたのです。

式部は、この兄の體が、果して長い旅行に堪へ得るかどうかと、案ぜずにはをられませんでしたが。

「大丈夫、父上と一緒に元氣で歸らう。」

別れる時、さういつて、笑つて見せた兄に對し、式部は、どうしても、笑顔を返すことができませんでした。

何だか、泣けて泣けて、仕方がなかつたのです。

この惟規といふ人は、妹の式部ほど、緻密な頭をもつてはをりませんでしたけれど、曾祖父の兼輔や、伯父の爲頼などに似て、極めて風流心に富んだ、氣さくな歌人でありました。

とりわけ彼が、賀茂の齋院(賀茂の大神にお仕へあそばされた皇女)でいらせられた選子内親王の御



殿にお伺ひ申しあげた時、はつきり名前を告げなかつたので、警衛の者にとがめられました。その際に詠んだ、

神垣は木の丸どのにあらねども

名のりをせねば人とがめけり

といふ歌は、伊勢大輔の「八重櫻」の歌や、小式部内侍の「大江山」のそれと並んで、當時、非常にもてはやされたものでした。

いふまでもなくこの歌は、さいめい齊明天皇の皇太子なかのおほえの中大兄皇子(後の天智天皇)の、

朝倉や木の丸どのにわがをれば

名のりをあげて行くは誰が子ぞ

といふ有名な御歌をもとにし、即座の機轉で詠みかへたところに、おもしろみがあるのです。

一體に惟規の歌は、かうした氣のきいた歌が多いのであつて、それもまた、一面からいへば、彼の性格をあらはしてゐるものと見られませう。

越後へ行く途中、あふさかのせき逢坂關から、都の友人に贈つた歌として名高い、

逢坂の關うち越ゆるほどもなく

今朝は都の人ぞ戀しき

といふ作などにも、さうした彼の風格を、十分に示してゐるものと思はれます。

さて、病身をいたはりながら、それでもどうか無事に、惟規は、越後の國府のある直江津に着くことができました。父爲時の喜びは、いふまでもありません。

ですけれど、今と違つて、交通機關の發達してゐない當時のことです。それでなくてさへ、長い間病氣がちで、體の弱つてゐた惟規には、山谷越えての長旅が、ずるぶんひどくこたへたのでした。それに、無事に到着することができて、父の顔も見ることができたといふ、氣のゆるみや安心も加つたのでせう。彼は、そのまま、どつと床についてしまつたのです。

なつかしい、案じてゐた子供の顔を、見ることができたといふ喜びも束の間、その子供が、明日をも知らぬ大病となつて、寢こんでしまつたのですから、爲時は、ほんたうに夜もろくろく眠ることができないほど、心配しました。

晝は、國府に向向いて、國司としての事務をとり、夜は、たち館に歸つて、子供の看病をする。

それが、毎日續いたのです。

爲時の姿は、めつきりと、ふけたやうに見えました。

憂ひの中に年が暮れて、長和二年(紀元一六七三年)の春にもなりますと、惟規には、もう到底くわいふく恢復の見込のないことが、爲時の眼にさへ、はつきりと見えてきました。しかし、惟規の氣持には、何の變化も起つてはきませんでした。

死ぬのではないか、——といふやうな不安なかげは、その顔のどこにも見出されません。むしろ、生死などといふやうなことは、彼は、一向考へてゐないやうにも見えました。けれども爲時は、死にゆくわが子の魂が、安らかであるやうに、ありがたい佛様のお話を、まだものわかる間に、聞かせておかうと考へたのです。

招きを受けて、早速、國司の館を訪れた坊さんは、

「それは、殊勝しゆせつなお考へです。ほんに、いいところにお氣づきなされた。」

と、爲時に挨拶して、靜かに病室へ通りました。そして、惟規の枕許に坐ると、死んでから後の様子を、まづ説き聞かせようとしたのです。

「この世を去つていつた者は、來世に於て、再び生をうけるまで、いはゆる、中有ちゆううの旅を續

けねばなりません。ですから、いつまでも中有にさまようてゐることがないやうに、できるだけ早く、ここを遁のがれて、淨土に生をうけることが、最も願はしいことなのです。そのためには……。」

じつと聞いてゐた惟規は、眞直に坊さんを見つめて、口を開きました。

「中有とは、どんなところでせう。」

「それはもう、廣い廣い野原のやうなところなのです。ちやうど日の暮れに、果てしのない野原へ出たと、想像してごらん下さい。日は次第に暮れてくる。あたりは暗くなつてくる。だが、前にも後にも、何も見えない。全く自分一人だとしたら、どんなでせう。中有といふのは、いはば、そんなところなのです。だから、お經文にも、『前路に行かんとして資糧無く、永く中間に住して止るところなし。』とありますよ。」

惟規は、眼を閉ぢました。そして、半ば夢みるやうな調子で、いひ續けるのでした。

「その、中有とかいふ野原にも、吹きすさぶ嵐に、木々の紅葉もみぢが散りみだれてゐることです。うか。そして、尾花も、風になびいてゐませうか。それから、その根もとには、鈴蟲や松蟲が、さぞや、すだいてゐることです。もし、さうだったら、中有の空にさまよふことが、

どうしてそんなにいやなことせう。」

坊さんは呆れ果てて、二の句がつけませんでした。そして、そのままそこを立ち去りました。

惟規が、傍の看護の者に、料紙を求めたのは、それから、間もないことでありました。起き返つて、墨を含ませた筆を握らせてもらふと、

みやこにも戀しき人のあまたあればなほこのたびは——

書いていくにつれて、墨はかすれ、字も、次第にみだれてきました。

でも、彼は必死だつたのです。満身の力をしぼると、

いかんとぞおもふ

と、なほも、残る八字を書き終へようといたしましたが、遂に、その最後の一字になつて、彼の命は、そのままつき果ててしまつたのです。

「おもふ」の「も」の字から、「ふ」の字へと續けてきたまま、彼は、がつくりと首を垂れました。「ふ」の字の點をうつことが、遂に、彼にはできなかつたのです。

ほんたうに、歌人としてふさはしい最期でありました。

結構づくめの極樂よりも、花・紅葉の美しさ、松蟲・鈴蟲の優しい音にあこがれる心は、とりもなほさず、最後まで、この世に生きることを欲する心でもありました。

歌人として生きた彼は、かうしてまた、歌人として死んでいつたのです。

年をとつてから、若い盛りの子供にさき立たれるほど、その親にとつてつらいことはないといはれてをりますやうに、惟規の死は、いかに覺悟してゐたとはいへ、爲時の心身に大きな打撃を與へないではおきませんでした。爲時は、それから、何をすゝる元氣も失つたやうにみえました。

その年の六月、爲時は、朝廷に越後守をやめさせていただきたくいと願ひ出て、そのお許しを受けたのです。そして、秋の初めの頃、悄然と都に歸つて來ました。ただ、惟規の骨と、そして、あの辭世の歌とを持つて——

出迎へた式部の氣持は、どんなであつたでせう。見るもいたましいほど、父爲時は、めつきりと年をとつてゐました。しかも、兄の臨終の話や、辭世の歌の筆のあとなど、もう、見るもの聞くもの、ただただ涙ばかりです。

「大丈夫、父上と元氣で歸らう。」

といつて、笑つて見せた兄の顔は、今もなほ、眼の前にちらついてゐます。でも、あの笑ひ顔が、今となつて思へば、永の別れを告げてゐたのでしたのに、神ならぬ身の式部には、そのわからうはずがありませんでした。

その日の夕方、縁の端に出た式部は、ふと見上げた空に、むつまじく連れ立つて渡つて行く、ひとつらの雁かりの群れを見ました。

「兄様は、今頃、どこにどうしてをられることだらうか……。」

一羽も離れず、後れず、連れ立つて行くその雁にひきかへ、自分達親子から、一人離れていつた兄惟規のことが、またしても、式部には思ひ出されるのでありました。

いつかたの雲路と聞かば尋ねまし

つらはなれけん雁のゆくへを



強もしてきましたけれど、それがために、別段、どうといふやうな病氣にもかかったことはありませんでした。ですから、今度も結局は、自分の氣がゆるんでゐるのではないかと思つて、なるべく、氣をしつかりもつていかうと、ひたすら努力をしてきたのでした。

けれども、なかなか體がいふことをきいてくれません。何としても、だるくて、何をする氣にもなれないのです。

「兄様がなくなられてから、ほんに私までが、めつきり弱くなつてしまつたやうな氣がする。」
彼女は、何度そんなに、ひとりでつぶやいたことでせう。

宮仕へに出る日は稀で、殆ど里にゐる日が續きました。

「お加減が、お悪いのではございませんか。」

召使の者達が、あまりにも冴えない式部の顔色や様子に心配して、再三尋ねるやうになつた頃には、彼女自身もまた、自分の體がほんたうでないことを、はつきりと自覺してきたのです。

かうして、式部には、床につき、藥に親しむ日が、次第に多くなりました。

祖父の爲時が、越後に下つた日から、再び母のもとに戻つて來た賢子は、母のこの病氣を心から心配して、何かと細かい點にまで氣を配りながら、一生懸命に看病するのでした。

賢子は、今年十五歳です。母一人子一人の間に育つてきただけに、彼女が母に親しみ、母を敬ふ氣持はひとしほ強く、従つて、母を慕ふ氣持も、極めて深いのでありました。式部がひどく悪い時などは、すつかりおろおろしながら、夜もろくに眠らないで、側につききつてゐるのです。その様子は、ほんたうに、傍はたの見る眼もいぢらしいほどでありました。

母の式部にとつては、それがまた、たとへやうなく嬉しいことは、いふまでもありません。賢子がこんなに大きくなつた姿を見るにつけ、心から自分を喜び、自分につくしてくれるその眞心にふれるにつけ、彼女は、ただ涙ぐまずにはをられませんでした。

それは、「よかつた。よく大きくなつてくれた。」といふ、母としての嬉し涙であり、感謝の涙でありました。そして、同時にまた、妻として、なき夫宣孝に對する責任を、無事に果し得た喜びの涙でもあつたのです。

靜かに、さうした楽しい満ち足りた氣持に浸ひたつてゐると、式部の胸に、思ひ出すともなく思ひ出されてくるのは、『源氏物語』を書き終へた時のことでした。

何年もかかつた末、あれがすつかりできあがつた時には、彼女はほんたうに、ほつとしたものでした。そして、それは、やつと書けた——といふ、單なる完成の喜びと安心とだけではな

しに、平生、押し包み、かくしにかくしてゐた自己といふものを、いろいろな點に於て、すっかり生かしきることができ、また、發表しつくすことができたところから起る、たとへやうのない楽しい氣持でありました。

式部は、今、病床に横たはつてゐて、賢子の成人を喜ぶこの氣持が、あの、物語のできあがつた時の氣持と、どこか似かよつてゐることに、はつきり氣がつかしました。そして、彼女は、ほんたうにゆつたりとした、満ち足りたものが、胸中いつぱいに廣がつてゆくやうに覺えました。そして、それが、「なすべきことはなした。」といふ、安らかな自己満足から生まれてくることを、自分ながら嬉しく思はないではをられなかつたのです。

しかしながら、依然として病氣そのものは、はかばかしくありませんでした。

六月ばかり撫子の花を見て

垣根あれさびしさまさる常夏に

露おきそはん秋までは見じ

物や思ふと人の問ひたまへる返事、九月つごもり

花すすき葉分の露やなにかく

かれゆく野邊にさえとまるらん

といふ二首の歌には、病む者としての彼女の氣持が、ほんたうによく窺はれると思ひます。

「秋までは見じ」と詠みましたが、病氣は一進一退のまま、どうにかその秋は、もちこたへるやうでした。そして、そのまま、長和四年は暮れてゆきました。

明くれば長和五年。

その新しい年がきて、まだ間もない頃、式部は、遂にこの世を去つたのです。

その最期に關しては、世の中の人にもてはやされ、後世までもいひ傳へられるやうな、すばらしい逸話も、また、哀れな辭世の歌も、何一つ残つてはをりません。

深い學問と、優れた才能とをもちながら、しかもなほ、終世、つつましやかに生き續けた式部です。さぞかし、その最期も、さうした式部にふさはしい、靜かな臨終であつたことと思はれます。

その時、式部は、三十九歳でありました。

列を離れた雁によそへて、なくなつた兄惟規を悼んだ式部は、それから二年の後、かうして

9
2

自分もまた列を離れて、ゆくへも知らず飛び去つていつたのです。
後に残つた親雁として、爲時の心は、どんなであつたこととせう。彼が、三井寺で出家を遂げたのは、それから、間もないことでありました。

十三、不滅の光

その頃はもう、くわうたのこう 皇太后とおなりあそばされてゐた、かつての中宮彰子は、長い間よく仕へてくれた式部のなくなつたことをお聞きになつて、たいへん氣の毒に思し召されました。數多い侍女の中でも、式部はとりわけ親しくされ、また頼りにもなさつてをられただけに、式部について、いろいろとなつかしい思ひ出も、ひとしほ多くあらせられたのです。

今は、みなし兒になつた賢子に對し、
「母に代つて、御殿へ上るやうに。」

といふありがたい仰せが傳へられたのは、それから、間もない頃のことでありました。

賢子自身の感激はもとより、祖父爲時の喜びと感激とは、一通りではありませんでした。かうして、賢子は、母の後を受けて、皇太后様への奉仕に、上ることになつたのです。

皇太后彰子は、くわんにん 後一條天皇の寛仁二年(紀元一六七八年)正月から、更に、たいくわうたのこう 太皇太后と申しあげることになりましたが、賢子は、引き續き、そのままお仕へ申してをりました。
太皇太后様は、式部のことをお思ひ出しあそばされては、その忘れ形見の賢子に對し、温か

9
2

いお心づかひを賜はり、また、何かとお眼をかけて下さるのでした。とりわけ、御孫にあたらせられる親仁親王（後の後冷泉天皇）が、お生まれあそばされた時には、多くの女房達の中から、賢子をお選びなされて、御乳母（おんうば）の一人として下さいました。

帝の皇子の御乳母であるといふことは、この當時、宮仕へしてゐる女房達が非常な光榮として、誰もが願ふところでありました。

かうしたことを見ましても、太皇太后の思召のほどが、十分に拜察できるであります。

賢子は、さすがにあの母の子だけあり、またその指導を受けただけあつて、立派な婦人でありましたし、歌人としても、有名でありました。さきにも擧げた、

有馬山猪名（ひまな）のささ原風吹けば

いでそよ人を忘れやはする

といふ歌は、とりわけ人に知られた歌で、小倉百人一首の中にも採られてゐることは、申すまでもありません。

なほ、その他に、有名なものとしては、

梅の花なにほふらん見る人の

色をも香をも忘れぬる世に

といふ歌がありますが、これは、太皇太后彰子が、御髪をお下しになつて、上東門院（じやうとうもんゐん）とならせられた春、庭前の紅梅が、昔ながらに、美しく咲き匂うてゐるのを見るにつけて、門院が、（まはら）後の宮として世に榮えさせられた昔をおしのび申す氣持を、詠みあらはしたものとて、名高い歌であります。

賢子は、後に、高階成章（たかしななりあき）といふ人の妻となり、數人の子供の母として、平和なその生涯を終へたのであります。

式部は、さうしたなごやかな賢子の生涯を、すべてにわたつて見ることができないうちに、世を去つてゐます。しかしながら、後世の我々が、その子賢子の一生を眺め、同時に、式部の生涯を顧みて、賢子をさうさせるために、いかに彼女が生き續けたかを思ふ時、式部もまた、一人の偉大な母であつたと、斷言することができます。

しかも、彼女の場合に於ては、賢子に對する、母としての限りないつくしみの情が、日常生活に、そのまま表現されると同時に、一方、『源氏物語』の著作となつても、あらはされたのであります。

そして、その物語のできばえが、あまりにすばらしく、いろいろな點に於て、優れた價值をもつてをりましたために、母としてよりも、むしろ、『源氏物語』の作者として、また、文學者としての名の方が、有名になつてしまひました。しかしながら、結果は、たとへどうあらうとも、あの物語が、夫に死に別れた式部の、残された幼兒をいかに育てあげていかうかといふ、母としての熱意の結晶であることは、一面に於て、否定できないところでありませう。私共は、そこに、式部に於て窺ひ得る母としての偉大な性格を、十分に認めたいと思ふのです。もちろん、彼女の書いたあの『源氏物語』が、立派な優れたものであることは、今更いふまでもありません。

それは、式部が書きあげる後から後から、世間に廣まつていきました。そして、有名になればなるだけ、なほさら、また次々に讀まれていつたのです。その讀者はいふまでもなく、朝廷の貴族達や女房達でありましたが、これらの人々は、身分の關係がやかましかつたこの時分のことですから、學問のない、そして、身分の低い人々と交ふことは、許されませんでした。ですから、そのつき合ふ範圍といふものは、極めて狭いものでありました。しかも、琴や笛など、管絃の遊びをしたり、詩歌を詠じたり、碁や雙六に興じたりすることのほかに、何ら、大

した娛樂といふものがなかつたのでありますから、物語は、さうした人々にとつて、ほんたうに、このうへもない慰安であつたばかりでなく、世の有様や、人間の生き方などを教へてくれる最上の教科書でもあつたわけで、それ故に、物語は、非常によく讀まれもし、また、手數のかかることも厭はず、次々に書き寫されてもいつたのです。

この當時、かうして讀まれてゐた物語としては、『竹取物語』『伊勢物語』『宇津保物語』『落窪物語』『交野少將物語』『住吉物語』など、百以上もあつたらうといはれてゐます。もちろん、それらは、全部、今日まで残つてはをりません。ただ、名前だけが傳はつてきたものもありますし、また、名前も傳はらず、すつかりなくなつてしまつたものも、少くないでありませう。

さうした數多くの物語の中でも、特に、この『源氏物語』は有名であり、九百年あまりもたつた今日まで、ずっと人々にもてはやされてきたといふことは、やはりこの物語に、他のどれにもまさつて、優れたところがあるからにほかなりません。

古くから、式部が、この『源氏物語』を書くやうになつた動機について、こんな傳説が傳へられてをります。――

村上天皇の第十皇女に、選子内親王と申す御方が、おいでになりました。或時、その宮様が

上東門院の御許に、

「退屈しのぎになるやうな、何か珍しい物語がないでせうか。」

と、申しておよこしになりました。そこで門院は、式部をお召しになつて、

「かういふ仰せを承つたが、どうしたものであらうか。『宇津保』や『落窪』などといふ昔物語は、今更差しあげてみても、一向おもしろくないであらう。それよりも、何か新しいものを作つて差しあげたならばと思ふが、何かよい考へはないか。ひとつ思案してみるやうに。」と、仰せになりました。

式部は、身にあまる光榮に感激して、しばらくお暇を頂戴いたしました。そして、近江の石山寺に参籠して、

「なにとぞ、御心にかなふやうな、立派な物語が書けますやうに……。」

と、一生懸命にお祈りしたのです。

時は、ちやうど八月十五夜でした。

折しも、冴えわたつた月が、琵琶の湖の上に昇つて、金色の波が、風にただけてあります。

と、これが靈感とでもいふのでせうか。式部は、急に、すばらしいものが書けさうな氣がし

てきたのです。彼女は、急いで、佛前にあつたお經を書く料紙をいただいて、一氣に書き續けました。

それが、『源氏物語』の中の、須磨・明石の巻にあつてゐるといはれます。

それから、なほも引き續いて、式部は、この寺にこもり續け、遂に五十四帖の物語を完成したといふのです。

いかにも、美しい傳説でありまして、これは、もう鎌倉期からいひ慣はされ、ずっと今日までも行はれてゐます。今もなほ石山寺には、實際、式部がこもつてゐたといふ部屋があり、式部の筆と傳へられる『源氏物語』の須磨・明石の巻も、備へられてをります。そして、このことは、昭和の新しい鐵道唱歌にもとり入れられて、「石山寺の月かけに、式部をしのぶ源氏の間……。」と、歌はれてゐることは、よく御存じであります。

とにかく、この美しいお話が、よしやほんたうに傳説であつたとしても、我々は、このお話から、當時存在してゐたたくさんのお話、大抵幼稚なものであるうへに、長い間繰り返して讀まれてきたので、次第に人々に飽かれてしまつてゐたこと、そして、それらに代る新しいもの、珍しいものを、皆が求めるやうになつてゐたといふことは、十分に考へられると思ひます。